

グローバル社会における平和構築のための大学間ネットワークの創成  
—女性の役割を見据えた知の国際連携—

平成 25（2013）年度

「国際共生社会論実習」「国際共生社会論フィールド実習」  
スタディツアー（バングラデシュ、ベトナム）  
実施報告書



2014 年 1 月

お茶の水女子大学 グローバル協力センター

はじめに

グローバル協力センターが平成 23 年度に開始した学生による国際調査(スタディツアー)は、学年や専攻の異なる学生がグローバルな視点から「共に生きる」社会について学び、実践し、発信する活動の一環として、過去 2 年間に、東ティモール、ベトナム、フィリピンで実施しました。この調査は、訪問国の社会や人々の生活状況の観察と、現地の教育者、若者、NGO の方々や国際協力に従事する日本人専門家やスタッフへのインタビューや意見交換を中心に構成され、参加者は講義や文献だけでは得ることのできない貴重な体験を通じて「平和」、「開発」、「国際協力」について考察を深めました。

3 年目となる平成 25 年度からは、正規科目「国際共生社会論実習」・「国際共生社会論フィールド実習」の一環として現地調査を実施することになりました。学内公募で選抜された調査参加者は、事前学習において当該国の政治・社会・経済状況を概観するとともに、国連、国際協力機構（JICA）、NGO で様々な形態の国際協力に従事する方々から協力の仕組みや現地での活動に関するお話を伺いました。また、参加者それぞれが関心分野やテーマについて文献による調査を行い、事前勉強会で発表・意見交換を行い現地調査に備えました。

約 1 週間の現地調査では、ベトナム・チームは幼稚園、孤児院、病院を中心に医療・社会福祉施設の見学とインタビューを行い、バングラデシュ・チームは国際 NGO の BRAC と JICA の多様な開発活動を訪問し、関係者の方々にお話を伺いました。帰国後は、現地で収集した情報を分析し、学内報告会の開催、学園祭でのパネル展示を通じた調査結果の発信を行いました。

本報告書は、スタディツアー参加者による現地調査報告とパネル展示の内容をまとめたものです。現地調査と事前・事後学習を経て、各参加学生の訪問国や社会への理解の深化と、更なる学習・研究や国際協力の実践への第一歩としてご一読いただき、忌憚のないご意見を賜れば幸いです。

最後に、調査の企画や現地での見学・インタビューに多大なご協力・ご支援をいただいたホーチミン医科薬科大学 Tuan 教授、独立行政法人国際協力機構バングラデシュ事務所の皆様、BRAC の皆様に深くお礼申し上げます。

2014 年 1 月

お茶の水女子大学グローバル協力センター長  
北林春美

## 目次

### はじめに

I. 「国際共生社会論実習」「国際共生社会論フィールド実習」スタディツアー概要 . . . .	1
---	---

### II. 学生報告

#### 1. バングラデシュスタディツアー

バングラデシュ人民共和国基礎情報 . . . . .	5
1-1 現地調査日程 . . . . .	6
1-2 参加者名簿 . . . . .	7
1-3 調査報告書 . . . . .	8
1-4 訪問記録 . . . . .	45
1-5 写真 . . . . .	83

#### 2. ベトナムスタディツアー

ベトナム社会主義共和国基礎情報 . . . . .	85
2-1 現地調査日程 . . . . .	86
2-2 参加者名簿 . . . . .	86
2-3 調査報告書 . . . . .	87
2-4 訪問記録 . . . . .	123
2-5 写真 . . . . .	145

### III. 事後学習成果（微音祭パネル）

1-1 バングラデシュスタディツアー . . . . .	147
1-2 ベトナムスタディツアー . . . . .	151

### IV. 資料

①募集概要 . . . . .	155
②全体スケジュール . . . . .	157
③事前学習（公開講座）概要 . . . . .	158

I . 「国際共生社会論実習」  
「国際共生社会論フィールド実習」  
スタディツアー概要



## 【目的】

専攻・学年を問わず開発途上国の社会・経済・政治にかかわる問題や国際協力に関心を有する学生（学部・大学院博士前期課程）が、途上国における研究・実践の実績を有する教員の指導の下で事前学習と現地調査（約1週間）を実施し、その成果をレポートにまとめて学内で発表することにより、文献を通じた学習とは異なる密度の濃い学習を行う。本年度から2単位の正規科目として実施する。

## 【事前学習】

6月7日の説明会実施後、2回の公開講座（下記）の受講、訪問国別に4回の事前勉強会を通じ訪問国の社会経済や関心分野について学習した。また、渡航前安全講習を1回実施した。

6月22日「難民と人道支援」

講師：大阪大学大学院人間科学研究科 中村安秀教授

6月29日「国際協力ボランティアへの道」

講師：国連ボランティア計画 東京事務所 長瀬慎治駐在調整官、  
JICA 青年海外協力隊事務局 池上恵美主任調査役（本学卒業生）

## 【調査実施】

1. バングラデシュ（8月31日から9月7日まで8日間）

1.1 参加学生 10名

学年	文教育学部	理学部	生活科学部	計
1	1	0	0	1
2	4	0	0	4
3	1	1	0	2
4	2	0	0	2
博士前期	－	－	－	1

1.2 引率者： 北林春美准教授、相川頌子 AA

1.3 プログラム

概要：40年の歴史を有し、年間400億円以上の事業規模と10万人以上の職員により、貧困者支援のために保健、教育、マイクロファイナンス、人権擁護、農村開発等のプ

プログラムを実施する NGO バングラデシュ農村向上委員会（BRAC）の活動を見学するとともに、日本の政府開発援助（ODA）による初等教育、母性保健分野の協力と青年海外協力隊員による活動を見学しボランティアと交流した。

## 2. ベトナム（2013 年 9 月 1 日から 9 月 7 日まで 7 日間 ）

### 2.1 参加学生 9 名

学年	文教育学部	理学部	生活科学部	計
1	1	0	1	2
2	4	0	1	5
3	0	1	0	1
4	1	0	0	1
博士前期	－	－	－	－

### 2.2 引率者： 榊原洋一教授、駒田千晶 AA、村松志野 AA

### 2.3 プログラム

概要：南部ホーチミン市のエイズ孤児院、医療施設、幼稚園、およびストリートチルドレンのシェルターを訪問し、福祉、医療、教育の現状についてインタビューを実施した。また、ベトナム戦争を経てドイモイ政策による高度経済成長を遂げたベトナムの歴史について戦争博物館等の訪問を通じて理解を深めた。プログラムの実施は榊原教授の共同研究者であるホーチミン医科薬科大学教授の支援を得た。

### 【事後学習】

スタディツアー参加者各自が提出した報告書をもとに、10 月 4 日（16：40-18：10）に帰国報告会を開催し、調査の結果得られた学びを学内で共有するとともに、11 月 9 日と 10 日に開催された微音祭（学園祭）にて調査に関するパネル展示を行った。



バングラデシュ

ベトナム  
ホーチミン市





## Ⅱ．学生報告

### 1. バングラデシュスタディツアー



## バングラデシュ人民共和国基礎情報

政体	共和制
面積	14 万 4 千平方キロメートル（日本の約 4 割）
人口	1 億 5,250 万人（2013 年 3 月、バングラデシュ統計局）、年平均人口増加率：1.37%（2011 年 3 月、バングラデシュ統計局）
首都	ダッカ
民族	ベンガル人が大部分を占める。ミャンマーとの国境沿いのチッタゴン丘陵地帯には、チャクマ族等を中心とした仏教徒系少数民族が居住。
言語	ベンガル語（国語）、成人（15 歳以上）識字率：56.8%（Human Development Report 2011 年）
宗教	イスラム教徒 89.7%、ヒンズー教徒 9.2%、仏教徒 0.7%、キリスト教徒 0.3%（2001 年国勢調査）
主要産業	衣料品・縫製品産業、農業
実質 GDP 一人当たり GDP	1,156 億ドル（2013 年、バングラデシュ中央銀行） 766,5 ドル（2012 年度、バングラデシュ財務省）
経済成長率（GDP）	6.3%（2012 年度、バングラデシュ財務省）
消費者物価指数上昇率	7.97%（2012 年度、バングラデシュ中央銀行）
労働人口市場	5,370 万人 農業（48.1%）、サービス業（37.4%）、鉱工業（14.6%）（2010 年度、バングラデシュ財務省）
GDP 内訳	サービス業（49.5%）、工業・建設業（31.3%）、農林水産業（19.3%）（2012 年度暫定値、バングラデシュ中央銀行）

## 略史

年月	略史
1947 年 8 月 14 日	パキスタン（東パキスタン）として独立
1971 年 12 月 16 日	バングラデシュとして独立

※参考 URL：外務省ホームページ

<http://www.mofa.go.jp/mofaj/area/bangladesh/data.html> (2013 年 12 月 23 日にアクセス)

## 1. バングラデシュスタディツアー

### 1-1 現地調査日程

8月31日 (土)	成田発 TG641 バンコク経由 ダッカ着 TG321 JICA バングラデシュ事務所 安全ブリーフィング 「国際協力に関するキャリアについて」JICA 佐藤祥子保健アドバイザー講義
9月1日(日)	BRAC フィールド見学(1日目) ガジプール県事務所 マイクロファイナンス組合集会见学 コミュニティ・エンパワーメント・プログラムの女性グループの集会见学 保健プログラム担当者、ボランティア聞き取り 乳製品工場見学
9月2日(月)	BRAC フィールド見学(2日目) マニクガンジ県事務所 人権・法教育クラス見学 小学校(ノンフォーマル教育)見学 零細企業向けマイクロファイナンス受益者訪問 アイシャ・アベッド財団手工芸製作所見学 ソーシャル・エンタープライズ(種苗販売、衛生ナプキン製作)見学
9月3日(火)	初等大衆教育省初等教育局 JICA 橋本和明専門家他講義 「バングラデシュ初等教育の現状と JICA の協力」 ダッカ市貧困地区の NGO 小学校訪問 青年海外協力隊員(小学校教育)との面談
9月4日(水)	ノルシンディ県 JICA 母性保護サービス促進プロジェクト2見学
9月5日(木)	JICA 事務所「バングラデシュの開発課題と JICA の国別援助方針」 京都大学大学院短期ボランティアの報告会傍聴 農業組合省手工芸品販売店「カルポリ」見学 青年海外協力隊員(手工芸、接客)、シニア隊員(マーケティング)面談 グラミン・ユニクロ店舗見学 Aaron Shop (BRAC 関連の手工芸品販売店) 見学 青年海外協力隊員、JICA スタッフとの懇親会
9月6日(金)	ダッカ発 TG322 バンコク経由
9月7日(土)	成田着 TG640

## 1-2 参加者名簿

氏名	学年	学科・専攻
須崎 情恵	1	文教育学部人文科学科
片山 珠	2	文教育学部言語文化学科英語圏言語文化コース
高木 優希	2	文教育学部言語文化学科グローバル文化学環
生津 千里	2	文教育学部人間社会科学科グローバル文化学環
柳下 明莉	2	文教育学部人間社会科学科グローバル文化学環
泉 有香	3	文教育学部人文科学科グローバル文化学環
乙村 瞳	3	理学部生物学科
有田 美玖	4	文教育学部言語文化学科グローバル文化学環
松本 江利奈	4	文教育学部人文科学科地理学コース
長屋 裕子	M2	人間文化創成科学研究科人間発達学専攻臨床心理学コース
北林 春美	准教授	グローバル協力センター
相川 頌子	AA	グローバル協力センター

## 1-3 調査報告書

### バングラデシュにおける女性の存在

須崎情恵 文教育学部人文科学科 1 年

#### 1. 調査のテーマ

母性保護プロジェクトの必要性・重要性を考えることでバングラデシュにおける女性の存在について考える

#### 2. 調査設問

- ・母性保護プロジェクトの必要性と重要性
- ・バングラデシュにおける女性の存在

#### 3. 調査結果

まず母性保護プロジェクトの必要性についてであるが、バングラデシュにおける妊産婦と乳幼児の死亡率が高いという事実がある。ミレニアム開発目標（MDGs）を見れば順調に死亡率を減少させており達成に順調に近づいているのは確かではあるが、ユニセフの『世界子ども白書』（2012 年版）によると、バングラデシュの乳児死亡率は出生 1000 対 37 人、5 歳未満児の死亡率は出生 1000 対 46 人、妊産婦死亡率は出生 10 万対 240 となっている。2003 年と比べると約 3 分の 2 に減少しているが、乳幼児・5 歳未満児の死亡率を日本と比べてみると、約 15～18 倍という高い死亡率を保っている。また死亡率だけでなく、日本などの先進国と比較してみると、その死因は、先進国に生まれていれば死ななくてすんだかもしれないと思われるものである。Birth Planning Session は、妊婦さんがいるという情報を得たらその家に訪問し、一つの家庭単位で話し合う。伝統的に信じられている間違った風習についての誤解を解いたり、妊娠中の 5 つの危険な状態についてカードを使い妊婦さんのみでなく家族全員がサポートできるように促す。また、妊娠したら普段の生活の中で気を付けることや非常事態が起きたときにどのようなルートで病院まで妊婦さんを連れていくかなどを話し合い、それを家庭内で確認し合うことで、より安全な出産ができるようになる。また、農村の中で開かれる村のコミュニティでの話し合いをする Community Support Group では、台帳と地図を作成しコミュニティ内での妊婦さんの健康状態やお産について徹底的に管理する。また、妊婦さんの健康状態や緊急時における対応について確認し合うことで、安全なお産のためにコミュニティ全体で協力しているのだ。出産して 30 分後の運搬の際に亡くなってしまった乳児、出産の一週間後に亡くなってしまった妊婦さんがいるというお話もあったが、何らかの遅れによるもの、保健・衛生的な問題によるものなど死亡に至る要因は様々であるが、そういった過去の経験があるからこそ、現在のようなコミュニティでの協力関係が生まれたのだと感じられた。

バングラデシュにおける女性の存在については、イスラム教国家という点もあり、夫に

よる妻に対する暴力を、「あっても仕方ない」という考えをもっている女性がいるという DHS のデータにもあるように、男性に比べて残念ながら女性の人権が保障されていないような色々なケースのお話を聞いた。だが、BRAC の女性のヘルスワーカー・ヘルスボランティア方々が人々の健康のために活躍し、繊細で美しい手工芸品の製造や生理用のナプキンの生産にたくさんの女性が関わっている。そういった点を考えると、バングラデシュにおいての女性の役割はかなり大きいように感じられた。街では、工場などに出勤する女性や学校へ登校する少女たち以外は、ほとんど女性の姿を見かけられなかった。しかし、そのような縁の下での力持ちのような女性たちが持つ大きな役割の結果が、バングラデシュの成長につながっているのだと見受けられた。

#### 4. 考察

他の発展途上国とも共通するが、バングラデシュにおける乳幼児と妊産婦の死亡率の高さから、母性保護の問題はかなり大きいことを感じた。しかし先に述べたように、女性が活躍している例があり、女性がもつ力が大きいことを感じながら、母性保護プロジェクトによって妊産婦や乳幼児の死亡率を減少させ、落とす必要のない命が救われ、女性の力が今後さらに波及していくことでバングラデシュがよい方向へと発展していくことが期待できるのではないかな。

#### 5. 調査に参加した感想

たくさんのことを感じ、とても勉強になった一週間の時間だった。BRAC や JICA による国際協力によるプロジェクト、小学校教育、母性保険など、様々な分野において見学していくことであらゆる問題を多面から考えてみることができ、またそうするからこそ見えてくる発見というものがあった。

スタディツアーに参加するまでは母性保護に強い関心はあまりなかったのだが、バングラデシュに行き、現地の問題やそれに対する取り組みを間近で見学することで、バングラデシュにおける母性保護の必要性や重要性をしっかりと感じることもできた。また、女性の存在についても、ただ男性より差別をされ下に見られているわけではなく、女性のヘルスワーカーさんのように女性が大活躍している例もあり、そのような姿を見ることによって、もちろん女性の人権の侵害の問題は存在するが、自分の中に勝手につくられていたイスラム教国家特有の男尊女卑や人権の問題などといったものが一概には言えないということを知ることができた。母性保護や女性による活動を目の当たりにすることで、バングラデシュにおける女性の存在について深く考えてみることのできる機会になった。

#### 6. 参考文献

大橋正明、村山真弓『バングラデシュを知るための 60 章』（2003 年）明石書店  
一回目の勉強会での、平岡久和さんの『バングラデシュの保健状況と母性保護とサービス強化プロジェクト』のハンドアウト



## バングラデシュにおけるジェンダー教育

片山 珠 文教育学部言語文化学科 2 年

### 1. 調査のテーマ

バングラデシュにおけるジェンダーの変化とそれに関わる教育分野を中心とした取り組みを調査し、今後のジェンダー教育のあり方を考える。

### 2. 調査設問

バングラデシュのジェンダー観はどのように変化しているのか。

ジェンダー問題における教育はどうあるべきか。

### 3. 調査結果

始めに、バングラデシュにはパルダという伝統が存在し、女性は原則として外に出てはならず、家でも限られた男性としか接触が認められていない、などといった厳しい行動規範が課されていたという事実がある。しかし近年の大幅な経済発展とともに、ジェンダーの価値観も多様化してきている。以下、BRAC が実施している女性のエンパワーメントを実現するための 2 つの取り組みを示す。

#### 〈Community Empowerment Program〉

BRAC によるガジプール県での Polli Shomaj meeting では、村の女性であれば誰でも参加することの出来る総会と、11 人の幹部によって結成されている執行委員会が毎月交互に行われる。私が見学した総会では、自主的な参加にもかかわらず多くの女性が集まってくる姿から彼女たちの意識の高さが伺えた。このミーティングの大きな特徴の一つとして、議題を村の住民が自ら提案できる仕組みが整っている点が挙げられるだろう。住民が今話し合いたいと提出した議題の案をもとに、それらを執行委員会で話し合い、翌月の総会で扱うものを決定する。したがって、住民の関心に沿ったテーマを扱うことができ、地域の有力者や BRAC 職員によるトップダウンな指導では聞くことの出来ない彼らの最新のニーズに応えることができるのである。この仕組みが成り立っているということは、ミーティングの存在が身の周りに対する日頃の問題意識を高めるのに効果があることを証明づけていると言えるだろう。中には参加者の個人的な悩みやトラブルが議題となってその一人のために皆で話しをすることもしばしばあり、そうした助け合いを通して団結が生まれ、コミュニティ内での女性という存在が男性から確立され発言力強化につながっていくことを実感した。また、ここのミーティングメンバーの中からは過去に 3 人の女性が選挙に立候補しており、女性のリーダーシップ育成にも少なからず影響のある取り組みだと言える。やはり主体性を重視した活動だからこそ、彼女たちの自立心に繋がっていくのではないかと思う。また、苦しんでいるのは自分だけではないと知ることも、自信や活力を生む原動力になっていると感じた。

しかし、議題の中にはジェンダーに関わるトラブルもよく出されることから、男性から女性への暴力はまだ多く、弱者と強者のジェンダー関係が成立してしまっていることがわかる。だが、今までは誰にも言えずに一人で問題を抱えていた人らがこうして苦しみを口にできるようになったという点では大きな成果であると言えるだろう。今回のミーティングでは女性が DV やレイプをされた場合の対処法について話された。ほとんどの女性が被害を受けた場合、その土地の有力者に仲裁を頼んで示談すればそれでよしという考えを持っているが、村の有力者というのは汚職によって公正に裁いて罰しているとは言えないため、必ず警察に訴えるようにというのが結論であった。このような実践的な対処法の知識を得ることは、自分を守るために不可欠である。ただ、今回様子を見てみると被害を受けること自体が大前提になっており、そもそもそういった暴力が人権侵害なのだといういわゆる人権教育を行うことの必要性も感じた。

#### 〈Human Rights and Legal Education Class〉

Manikganj では、BRAC が中心となってそこに住む女性を対象とした法律などを含む質の高い人権教育を行っている。12 日間で 1 セッションの授業になっており、女性なら誰でも参加することができる。先生はパラリーガルで、18 年間にわたり女性の権利に関する教育に携わっており、週 2 回は法律相談所で訴訟の手伝いもしているという経験豊富な女性である。授業は生徒が丸くなって座り、真ん中に先生が立つ。参加者の女性の中には字の読めない人もいたためイラストのある教材を用いて説明しており、内容は、衣食住、教育、健康など、人間が生きていくのに必要なことを考えることから始まり、法の下での平等の概念が教えられる。具体的には、性別に関わらず同じ権利を持っていること(男女ともに外で働き、家事も分担する必要があること)、信仰する宗教が異なっても皆人間として同じ権利を持っていること、貧富の差や人種に関わらず、皆平等の権利を有していることなどが挙げられる。また、犯罪などの悪事をはたらいた人に法を介さずに自分たちのやり方で罰を与えてはならず、必ず法を通して裁かなければいけないとの説明も含まれていた。

ここでの訪問で特に興味深かったのは、参加者の生の声が聞けたことである。ある参加者は、授業を取る前は法について何にも知らなかったため怖い思いをしていたが、授業で知ってからは自分が強くなったような気がする」と語り、教育がもたらす心境の変化を知ることができたと同時に知識は自分を守る重要な武器であることを再確認した。また、女性のこうした活動に対する夫の反応についても、最初は毎日出かけていくことにあまり理解を示さなかったが、最近では勉強することの大切さを認め、授業に行くことに賛成するようになったという。もちろんこれは参加者のほんの一部の意見ではあるが、それでも同じコミュニティ内にこうして変化を実感している人やロールモデルにできる人がいるのはとても大きなことである。

#### 4. 考察

上記の通り、バングラデシュでは女性のエンパワーメント実現のための取り組みが盛んであり、女性自身も教育や環境の改善に強い意欲を持っている傾向にあることが伺える。この背景には、貸し付ける対象を女性にしたマイクロファイナンスのある程度の成功が影響していると考ええる。女性がジェンダーや人権について学ぶ余裕を持ち、またそんな女性を肯定し価値観を変える余裕を男性が持つには、教育の場があるだけではなく最低限の人間の安全保障が確保された生活をしていることが前提になるだろう。その基盤を作る過程において、失敗もあったにせよ、マイクロファイナンスで生活の立て直しに成功した女性がいるのも事実であり、その栄光とも言えるものが地位向上への自信や熱意につながっているのではないか。また縫製業を中心とする女性の雇用の場の拡大が行われてきたことも大きい。今回見学したのはどれも最貧困層ではない上に、成功している例だけを見せて頂いたことから一概にジェンダー格差が縮まっているとは言えないが、パルダが根強く守られていた頃とは明らかに変化が生じていると言える。それには女性が経済的にも発言力でも力を持ち始めたという面もあれば、一方で女性の地位の地域間格差の拡大という面もある。ジェンダーは国の文化全体に深く根付いているため、すぐに変えることは難しい。しかし、ただ人権の知識を教えるのではなく、ひとつひとつの価値観に丁寧に向き合い、コミュニティの中で集まって共に考えるという教育方法は今後も高い可能性を秘めていると思う。彼ら自身が自分たちの置かれている状況の不合理性気づき、意識化し、自ら変えたいと思うこのプロセスがジェンダーを考え続ける上でまずなによりも必要であるし、自国の文化と上手く共存した平等の実現につながると考える。そうした地域のコミュニティに根ざしたジェンダーを共に考える教育を、これからより具体的に考えていきたい。

#### 5. 調査に参加した感想

事前学習で得ていた文字や映像による情報からは伝わりにくい、めまぐるしい変化の中を生きているバングラデシュの勢いを肌で感じ、この国の今後の姿に強い関心を持った。調査は一週間という短い期間だったが、幅広い分野における様々な活動を自分の目で見て、また直接活動に携わっている現地の方からも職員の方からのもお話が聞けて、とても有意義で刺激の多い時間だった。彼らとの出会いを通して得た感動や新たな疑問をこれからも新鮮なまま持ち、時間をかけて考え続けたいと思う。また、最終日の JICA の方々との交流会では、開発の最先端で活躍する人と長時間にわたってお話をするという貴重な機会をいただき、自分はこれから国際協力にどのように関わっていきたいのか、また、開発だけにとどまらず人生についても改めて深く考えさせられる大変良い経験となった。私は今まで、開発課題について勉強すればするほど自分の無力さを突きつけられ、ポジティブな発想を持つことがあまりできなかったのだが、今回実際にコミュニティ内で自立してうまく回っている取り組みを見たり、現地の方の熱い向上心を感じたり、活動に関わっている方々の

強く前向きで希望を持った眼差しに触れたりする中で、ふと自分は微力ではあっても無力ではないと信じられるようになった。この経験を糧に、今いる環境を最大限活用してさらに学びを深めていきたい。

## 6. 参考文献

キャサリン・H・ラヴェル「マネジメント・開発・NGO」2001、新評論

JICA 資料「バングラデシュにおける貧困削減と人間の安全保障」

[http://jica-ri.jica.go.jp/IFIC\\_and\\_JBICI-Studies/jica-ri/publication/archives/jica/field/pdf/200511\\_pov\\_08.pdf](http://jica-ri.jica.go.jp/IFIC_and_JBICI-Studies/jica-ri/publication/archives/jica/field/pdf/200511_pov_08.pdf)

## BRACの実践例から学ぶマイクロファイナンスの二面性

高木優希 文教育学部言語文化学科グローバル文化学環2年

### 1. 調査テーマ

貧困解消に向けたより効果のあるアプローチとしてバングラデシュ（以下バ国）で実施されているマイクロファイナンスの現状を知り、その特徴や有効性を調査する。今回は国際NGO「BRAC」が採用しているマイクロファイナンスプログラムに焦点を当てる。

### 2. 調査結果

#### (ア) BRACのマイクロファイナンス制度

BRACではバ国の各地でマイクロファイナンスを実施しており、農業、出稼ぎ、小規模事業という三種類の融資に分けられ、以下のように対象者の経済状況に合わせ段階別にプログラム化されている。

##### Ultra poor program

非常に貧しい女性たちがマイクロファイナンスに参加する前段階として貧困から脱却できるよう、資金援助やソフトローンを行う

↓

##### ① Dabi

Ultra poor の女性たちにグループでの無担保のマイクロファイナンスと訓練を行い、ここを卒業すると本格的なマイクロファイナンスを受けることが許されるようになる

##### ② Progoti

性別に関わらず零細企業への融資を行う

このように、対象によって内容の異なる段階的なプログラムを実施し、貧困層女性のエンパワーメントから最終的にはビジネス向けの融資まで性別や年代に関わらず幅広い層に融資を通して援助を行うことができています。(Dabi と Progoti については詳細を後述)

#### (イ) 地域住民を組み込んだプログラムシステムと組織運営

BRACの活動を調査して驚いたのは、その組織マネジメントが非常によく整備されており、加えて地域住民をそこに上手に組み込むことで地域との結びつきを強めていた点である。まずプログラムオーガナイザーやエリアマネージャなどの各地域のプログラム実施を全体的に統括するBRAC職員がおり、彼らは事前に対象となる村落を訪問し各世帯の状況を調査する。その後村民を中心としたグループ形成が行われそれを基にプログラム運営が開始される。そして住民の中からリーダー役を選び、その者はBRAC職員と共に運営を担うようになる。ただ職員だけで組織化するのではなく村の事情をよく知る者を組織のリーダーに据えることで、一方通行的な運営になることを避け村民を第一に考えた援助を

可能にしているようであった。

#### (ウ) BRAC マイクロファイナンスプログラム

##### 「Dabi」

今回訪れた村は最貧困層 (ultra poor) とされそのうちのマイクロファイナンスを受けるトレーニング段階である「Dabi」プログラムが実施されている。対象は村の女性のみでお金は夫や父親には渡されない。彼女たちはプログラムオーガナイザーやプレジデント (女性の中から選出) の指導の下、家畜の飼育や豆の栽培をしながら2年のトレーニングを経たのち本格的なマイクロファイナンスを開始できる。

プログラムに参加するためには BRAC に自分と夫 (または父親) の写真を載せた身分 ID カード、申請書などを提出しなければならない。プレジデントとプログラムオーガナイザーはそれらの書類を BRAC にあげ、審査を経たのち融資が許される。

借りた月の翌月から返済義務が生じ、月1回1年間で借りた金額と利子を返済する。毎月返済金額は同じである。

夫が経営する雑貨店拡大のためや何度も借りていて土地の購入や家の修繕のために使用したなど、女性自身が何かをするためではなく夫や家族のために借りるという女性が多かった。(女性たちのほとんどが既婚で~3人の子供がいた) また、既に返済を終え、ただ貯金をするために参加する女性もいた。6年で倍になるなど非常に利子が高いそうである。

(個人情報や返済記録をつける通帳) (メンバーが集まる月1回の集会の様子)

##### 「Progoti」

性別問わず個人を対象としたビジネス向けマイクロファイナンスである。融資には国民 ID、商売許可証、権利書の他に借りる金額の3倍の資産と連帯保証人が必要で、BRACの事前審査で財務的に返済能力があると判断されなければ融資は受けられない。

今回訪ねたのは商店街に店を構えるホメオパシードクターをしている男性で、過去にマイクロファイナンスを受けて成功し、の後12年続けてローンをしている。このプログラムを非常に信頼しているようであった。マイクロファイナンスは利子が高い (年率27%) ので財産があるなら一般銀行から融資を受ければよいのではと思ったが、男性曰く利子は高いが融資の基準が緩く面倒が少ないため非常に楽だという理由でマイクロファイナンスを選んでいるとのことだった。しかし実際には、Progotiで対象となる企業の規模は一般の銀行の貸付対象としては小さすぎるため銀行からローンをすることはできないという記述がBRACのホームページでされていた。また、毎年お金を借り続け事業を拡大していく方法では返済の負担が大きくなり終わりが見えないのではないかという疑問を持ったが、BRAC職員曰く返済できるということは利益があるということで、借り続けることは悪いことではないらしい。

### 3. 考察

BRACのマイクロファイナンスには2つの側面がある。1つめは「D a b i」のような絶対的貧困解消に向けたアプローチとしてのマイクロファイナンス、2つめは「P r o g o t i」のような零細または小規模企業向けのマイクロファイナンスである。前者の特徴としてあげられるのは、地域に根差したものであることだ。組織運営の中に地域住民を組み込み、地域と結びつくことで信用を基礎にプログラムを展開することで、都市よりも農村部に多い貧困層のエンパワーメントに大きな効果をもたらすのではないだろうか。後者はよりソーシャル・ビジネス化している点が特徴だ。貧困層援助を目的としたマイクロファイナンスからレベルを上げ、銀行より貸付基準を緩く設定しつつもビジネスライクな手法で個人事業主を援助している。貧困から脱出した人間が今度はバ国経済への寄与を手助けできるようなソーシャル・ビジネス色の強いプログラムなのだ。貧困撲滅という絶対的な目標を達成するためにはただ貧困層をなくせばよい訳ではない。BRACはこれらのプログラムを対象者の状況に応じて段階的に使い分け、貧困層の底上げをはかりながらもバ国の経済発展をビジネスとして支援することでより大きな効果を与えている。また、BRACは世界最大のNGOと呼ばれるほど非常に大規模組織でありながら地域に密着した組織マネジメントや支援システムの整備を細かく行い対象に合わせた支援が行っている点も成功理由の一つであろう。

### 4. 調査に参加した感想

調査に参加以前のマイクロファイナンスのイメージは、農村の女性が融資を受け家畜飼育などでお金を得るといったソーシャル・ビジネスといっても小規模で援助の色が濃いうに感じていた。しかし実際に現場を訪ねてみるとそれは一側面に過ぎず、よりビジネス的なプログラムも実施されていることが分かり非常に驚いた。NGOと企業の融合組織で、国際協力とビジネスの組み合わせ方が非常に上手なBRACを今回の調査したことでソーシャル・ビジネスとしてのマイクロファイナンスに希望を感じた。

一方、プログラムごとのローン返済率といったアセスメントに関しては詳しく調べることができず問題が見えにくかったという点が課題として残った。BRACは独自の評価部門を持ち様々な調査を行っているが、それらの報告書のみならず外部からの評価などについてももう少し調べてみる必要性を感じる。

そして今回はBRACしか訪問できなかったが、他団体のプログラムと比較しその特徴などを知ること、マイクロファイナンスの課題やより効果的な手法などが見えてくるのではないかと思う。

## 5. 参考文献

菅正弘

『マイクロファイナンス 貧困と闘う驚異の金融』（中央公論新社 2009年発行）

キャサリン・H・ラヴェル

『マネジメント・開発・NGO 「学習する組織」BRACの貧困撲滅戦略』（新評論 2001年発行）

BRAC ホームページ（2013年11月24日 閲覧）

マイクロファイナンス紹介ページ <http://www1.bracglobal.org/content/microfinance>



## バングラデシュにおける女性のエンパワーメントについて

生津千里 文教育学部人間社会科学科グローバル文化学環 2 年

### 1.調査のテーマ

バングラデシュにおけるジェンダー間の格差や女性のエンパワーメントについて考える。  
世界最大の NGO である BRAC が女性のエンパワーメントを進めるにあたり、女性の視点やその役割はどのように考慮されているのかについて考察する。

### 2.調査設問

バングラデシュの女性の地位は一般的にどのように社会に位置付けられているのか。現地において視察を行った BRAC による **Community Empowerment Program** や **Human rights and Legal Education** を取り上げて考える。それらはどのように実施され、特に女性の地位向上にどのように作用したのか。その結果として男性側やコミュニティにはどのような変化がもたらされたのか、ということを考察していく。更に、視察をした上で、バングラデシュの女性の地位向上のために必要だと思われることを加える。

### 3.調査結果

#### 3-1.バングラデシュの女性の地位について

バングラデシュはイスラム圏の国家であることもあり、山形によると、「バングラデシュにはパルダ (Purdah) と呼ばれる行動規範があり、女性は外に出ず、家の中でも限られた男性家族・親族以外とは接触しない」「外出の必要があるときにはブルカと呼ばれる頭から足までを覆う着物を身に付ける」などが規定されている。現地では通りを歩く女性たちや農村の女性を見ると、基本的に女性はヴェールを身に付けていたが、少数ではあるものの中には身に付けていない人も見かけた。

Demographic and Health Surveys (2011)によると、女性が男性に意見したときや性交渉を拒んだとき、夫に無断で外出した時に、夫からのドメスティック・バイオレンスを当然であると認めている一般女性は 3 分の 1 に上る。この傾向は、都市部より農村部、富裕層より貧困層、高学歴者より低学歴者に強く表れている。これらは年代別にみても差異が見られない。女性は家庭において、ある程度の決定権を持っていると言えるかもしれないが、それは限られた範囲内であり、「妻自身の健康・子どもの健康・日用品の購入・妻の家族や親戚の訪問の自由」の 4 つの内、その全ての決定権を持っていない女性は 20 歳から 24 歳の女性で 23.2%、その他の年齢でも 15%前後に上る。

#### 3-2.Community Empowerment Program について

視察した Gazipur 県のコミュニティでは月に 1 度ミーティングが開かれる。ミーティングには、コミュニティの女性なら誰でも参加できる General Meeting と、11 人のメンバーからなる Executive Meeting があり、毎月交互に開かれる。Executive Meeting で取り上げられた内容が次の General Meeting でコミュニティ全体に共有され、Executive Meeting の際に決められた議題について住民が話し合い、アドバイザーが招かれることもある。バングラデシュには伝統的な村裁判と呼ばれるコミュニティ独自の処罰の方法が存在する。村裁判は現在にも継承されており、問題は権力者によって解決される。処罰される人の人権が無視されることを防ぐため、BRAC は警察などの公的な組織に報告するように呼びかけている。また、犯罪自体を防ぐために、女性の教育が重要であることや権力者に頼りすぎないことなどを伝えていた。

### 3-3.Human Rights and Legal Education について

Manikganj 県で視察した Human Rights and Legal Education では、農村女性を対象とした人権教育を行っている。視察では、講師が絵を用いながら女性たちに質問も交えながら指導していた（写真 1）。集まっていた女性の中には、コミュニティにおいて女性を対象として 12 回連続して開かれるレクチャーが始まった当時は、それに参加するため外出しようとする、夫にどこに行くのだと、参加することをあまり快く思われていなかった者もいた。しかし、出席を重ねていくうちにそのレクチャーの意味などを夫側も理解したためか、彼女をとめなくなったという。彼女自身も法律を学ぶことに対して喜びを見出しているようだった。

（写真 1）レクチャーの様子



### 4.考察

BRAC の Community Empowerment Program や Human Rights and Legal Education の視察の際、一人ひとりの参加者が主体的に参加しているという印象を受けた。BRAC のスタッフや参加女性の話からも、これらのプログラムは女性の地位向上に役立っているようであり、特に今回の実習では、女性の地位の低さに直面させられることがあまりなく、BRAC によるプログラムは非常に順調に進められているように見えた。

しかし、Demographic and Health Surveys (2011)にあるように、3 分の 1 の女性は、夫の妻に対するドメスティック・バイオレンス(DV)を認めている。学歴、階級、居住地域によって、DV に対する考えからの差異はあるものの、年代別の差異があまり見られない。また、女性の家庭における決定権や発言権は十分に認められているとは言い難い。1999-2000 年版の Demographic and Health Surveys とも比較したが、女性の発言権や DV に関して、

多少は改善されているものの、あまり大きな変化は見られなかった。これらのことから、親から子へ、あるいはコミュニティの中でジェンダー観は継承されていると予測され、そのために家庭内における女性の地位の向上は変化が難しかったと考えられる。それらは今回の視察では表面的には見ることはできなただけであり、データとしては残っていることから、実際に女性が十分にエンパワーメントされていくにはまだしばらく時間を要するだろう。BRAC の活動の効果がどれほどのものかはあまり明確にはわからなかったが、それらの活動によって救われている女性は実際に存在している訳であり、これらの活動を今後も継続していくことには大きな意味があるはずだ。知識を与えることはエンパワーメントをする上での最も重要なことの 1 つであり、知識を持っていることによって自分に必要な情報や機関にアクセスできるだけでなく、自尊心を持つこともできる。そのため知識を持っていないことのハンディキャップは大きい。しかし、これらの教育は女性にだけ焦点をあて、与えていくべきものではない。Community Empowerment Program は女性だけを対象に開かれていたが、私はそこに少しの疑問を感じた。無論、現在男性よりも立場が低い女性たちへの教育は必須である。だが、ジェンダーは男女の関係性の上に成り立つものであるからこそ、男性に対しての Human Rights Education も行われるべきなのではないか。女性の地位を向上させるためには男性側の理解も不可欠であるために、男性側に対しての教育も与えられるべきであり、その他、男女間の対話もなされるべきであろう。その際は、対等な立場で話し合えるように、男性側・女性側の立場を仲介する立場の人もおくなどの配慮も必要である。

## 5.調査に参加した感想

今回の実習では、たくさんの場所、プロジェクトを視察することができた。Community Empowerment Program の視察は、事前にビデオで見ていたものと同様に行われており、その場に立ち会えたことに感動した。女性たちの主体的に学ぼうとする姿が印象的だった。BRAC やスラムの小学校を訪問した際、物や施設の不足はあるものの、子ども達はみんな勉強したいという気持ちがあり、学校に来ることが楽しそうに見えた。このような学校こそが、本来学校としてあるべき姿なのかもしれない。実習では、色々な場所を視察できた一方で、1つ1つにかけられる時間が少なかったことが残念に感じた。また、バングラデシュ人は皆優しく、「見られる」ということをそれほど気に留めていないようにも思われた。だが、先進国に生まれた人間として、途上国を「見る」と言う行為に私自身、少し違和感が残った。やはりたった 1 週間のツアーでは、現地の人々と同じ目線に立つことはできない、と感じざるを得なかった。もちろん、学校の実習であるという建前上、バングラデシュの治安も踏まえ、安全性を第一に考えるのは当然であるのであろうが、きれいなホテルに泊まり、バスに乗り、おいしいご飯を食べるなど、途上国に足を運んだとしても、結局自分は center of center の一人に過ぎず、守られた中で生活している。自分たちはこの実習で様々な場所を訪れ、たくさんの物を学んだが、私たちはバングラデシュやその国の人達

に何も与えられなかったのではないかと感じた。もう少し、現地の人との交流のようなものがあればさらに良かっただろう。しかし、この実習やその事前学習を通して学べたことはたくさんあり、それらがこの先の将来や学校生活を考える上でも意味を持ってくることは確実である。この実習で学んだことをきちんと消化していきたい。

## 6.参考文献

山形辰史『第8章 バングラデシュにおける貧困削減と人間の安全保障』

[http://jica-ri.jica.go.jp/IFIC\\_and\\_JBICI-Studies/jica-ri/publication/archives/jica/field/pdf/200511\\_pov\\_08.pdf](http://jica-ri.jica.go.jp/IFIC_and_JBICI-Studies/jica-ri/publication/archives/jica/field/pdf/200511_pov_08.pdf) (2013/08/18 閲覧)

ロキア・ラーマン・カビール著 大岩豊訳『7人の女の物語 バングラデッシュの農村から』  
2000、連合出版

「Demographic and Health Surveys – Bangladesh 2011」(2013/08/19 閲覧)

<http://www.measuredhs.com/pubs/pdf/FR265/FR265.pdf>

「Demographic and Health Surveys - Bangladesh 1999-2000」(2013/08/19 閲覧)

<http://www.measuredhs.com/pubs/pdf/FR119/FR119.pdf>

## バングラデシュにおける貧困対策 - NGO BRAC のあり方 -

柳下明莉 文教育学部人間社会科学科グローバル文化学環 2 年

### 1. 調査のテーマ

バングラデシュにおける貧困に対するアプローチを学び、そこに行政、企業とは違う形の組織がどのように関わって行くのかを考察する。

### 2. 調査設問

現在のバングラデシュの貧困に対して BRAC はどのような取り組みをしているのか。またその取り組みはどのような影響を与えているのか。

### 3. 調査結果

はじめにバングラデシュの簡単なデータを見る。UNDP のデータによるとバングラデシュの HDI (Human Development Index) は 2012 年の段階で 187 カ国中 146 位となっており、1980 年から 2012 年にかけては年に 1.5% 上昇したが未だに南アジアの平均は下回っている。またバングラデシュの一人当たり GDP は 766,5 ド (2012 年度、バングラデシュ財務省) で低所得国に区分されている。現地調査では現地の NGO である BRAC と Jica が行っている活動を見学した。この報告書では特に BRAC に注目し、BRAC とはどのような団体で現在のバングラデシュの貧困に対してどのように取り組んでいるのかをまとめる。

イアン (2010) によるとバングラデシュには推定で二万の NGO があり、かつ二国間援助も NGO に対して多くなされている。BRAC (Bangladesh Rural Advancement Committee バングラデシュ農村向上委員会) は、東ベンガル生まれのファザル・アベド氏によって設立された。1972 年の設立当初は独立にあたっての戦争犠牲者や難民への救援を目的としており名称も Bangladesh Rehabilitation Assistance committee (バングラデシュ復興支援委員会) であった。その後名称を変更し、バングラデシュの貧困をなくすことを目的として活動してきており、現在では世界最大の NGO と言われバングラデシュを合わせて 11 カ国で活動している。

BRAC の活動分野はとても広く、次の 15 項目が挙げられる。

- ① Agriculture and Food security    ② Community Empowerment
- ③ Disaster, Environment and Climate change    ④ Education
- ⑤ Gender justice and Diversity    ⑥ Health nutrition and population
- ⑦ Human Rights and legal aid services    ⑧ Microfinance    ⑨ Road safety
- ⑩ Safe migration    ⑪ Social enterprises    ⑫ Socially responsible Investments
- ⑬ Targeting Extreme Poverty    ⑭ Water, Sanitation and Hygiene
- ⑮ Support Programs

このうち今回の調査では下線をつけたもの計 10 か所を見学した。ここでは見学した活動をビジネスとそうでないものにそれぞれの活動を分類する。はじめに⑧と⑪にあたる 2 種類のマイクロファイナンス (Dabi / Progoti)、アイシャアベド基金の Handcraft Production and Training Centre、牛乳工場、Horticulture Nursery、Napkin Production Centre の 6 つはビジネス事業である。こうした事業の多くは貧困への対策である。例えば牛乳工場は酪農家の収入向上を目的とし、工場で加工を行うことでただ売るよりも高い収入を見込むことができる。また Horticulture Nursery は植物の苗を育てて売る事業で普通の価格よりも低めに価格を設定することで貧しい農家の人の負担を減らすことに貢献する。その他にもマイクロファイナンスのうち Dabi は貸し出す対象を女性に限定して女性のエンパワーメントを、Napkin Production Centre で作られたナプキンが農村部の女性に配布して生活の向上を目指しているという特徴もある。だがマイクロファイナンスの Progoti は対象がすでに店舗を持ち事業を行っている人であり、借りるためには一定以上の資産を持っていることが条件となっている。そのためこれが貧困対策と結びついているのかという疑問が残った。残りのビジネスでないものは小学校、Human Rights Education、Health Program、Community Empowerment Program の 3 つである。小学校は公立小学校を中退してしまった子どもを対象にしており 5 年かけて一クラス分の生徒を一貫して教育する。見学した学校は女子 21 人に男子 12 人の計 33 人だった。なお BRAC の小学校はノンフォーマル教育を行う学校としてバングラデシュの教育システムのなかでは位置づけられており、全国に 1 万校以上あり生徒も 27 万以上在籍している。また教師の 97% が女性で生徒も 61% が女子となっている。また他の 3 つのプログラムも対象が女性であったり、働き手として女性を中心になっていたりする。例えば Human Rights Education では農村部の女性に対して人権について絵を用いてわかりやすく教え、実際に何かあった時には相談できるように週 2 回法律相談も行っているそうだ。これらの活動と同じようなことは他の NGO などもおこなっているが BRAC はどこか一つの活動だけでなくいくつもの活動を組み合わせて行っている点の特徴である。

#### 4. 考察

バングラデシュでは多くの団体が開発、貧困解決に取り組んできており現在も新しい取り組みがなされている。そして現在は貧困等の社会問題に対してマイクロファイナンスのようにビジネスを取り込んだ方法も用いられている。今までの NGO が寄付に頼るがために活動を制約されてしまいがちであったのに対し、BRAC のよ



写真 1 BRAC 会議場

うにビジネスを行うことは自己財源で活動を回すことを可能にする。これは持続的な活動を行うために比較的有効な手段ではあるだろう。また BRAC はその活動範囲の広さからバングラデシュの第二の政府と呼ばれることもある。実際の政府は税金を資金としているが、BRAC にはそのようなものはない。そのためにか、BRAC の行っている活動の中には調査結果で挙げたように貧困削減を目的としそれに直接結びつくもの以外にも、国際会議もできる広い会議場やホテルなどその経営を行っている。ただ1つの組織が一般的に分けて考えられることの多い行政・企業・市民という

3つにまたがる形の活動形態をとっていることはいくつかの不便なことを生み出すことも考えられる。例えば税金で言えば NGO などは非課税だがビジネスを行うことに対しては課税される。NGO がビジネスをやっているが、その儲けをビジネス以外の分野で使用している場合と企業が儲けを社会問題の解決にも用いているということの差をつけることは簡単ではないだろう。また立派な会議場(写真1)の維持と農村



写真 2 BRAC 小学校

部の小学校校舎(写真2)の改善のどちらにお金を用いるのかと考えた際に何を優先していくのだろうか。BRAC のやっている活動、見学した活動の多くは貧困を削減するために必要なあるいはあると良い活動であろう。多くの活動が女性を中心に行っていることや小学校が中退した子どもを対象に行っていることは貧困に陥りやすい人に対して BRAC が特に注目していることを示している。ただその範囲を広げていった際にどこまで BRAC 自体の目的にあっているのかという疑問も出てくる。

貧困は多くの場合いくつかの理由が重なり合っている。そのため貧困問題を解消するには教育だけが就業機会があれば良いとは言えない。そうであるが故に BRAC の活動もここまで広がってきたのだろう。今後バングラデシュ内や海外においても BRAC は活動を続けていくだろうがそれがどこまでも1つの組織としてやっていくことができるのか。それともその特徴によって分かれていくのかに注目していきたい。

## 5. 調査に参加した感想

今回活動を見学した BRAC は本当に多くの事業をやっており、自分の NGO イメージの範囲に収まらずとても驚かされた。空港ではじめに見た広告が BRAC BANK のもので、その存在が国の中で大きなものであると感じた。そしてその感覚は1週間弱の滞在のうちにさらに強まっていった。また個人的には国の規模も気候も全く異なるが今年の3月に調査で訪れた東ティモールと今回のバングラデシュを比べてみることで面白かった。共通した課題としては安定した経済的な効果をもたらす産業が育っていない点が見えてきた。また同じ課題に対して国によって条件が異なるため同じ解決策を用いること

はできないことも再認識できた。例えばバングラデシュは人口が多いために海外への出稼ぎ労働によって外貨を稼いでいるが、東ティモールのように小さな国ではそのようなことをすることは難しい。日本、バングラデシュ、東ティモールというそれぞれまったく異なる集合が同じ“国”という言葉で表現されることに對することによってちょっとした違和感を覚えたが、“国”とはなんなのかを考え直す良い機会になったと思う。

## 6. 参考文献

イアン・スマイリー、笠原清志訳（2010）『貧困からの自由 世界最大の NGO—BRAC とアベッド総裁の軌跡』明石書店。

INTERNATIONAL HUMAN DEVELOPMENT INDICATORS Bangladesh

<http://hdrstats.undp.org/en/countries/profiles/BGD.html> (2013/09/19 参照)

THE WORLD BANK Data

<http://hdrstats.undp.org/en/countries/profiles/BGD.html> (2013/09/19 参照)

BRAC

<http://www.brac.net/> (2013/09/19 参照)

Table 1.1 Primary education institutions, teachers and students from ASC 2012



## バングラデシュの教育制度とその支援

泉有香 文教育学部グローバル文化学環 3 年

### 1. 調査のテーマ

「バングラデシュの教育制度とその支援」

### 2. 調査設問

1. バングラデシュの教育制度について
2. バングラデシュの教育支援について
3. フィールドワークより

### 3. 調査結果

#### 1. バングラデシュの教育制度について

バングラデシュの教育制度については、9 月 3 日午前中に、JICA 初等教育専門家の橋本さんに仕組みを教えていただいた。バングラデシュの教育はとても複雑な仕組みを持っている。まず、教育制度だが、Pre-primary (幼稚園) 1 年、Primary (小学校) 5 年、Junior secondary (中学) 3 年、Secondary (高校前期) 2 年、Higher secondary (高校後期) 2 年、Higher education という仕組みになっている。このほかにも Diploma という職業訓練校などもある。義務教育は Primary の 5 年間のみで、この間の授業料は無償である。今回は主に初等教育に焦点を当てて論を進めていきたいと思う。

教育制度についてまず述べたが、バングラデシュのもう 1 つの特徴というのは、学校の種類が実に多様であるということだ。NGO が運営するような小学校や、イスラムのマドラサという教育機関もある。このような多様な学校を政府は 2 つの象省庁で管轄している。ノンフォーマル教育や Pre-primary, Primary, 障がい者教育は初等教育大衆省 (MOPEM)、中等教育校の教育やマドラサはいわゆる教育省 (MOE) が管轄している。

次に学校の数だが、小学校は日本の 21100 校に対してバングラデシュは様々な種類の学校を合わせて 92,000 校。しかし生徒数も日本の 6,677,000 人に対してバングラデシュは 17,500,000 人と桁違いに多い。さらに深刻なのは教師数で、日本は 418,000 人なのに対し、バングラデシュはそれより少ない 370,000 人である。また学校の授業時間もバングラデシュは 3 時間制である。これは多くの生徒に教育を行き渡らせるため、小学校が 2 部制になっているからだ。

就学率は、2005 年に 87.2%だったのが、2012 年には 96.8%になっており、かなり向上してきてはいる。しかしこのデータにはカウントされていない教育を受けられない子供もいる。例えば、出生届けを出していない子供や、スラムに住んでいる子供などだ。そのような就学率にカウントされておらず教育を受けていない子供は 150 万人ほどいるというデータもある。高い退学率は、2005 年には 47.2%だったが、2012 年には 26.2%まで下がっている。

しかしまだまだ0%には遠いため、さらに改善する必要がある。またバングラデシュで特徴的なのは、女子の就学率、退学率ともに男子よりもいい数字が出ているということだ。本来イスラーム国ではこの逆の状況が見られるのだが、バングラデシュは非常に特徴的である。これは1992年から女性教師を増やすという活動を行い、実際現在は、女性教師は全体の6割になる。またトイレを男女別に整備するなどファシリティ面の改善も行い、女子教育の必要性を積極的に訴えるようなキャンペーンを行ったからだと言える。また親へ向けてのキャンペーンも強化させ、女子教育の必要性を訴えた効果もあると言える。

以上より、バングラデシュの抱える教育についての問題としては、主に量的側面の問題と質的側面の問題がある。量的側面の問題として一番問題なのは、やはり退学率だ。原因としては、貧困のため子供も稼ぎ手として働かなければならないことや、学校と家の距離が遠く、通学が非常に困難なこと、教育の意味を見いだせない親が多いことだ。

質的側面における問題としては、応用問題に弱いことと、地方によって教育の質に差があることだ。まず応用問題に弱いというのは、生徒が完全丸暗記型の勉強法しかしておらず、根本から問題を理解できていないということだ。2011年に国で一斉に行った統一テストの合格率は、国語が25%、数学が33%というとても低い数字だった。また地域差は、やはり首都のダッカに教育機関も集中しており、いい学校やいい教師もたくさんいるのに対し、地方の学校はまず数が少なく通学に不便であったり、教師の数が少なかったりという問題点がある。

## 2. バングラデシュの教育支援について

現在バングラデシュの初等教育支援は、Primary Education Development Program 3 というプログラム制で行われている。これは2011年からフェーズ3が始まったのだが、援助に入る各国、各機関が合同で資金援助をし、分担して技術面などでも支援をしていくというものだ。SWAp(Sector Wide Approach)という援助する側が、協調してバングラデシュ政府を支援するというアプローチである。バングラデシュに現在資金援助をしているのは、UNICEF、EU、世界銀行、アジア開発銀行、イギリス、スウェーデン、日本、オーストラリア、カナダの9つの組織だ。ここで集めた資金ですべてのプログラムが実行される。このプログラムの援助は実が厳しい結果主義で、結果が出れば資金を援助し、結果が出なければ援助資金は減額になる。こうすることでより有効な援助資金の使い方が出来るようにしている。JICAが行っているJICA Support Program2は、このプログラムの一部として行われている。主に無償資金協力、ボランティアの派遣、日本でのトレーニング機会の提供、アドバイザーの派遣などだ。JICAは特に理数科分野を分担して行っている。現在青年海外協力隊として公共教員研修所で10名、NGOの小学校で5名がボランティアとして活動を行っている。

## 3. フィールドワークより

今回のスタディツアーでは、3日目の9/2にBRACがやっている小学校を訪問、4日目の9/3午前にJICA初等教育専門家橋本氏と面談、午後に青年海外協力隊員のいる小学校へ訪問した。JICA初等教育専門家橋本氏には上記のように教育を制度面などから詳しく説明して頂い

た。

BRAC の小学校はノンフォーマルだが、出来るだけ国の教育方針に沿うような教育をしている。そのため中学への進学率は 100%だという。30～33 人ほどで 1 学級、クラスは 1 つだけで 5 年に 1 度だけ生徒が入学する。教師は高卒以上が条件で、70%が女性である。また BRAC が主催する講義を毎月受けて質を高めている。BRAC の小学校は必ず村の中心に設置され、また既存の建物を利用して学校にする。今回訪れた校舎は 4 年間借りているものだそう。男女合同のクラスで、女子が 21 人男子が 12 人であった。3 年生のクラスでは皆スムーズな英語で自己紹介をしてくれた。質問には 1 人ずつ立って順に答えていく。好きな教科はベンガル語や数学、英語が人気で、宗教と答える子は少なかった。将来の夢も、医者やパイロット、教師、警察官、軍人、エンジニアと幅広く日本の子供と同じような夢を持つ子が多かったが、男女で差は見られなかったのが日本との違いであった。学校についてはポジティブな印象を持っていて皆学校に来るのが楽しいそう。靴が入り口に円形にきれいに並べられていたり、教科書を皆同じようにきれいにそろえて置いてあったりと整理整頓もきちんとできていた。

一方 JOCV が入っている NGO が運営している小学校にも訪問した。JOCV2 名は特に教授法を教えたり、学校の運営に携わったりしているそう。全校生徒は 286 人、幼稚園と 1 年生が 3 クラス、2, 3 年生が 2 クラス、4, 5 年生が 1 クラスずつで、全部で 12 クラスを 5 人の先生で教えている。こちらでも英語や数学が人気だが、実際の成績には反映していないようだ。しかし最近になって子供たち同士での教え合いが見られるようになった。校長先生は女性でキリスト教徒の方であったが、自分が学べば学ぶほど子供たちも良い環境で学び成長できると信じてとても熱心に勉強しておられた。設備は BRAC の小学校に比べれば椅子も机もあり、ファンも回っており整っていたが、机や椅子や文房具は不足しておりまだまだ改善の必要がある。国語の授業を見学したが、授業中は皆真面目に教科書を追っており、先生が積極的に生徒に音読をさせたり質問をしたりしていた。しかし 1 人ずつ音読を回していくシーンでは子供たちの集中も途切れやすかったが、集中力がない子がいると先生が 1 人 1 人まめに注意をしていた。教科書は日本のものと似ていて挿絵もついていた。これは政府基準の教科書を使っているとのことだ。外に出て教科書に載っていたゲームを実際にやってみるというシーンもあったが、先生が終わりの合図をすると皆すぐに切り替えて教室へ戻っていった。日本の子供ならもっと遊びたくてぐずるだろうと思って JOCV の方に聞いてみたが、バングラデシュでは基本的に先生は怖い存在なので逆らうことはできないということだった。

以上 2 つの小学校を見学してみて、また日本で自分が通っていた小学校と比べてみて、教育を受けることで、子供たちは広い世界を知り夢を持つことができ、それが努力のモチベーションとなることがわかった。また子供にそのような機会を与えさせるためには、親の教育が不足している途上国では親に対する働きかけも重要だということが今回わかった。JICA や NGO, BRAC など国の力だけでは教育を回し切れていないという点では日本の教育とは

だいぶ違う印象を受けたが、バングラデシュではもしかしたら地域密着型で JICA, NGO や BRAC などが支援に入った方が教育支援はうまくいくのではないかと思った。ただ先進国のケースを途上国に持って行ってあてはめるのではなく、途上国の現状をちゃんとつかんで、その国にあった支援の仕方をしていくことが重要だということが改めて分かった。

## 母性保護サービス強化プロジェクトの実態

乙村瞳 理学部生物学科 3 年

### 1. はじめに

私はバングラデシュ（以下バ国）に行く前からこのテーマに興味があり、事前学習の一環としてビデオを通してバ国のお産事情をみた。そこに映っていたものは言葉を絶する光景であった。その様子は後述する。そのビデオがあまりにも衝撃的だったので、今回の現地の母性保護プロジェクト活動様子を見ることで、現状が実際はどうかと言うことを確かめたいと思った。ここではその現地の状況、特に BP (Birth Planning) に焦点をあててまとめる。

### 2. BP (調査とその結果)

先にも述べたように、私はバ国のお産についてのビデオをみた。そこには日本では考えられない映像が映っていた。軽く紹介する。

映像の中で私として驚いた点を下書き出した。

- 病院に行くと神隠しに遭う、病院はお腹を切るという恐怖等の理由からくる病院への懐疑心
- 経済的、距離的問題によって病院に行けない
- 出産は胎盤を出すまで行い、お腹を力一杯押す
- 出産には糸とカミソリさえあれば良い
- 合併症は経験に頼るしかない
- 出産時は慎みが大事なので、服を着て、四つん這いで行う
- 陣痛を早めるために、吐いたり、唐辛子を燃やしてその煙を吸ったりする
- 出産後は、へその緒を切りその粘膜を歯に塗る
- 生まれたばかりの赤ちゃんは足を引っ張ると背が高くなると言われている
- 初乳は濃いため、体に毒だと思われており、産後 3 日間は与えず代わりに牛乳を与える

この他にも映像を通して様々なお産事情が垣間見られた。このようなお産が行われている地域では、専門教育を受けた助産師がいなかったり、近くに診療所がなかったりする。上記のような現状もある中、バ国では NGO や政府の家族計画の取組みの一環として、妊娠から出産までプロデュースするプロジェクトがある。今回私はそのうちの 1 つ、JICA の「母性保護サービス強化プロジェクト」(SMPP (Safe Motherhood Promotion Project)) を視察させて頂いた。世界的な取組みとして実施されている、「ミレニアム開発目標」に基づいた取組みのうち、乳幼児死亡率の削減と妊産婦の健康改善を SMPP は含んでいる。なぜなら、バ国ではこの 2 項目の状況が非常に悪く、改善が急がれているからだ。JICA は SMPP を 2006 年から行っており、現在フェーズ 2 に入っている。SMPP では、プロジェクト実施

体制として中央・県・群レベルに委員会を設置し、取組みを進めて行った。

取組み内容としては、

- 地域の妊産婦の状況把握（妊産婦リソースマップ作成・定例会議時の報告）
- ファンド設立による妊娠・出産に関わる必要経費補助
- 妊産婦に要なケアと情報の伝達
- 家族内の意思決定者（夫・姑）に対する妊産婦支援理解促進
- 政府保健・家族計画スタッフとの関係構築、妊産婦に関する情報交換
- 地域住民に対する「安全なお産」啓発運動

を行っている。私は村で行われている CmSS(Community Support System)とそのシステムを実際に動かしている CSG(Community Support Group)のミーティングを見学してきた。

CSG の女性メンバーは妊婦がいる家庭を中心に BP(Birth Planning)を教えるという BPS (Birth Planning Session) を行う。BP とは妊婦とその家族が自分の出産計画を立てることで、この支援を BPS にて行う。

私は、この CSG の定例会議と家庭での BPS を見学してきた。

#### ① 家庭における BP

ノルシンディ県モノハルディ郡チャンダンバリ村のとある家庭における BP を紹介する。

伝統的産婆でもある Delowara さんによる BP を見た。妊婦を中心に、夫、姑、妊婦の姉・妹等、総勢 8 名で、親戚一体となって BP 以下のような教育を受けていた。

- ・ 5 danger signs の周知徹底
- ・ 緊急時における搬送手段の確保
- ・ 妊婦に必要な食事
- ・ 予防接種の推奨
- ・ お産貯金
- ・ 定期検診の確認
- ・ 分娩方法



↑ BPS の様子  
↓ CSG による定例会議

妊婦だけでなく、夫、そして姑にも出産に対して共通理解をもっておかないと、母子ともに危険にさらされるのだ。実際に現地を訪れるまでは、ビデオの影響か、新たなお産方法なんて受け入れられるはずがないと考えていた。だが、ここで行っている BP は伝統的な出産を否定するのではなく、あくまでも今までなかった情報を提供してより安全なお産を提供するものであった。色々なお産方法があるかもしれないが、そのどれにも共通し



ていることは、母子ともに健康であることなのだ。加えて、信頼されている伝統的産婆が SMPP で学んだ知識をさらに各家庭に広めることで、新たな情報はより人々に浸透しているようであった。

## ②CSG による BP

CSG における定例議会の様子を見学させて頂いた。

### 活動内容

- ・妊産婦リソースマップでの妊産婦の確認（妊娠何ヶ月か、自宅分娩か病院での分娩か、新たな妊婦はいないか）
- ・各自担当している妊産婦の情報交換、共有
- ・インフラやトイレ、
- ・小学校就学の推奨

など、出産に関することだけでなく、保健に関わることも全般をこの議会では話されている。また、妊産婦リソースマップとは別に、教師は何人いて、病院がいくつあって・・・という情報をまとめたこの村のリソースマップも作成しており、CSG メンバーで確認していた。

CSG の会議は2ヶ月に1回行われているらしく、少々頻度が少ないようだが自分が担当している妊婦の家には責任を持って家庭訪問をし、出産後 48 日間はお世話をするそうだ。その後は、必要に応じて訪問するようだ。但し、CSG メンバーは村に足を運んで新しい妊婦を探したり、BP の助言を行ったりしているので、訪問をしなくとも大体の様子が把握できるようだ。

### ↓妊産婦リソースマップ



## 3. 考察

私の中ではビデオの影響が強すぎて、現地を訪れるまでバ国のお産については偏見を抱いていた。一応、SMPP についても調べてはいたが、きっと現地のお産は陣痛を早めるため無理やり吐かせたり、胎盤を取り出したりすることが一般的なのだろうと考えていた。しかし、実際に見た光景は、調べた内容とほとんど差異なく、村民の力で母子の健康を支えていた。活動自体のきっかけは NGO という外部の力かもしれないが、それをうまく吸収して自分たち定例議会で知識を共有しさらにそれを村民に拡散するという流れができていた。CSG だけでなく、階層的に村、郡、中央とつながっていて、公的な医療の設備もあるという。ただ、村の方の話によると村単位で CC(Community Clinic)はあるものの、そこには CHCP(Community Health Care Provider)が1名(それに加えて週2~3回、HA(Health

Asistant)と FWA(Family Welfare Assistant )が勤務)で 9:00～14:00 まで、約 20 回/月程度しか勤務できず、1 日 2 つの CSG を担当すると仮定すると、月に多くても 40 の CSG し  
か看ることができない。しかし、CC の CHCP は、自分の担当する村の CSG の活動を支援  
したり、会合に出席したりしたいと考えているが、日常のサービス提供業務もあり、複数  
のグループをきめ細かく指導することができない。クリニックや保健センタースタッフの  
支援のない CSG が活動を継続していくのは難しい。JICA の富田さんによると、実際に、  
住民の力で自立的な活動を行えている CSG は 5 グループしかまだないらしい。とは言って  
も、この SMPP は最初、ノルシンディをモデル都市として 2006～2011 年まで行っており、  
そこでの CmSS の活動成果が認められ、今では政府も CSG を推奨している。CC をもっと  
増やすには医師スタッフの問題と資金問題が大きく、いくらボトムアップに成功してい  
ても限界があるのだろう。住民の成長とトップダウンによるアプローチのバランスがとれ  
ていない状況であろう。海外からの医師を増やしても結局は自立的な村運営には住民から  
の医師に相当する人が必要で、そう考える教育制度にも影響してくる。保健プロジェクトと  
いえど、それ以外の分野にも絡んでくる。バングラデシュ自体が成長するには、全体的に  
底上げが必要なのだろう。

#### 4. 感想

バ国に行って、現地の人の吸収力には驚かされた。国民性もあるのかもしれないが、情  
報提供者からは食欲に学び、それを村のために生かそうと誠実に動いているというのが印  
象的だった。BP においても、村全体の妊婦を原始的に 1 つ 1 つ確認し、村全体でサポート  
しているようであった。そこには、死と隣り合わせの日々が我々よりも多いからこそその思  
いというものがあるのではないだろうかとも考えられた。今回見たものバ国の全てではな  
い。正直、国際社会にそこまで知識がなかった私にとって、どういう視点でこの現状を切り  
出すかは非常に難しいところだったが、学んで行くうちに、お産について他国と比較し  
て世界のお産の現状を見ることが今、私にできることではないだろうかと思えた。

#### 5. 参考文献

「妊産婦の健康状態(BBC World news)」(お茶の水女子大学 グローバル協力センター  
DVD 資料より)

「Narsingdi Model in Bangladesh」(JICA 資料より)

「バングラデシュ母性保護サービス強化プロジェクト・フェーズ 2」(JICA お茶の水女子  
大学プロジェクトサイト訪問資料より)



## バングラデシュにおける ODA と NGO の支援の役割と功罪 —初等教育支援の比較から—

有田美玖 文教育学部言語文化学科グローバル文化学環 4 年

### 1. 調査のテーマ

今日、ODA や NGO の支援のあり方は多様化し、活動範囲も拡大している。しかし、多様化・複雑化した支援は、被支援者にとって最適なもののなかであろうか。例えば、同じ地域で似通った支援を複数のアクターが行う場合、各アクターの役割はどのように住み分けられ、各々の活動の功罪は何であろうか。このような視点から、今回、バングラデシュにおける ODA、NGO の活動を調査した。「最貧国」といわれるバングラデシュでは、ODA や NGO の支援が多様化・複雑化してきている。そのなかでも、「最貧国」を抜け出すための最重要課題であろう初等教育支援に注目した。具体的には、ODA・JICA と NGO・BRAC が行う初等教育支援の調査を通じて、バングラデシュの初等教育システムにおける各アクターの役割と功罪を考察する。

### 2. 調査設問

- ① バングラデシュの教育システムの現状はどのようなものか
- ② バングラデシュにおける ODA・JICA の初等教育支援の役割と功罪は何か
- ③ バングラデシュにおける NGO・BRAC の初等教育支援の役割と功罪は何か

### 3. 調査結果

バングラデシュの初等教育支援を調査するにあたり、JICA と BRAC に大変お世話になった。JICA では、橋本和明専門家にバングラデシュの教育システムと実際のプロジェクト内容について講義していただいた。その後、JOCV として BDP (Basic Development Partners) の小学校教諭をしている大石小也華隊員と金宮剛隊員のもと、支援をしている小学校を訪問した。BRAC でも同様に、支援をしている小学校を訪問した。以上の訪問をもとに、設問に対する調査結果を述べる。

#### ①バングラデシュの教育システムの現状はどのようなものか

バングラデシュの学校体系は、5—3—2—2 制システムをとっており、小学校 (1～5 年生)、中学校 (6～10 年生)、高校 (11～12 年生)、大学 (13 年生～) の 4 段階に分かれている。初等教育の 5 年間 (6～11 歳) は 1992 年に義務教育化された。2012 年の純就学率は全体で 96.8%であり、男子 95.0%、女子 98.8%である。女子の数値が高いことは注目に値する。しかし、この数値には国から発行される市民権を有しないスラムの子どもなどは含まれていない恐れがある。国の教育政策全般に対して責任を負っているのは教育省であるが、就学前教育や初等教育、障がい者教育などを管理する初等大衆教育省と、中学校や大学、職

業訓練学校、宗教を主とした教育システムを管理する教育省という主に二つに分かれている。しかし、現状の教育システムは、多様な教育機関があるため複雑化している。

### ②バングラデシュにおける ODA・JICA の初等教育支援の役割と功罪は何か

JICA はバングラデシュの独立直後 1973 年から 40 年間にわたって資金・技術支援を行っている。初等教育支援の最大の特徴は、プロジェクトではなくプログラムという形で他国と協力して支援しているということだ。プロジェクト単位だと、例えばイギリスやスウェーデン、ユニセフなど様々なアクターがバングラデシュに企画を持ち込む。これにより、バングラデシュ政府が各々のプロジェクトを検証しなければならず、負担が大きくなるというデメリットがある。そこで実際に、イギリスとスウェーデン、オーストラリア、カナダ、JICA が合同で資金と技術を持ち合わせ、教育を一本にプログラム化してバングラデシュ政府（教育省）と共に教育改革を行っている。例えば、プログラムの中のプロジェクトの一つに理数科教育プロジェクトがある。先生の育成を行うなどの直接的なことは行わず、長年使用されていた教科書の改訂に取り組むなど、間接的ではあるが教育システムを長期的に改革することを重視している。

このような性質から、JICA が対象とするのはフォーマルスクールが主であり、後述する BRAC が対象とするノンフォーマルスクールとは異なる。JICA の強みとは、他国との連携による影響力の大きさにあるだろう。資金・技術共に規模が大きく、政府との連携も行いやすい。しかし規模が大きい反面、地域の声が JICA や政府に届かないのではないかという懸念もある。ここで、本調査で訪問した JOCV のもと BDP の小学校の事例を取り上げたい。小学校には周辺のスラムの子どもたち 286 人が通っており、1～5 年生まで計 12 クラスがある。校長を含め 5 人の先生で運用されている。5 年生の英語の授業に参加させてもらったが、校長が生徒一人ひとりの理解を促している様子が見て取れた。今後学校をどのようにしていきたいか、と校長に訪ねたところ、JICA の支援が終わった後も JICA が教えてくれた“困ったことがあったら子どもたちに寄り添う姿勢”を大切にしたい、と語っている姿が大変印象的であった。この小学校の支援は比較的成功している例である。小学校の訪問を通じて JICA の支援が地域にも行き届いていることを実感することができた。一方で、同行して下さった JICA 職員の方が実際に小学校を訪問するのは初めてで、成功例を見て感銘を受けていたことから、JICA や政府と被支援者との関係が密接であるとは言い難いと感じた。

### ③バングラデシュにおける NGO・BRAC の初等教育支援の役割と功罪は何か

バングラデシュ最大の NGO の一つである BRAC は 1972 年に設立後、ノンフォーマル教育プログラムをはじめ、学校に通っていないか、ドロップアウトした貧困層の子どもたちを対象に様々な教育プログラムを提供している。1 つの部屋を借り、30～33 人の生徒に、少なくとも 10 年は学校に通ったことのある地元の女性の先生 1 人が教えている。1 年～3

年生は BRAC が作成したカリキュラムによって授業が進み、4 年生からは政府のカリキュラムになる。前述したが、BRAC が対象とするのはノンフォーマルスクールである。BRAC の最大の特徴は、コミュニティ参画を得意としているため、政府にボトムアップ・アプローチを提供できる点である。子どもの家庭の近くに学校を開設し、生徒全員を同じ村または村落の出身者としており、先生は定期的に両親とミーティングを行うことによって、家庭全体を子どもの教育に巻き込むようにしている。そして、生徒・先生・両親を包括的に監督するプログラムオーガナイザーが地域に 1 人存在し、政府との橋渡しも行っている。2006 年までに、約 350 万人の子どもたちが BRAC の小学校を卒業し、そのうち 93% がフォーマルシステムの中学校に進学している。BRAC の強みは、地域に密接であるため、地域と政府の架け橋として機能しやすいという点であろう。一方で、二つのことが懸念された。一つが、先生を直接育成しているため、波及効果が小さいということである。もう一つが、ODA と比較すると資金面での規模が小さくなるため、設備が不十分になりがちだということである。実際に BRAC の小学校を訪問して、机や椅子、照明といった施設の設備が不十分であると感じた。以上の二つは BRAC の今後の課題と言えよう。

#### 4. 考察

バングラデシュにおける初等教育支援という観点から ODA・JICA と NGO・BRAC の活動を比較したが、両アクターの役割は対象を異にしているため住み分けがなされており、各々の活動内容に意義がある一方で今後の課題も浮上している。JICA と BRAC が相互補完的な関係を築くことができているのかということに関しては、各々で行っている教育支援は対象が異なる（フォーマルスクールとインフォーマルスクール）ため、例えば一方の学校で初等教育の途中まで学んだ子どもが、途中から一方の学校に通うことは制度上不可能ではないのだが、現実的にほとんどないという事実は残念である。それでも、JICA と BRAC が互いの支援を理解し、それによって自身の支援のあり方を明確にしていたことは印象的であった。また、同じ地域で似通った支援を行う場合、支援対象が同じ、あるいは（JICA が他国と連携しているように）支援者の規模が同程度であれば、協力することで支援が一層効果的になる可能性があることも学んだ。支援のあり方は多様化・複雑化しているものの、各アクターが同じ地域の他の支援活動も考慮して自身の支援活動に活かすことで、相互補完的な支援となり、当地域にとって最適な支援となるのであろう。

#### 参考文献

笹間郁子『政府と NGO のパートナーシップ』広島大学教育開発国際協力センター『国際教育協力論集』第 8 巻第 2 号（2005）pp111～124  
向井史郎（2003）『バングラデシュの発展と地域開発』明石書店

## バングラデシュにおける女性のエンパワーメント

松本江利奈 文教育学部人文科学科地理学コース 4 年

### 1. 調査のテーマ

BRAC の人権活動、エンパワーメントのプログラムを見学し、バングラデシュ女性の社会的地位や状況の変化と現状について考察する。

### 2. 調査設問

バングラデシュでは、女性は非常に弱い立場にあるといえる。その要因としては、パルダという女性隔離の慣習や、男性優位の社会、宗教的要因などがあげられる。ロキア・ラーマン・カビールの『7人の女の物語』の中から具体例をあげると、バングラデシュの女性の状況は、「多くの妻は理由のないままに離婚され、家から追い出され」る、「夫は好きなき、私(妻)を殴ることができ」る、「女はレイプされたうえ、男を誘惑しそそのかしたとして非難され」る、などというものであった。この本は、1976 年から 1996 年の間のことを記述したものであるが、当時から 20 年以上経ち、バングラデシュの女性を取り巻く状況はどう変わったのだろうか。BRAC の Community Empowerment Programme のミーティングと、A Human Rights and Legal Education Class を見学し、見聞きしたことを踏まえ、現在の状況について明らかにしたいと思う。

### 3. 調査結果

9 月 1 日(日)に、Gazipur 県にて BRAC の Community Empowerment Programme の村のミーティングを見学した。BRAC の行う Community Empowerment Programme とは、貧困層や女性などのそれまで弱者とされていた人々でも、声をあげ、行動をおこせるように、コミュニティを強化し、人権についての知識・情報を広めていくためのプログラムである。この日は、人権についての話があがっていた。内容は、主に人権が侵害されたときにとるべき行動についてであった。犯罪はきちんと警察へ届けること。村の有力者や委員会に任せきりにしてはいけない。自分できちんと記録しておくこと。示談や、地元の中で済まそうとしてはいけない。具体的な相談事例として、ある娘のことが議題にあがった。その娘は結婚していたが、夫は他の女性と結婚し、その娘とは離婚することになった。しかし、イスラム法にのっとり、離婚の際に 10 万タカ支払われはずであったが、夫は支払わなかった。そこで BRAC に相談し、「払いなさい」という警告の文書を 3 度送った。夫はその警告を無視したため、BRAC は夫を訴え、現在も裁判中である。最後にまとめとして、人権の問題は、時間がかかり、1 歩 1 歩やっていかないと解決しないので、少しずつやっていこう、という話で終わっていた。

ミーティングの中で、「犯罪などの人権侵害がおこったらどうするか？」という質問に対して、「村の有力者に仲裁してもらおう」という答えを返した女性がいた。繰り返し繰り返し、

アドバイザーの方が「示談はいけない」と言っており、やはり、住民にとっては、「警察へ届ける」と考えるより「村の有力者に頼む」と考える人が、まだまだ多いのだろうと感じる。



**Figure 1 : 村での Community Empowerment Program のミーティング**

9月2日(月)、Manikganj 県にて BRAC の a Human Rights and Legal Education Class を見学した。これは、BRAC が、人権について知らない村の人たちに対して、教育をし、犯罪の被害者への支援を行うクラスである。BRAC には家族法や宗教法、相続の知識などを教える色々なプログラムやクラスがあり、その中の1つである。この日は、BRAC から訓練を受けた女性(裸足の弁護士)が、村の女性たちに対して講義を行っていた。この講義は、全12日間、お祈りの日(金曜日)以外毎日行って2週間で終了するものであり、この日は4日目である。村の女性であれば、年齢は関係なく誰でも参加できる。だいたい、18歳くらいの人から来ている。字の読めない人もいたので、スケッチブックに描かれた絵を使って、人間が生きていく上で必要な知識について、説明していた。衣食住が必要なこと。男も女も仕事をしないと行けない。イスラム教、ヒンドゥー教、キリスト教、皆同じであること。貧しくても富んでいても、平等に権利がある。人種も関係ない。犯罪は法を通じて裁くべき。その他、選挙の方法や、道の渡り方など、社会のルールやマナー、道徳などについてのこと。以上が内容であり、最後に教えたことを復唱させていた。

「講義をうけて、自分に何か変化がありましたか？」という質問に対し、ある女性は「今までは、法律について何も知らなかったが、知らなかったことを知って自分が強くなったような感じがします」と答えていた。このような、普及活動が、女性の内面的な自信につながったことが感じられた。「夫の反応はどうですか？」という質問に対して、ある女性は「最初はあまり賛成していないような反応でしたが、今は、女にも学びが必要だと理解してくれています」と答えていた。女性がこのような集まりに参加するためには、家庭の理解も充分に必要であり、夫の反応の変化から考えると、女性の外出や教育を受けることに対して、より寛容になってきていることが考えられる。

**Figure 2 : 村での a Human Rights and Legal Education Class の様子**



以上のような、見学して見聞きしたことと合わせて、8月31日(土)の佐藤祥子さんの講義の中で出てきた、Bangladesh Demographic and Health Survey のデータについても参照したい。調査項目の中に、「バングラデシュの女性が考える夫に殴られてもいい理由」という項目がある。対象は、結婚している女性であるが、バングラデシュは結婚するのが早いので、だいたいの一般女性であるといえる。このデータによると、バングラデシュの女性は、①夫と口論したとき(22.4%)、②子供の世話をしなかったとき(18.8%)、③夫に伝えずに外出したとき(17.3%)、④夫との性交渉を断ったとき(8.1%)、⑤料理をこがしたとき(4.1%)に、夫に殴られても仕方がないと思う、と答えている。全体的にみると、32.5%の女性が、5つのうちのどれかひとつには同意しているのである。内訳をみると、受けた教育のレベルが低いほど、そして、貧困層になればなるほど、夫に殴られてもいいと答える女性の割合が高くなっている。居住地の違いでみると、都市の女性と田舎の女性の結果には差があり、田舎の女性ほど、その割合は高くなっている。人口の中のどの層であるかによって、女性の状況は違うのである。

Background characteristic	Husband is justified in hitting or beating his wife if she:					Percentage who agree with at least one specified reason
	Burns the food	Argues with him	Goes out without telling him	Neglects the children	Refuses to have sexual intercourse with him	
<b>Residence</b>						
Urban	2.5	15.6	11.9	14.2	5.4	23.8
Rural	4.6	24.9	19.3	20.5	9.1	35.6
<b>Education</b>						
No education	5.9	27.4	22.1	21.4	10.4	38.4
Primary incomplete	5.3	26.4	20	21.2	10.0	36.2
Primary complete	4.1	23.8	20.1	20.3	9.2	35
Secondary incomplete	2.9	29.8	14.1	17.7	6.6	29.9
Secondary complete or higher	1.0	10.5	7.5	10.8	2.7	17.9
<b>Wealth quintile</b>					7.9	
Lowest	6.5	30.7	22.2	24.4	11.6	41.3
Second	5.8	27.3	21.7	23.1	10.7	38.4
Middle	4.4	23.9	19.7	20.2	8.8	34.5
Fourth	2.9	20.5	15.8	16.6	6.8	31
Highest	1.2	11.4	8.3	10.9	3.4	19.3
<b>Total</b>	4.1	22.4	17.3	18.8	8.1	32.5

(表1) Bangladesh Demographic and Health Survey 2011, Report より一部抜粋

#### 4. 考察

BRAC の 2 つの Programme を見学した中で、女性たちの立場の状況に変化があったように思われる。どのように変わってきたかという点、外に出て、教育普及の場に参加でき

るようになってきていること、BRAC のような NGO により、今まで知らされていなかった情報を得られる機会が与えられるようになったこと、女性が人権侵害に対して、BRAC のサポートを受けながら声をあげられるようになってきたこと、などがあげられる。

しかし、未だに変わっていないように思われることもある。それは、人々の間には、何か問題が起こったときに有力者に頼るべきだという考え方があること、夫に殴られても仕方がないと思っている人が少なからずいること、があげられる。

人権侵害や、女性を取り巻く社会状況については、すぐには変えられないことである。しかし、BRAC のプログラムのように、少しずつアプローチしていくことで、すこしずつ改善していくことができるのではないかと思う。また、a Human Rights and Legal Education Class は女性なら誰でも参加できるものであり、参加者は全員女性だった。女性を取り巻く状況の改善には、女性に対するアプローチも大切だが、女性がこうして教育普及の場に参加できるのは夫や家庭の理解が必要なので、男性に対するアプローチも必要だと思う。

## 5. 調査に参加した感想

今まで、文献や DVD の中でしか知り得なかった Bangladesh に、実際に足を運び、そしてコミュニティのミーティングに参加して、人々の口から実際に、実際に勝手に夫に離婚されたなどの事例の話をきくことは、とても衝撃的だった。個人的には、聞き取れなかったり、理解しきれなかったりした箇所もあって十分な記録がとれないときもあったこと、後になって疑問がわいてきてしまうこともあり、完全に内容が消化できなかったこともあったことが反省点である。今回はきっちりスケジュールが入っており、8 日間という決められた日程だったので、再訪したりもう一度参加したりすることが不可能であったが、より深く調べていくためには、継続的な調査が必要だと感じた。多くのプログラムを見学できたことはとても充実していたが、それぞれに充てられる時間が短かったので、もっとじっくり見聞きしたかった。

## 6. 参考文献

長畑誠 2009. 「農村の貧困問題」大橋正明・村山真弓編著『バングラデシュを知るための 60 章』明石書店.

村山真弓 2009. 「パルダ・開発・暴力」大橋正明・村山真弓編著『バングラデシュを知るための 60 章』明石書店.

ロキア・ラーマン・カビール 2000. 『7 人の女の物語』連合出版.

Bangladesh Demographic and Health Survey 2011, Report

<http://www.measuredhs.com/pubs/pdf/FR265/FR265.pdf>

BRAC-Creating opportunity for the world's poor <http://www.brac.net/>

(最終閲覧 2013 年 9 月 15 日)

## バングラデシュの地域コミュニティを活かした取り組み —子どもの育ち、発達の支援につながる要素に着目して—

長屋裕子 人間文化創成科学研究科人間発達科学専攻

発達臨床心理学コース博士前期課程 2 年

### 1. 調査のテーマ

私は子どもの育ち、発達に関心がある。人間が成長、発達していく過程で生じうる現象や問題は、先進国か途上国かを問わず存在するものであるが、その支援は単に画一的には行えず、文化や地域性を考慮することが必要となる。また、子どもを取り巻く環境としての地域コミュニティは、心理的発達に重要な資源だと考える。バングラデシュで行われている支援活動の中で、地域コミュニティが活かされた子どもの育ち、発達支援にかかわってくる取り組みを検討したい。

### 2. 調査設問

バングラデシュの現状では、(改善されたがまだ課題が残るとされる)乳幼児死亡率などに表れているように、子どもの発達への支援には保健医療分野、特に母子保健での支援の必要性が大きい。今回は、母子保健に関する活動を中心に、地域コミュニティでの取り組みの様子を記述し、得られた観点をまとめることとする。

### 3. 調査結果

9 月 1 日 Community Empowerment Program (Polii Shomaj meeting) より

これは母子保健に関するものではないが、村のコミュニティで行われているミーティングを見学させていただいた。1 ヶ月ごとに、executive (執行役 11 人) で議題を出すミーティングと、その議題を話し合う general (全女性) 対象のミーティングを交互に行っている。ここでのフィールドオーガナイザー(FO)は、おおよそ大卒以上。BRAC の男性職員が担当していたが、この職に就く前にトレーニングがあり一般的な知識を身につけた者が就けるそう。プレジデントは、ここでは主婦の方。今回特別にアドバイザーが呼ばれており、その方はソーシャル・アクティビストの女性であった。集まる大人たちの周りで遊ぶ子どもたちの姿、興味を持ってミーティングをのぞく子どもの姿もあった。こうした話し合い風土が自然に体験できていけるのではないかと感じた。

今回の general ミーティングでの議題は、障害者手当と人権侵害についてだった。障害には mental と physical があること、金銭的補助制度の周知がなされた。話し合った結果、制度に該当するとされた人への対応も伝えられていた。障害者が排除されておらず、みんなで助け合おうとしていることへの驚き。実際に知的障害者の少年に対しても、複数の人が自然に輪の中に入れて誘導していた。ミーティングで伝えられる知識や情報も加わり、助け合いや人とのつながりという温かい対応がより適切な形でなされている印象を受けた。



議題は、他にも病気・健康のこと、ココナッツの実がならないこと、「女の子が学校に行きたがらないが、どうすればいいのか」などもあるそう。この場合は、学校の先生を呼んで、学びのモチベーションを高めることについて話してもらったそう。身近な問題について気軽に相談できる場であるのだらうと思われた。

#### 9月1日 BRAC Health Program より

ヘルスワーカーは BRAC 職員。その下で働くヘルスボランティアによる家庭訪問がある。症状によっては毎日薬を飲んでいるかなどチェックする。妊娠出産に関する母子保健については、全国版の写真つき教材を用いて、ひきつけ／発作／高熱／逆子など、家庭分娩で生じた症状の中で、すぐに病院へ行く必要のあるもの（※JICA のプロジェクトでも同様の内容が「5 danger sign」とされていた）を教える。さらに、「Be happy check」という、むくみないか、幸せか（気持ちの面）、貧血ないか、などの確認も行う。妊娠中は月 1 回訪問し、出産後は 3 日後・21 日後・48 日後の訪問で、その後の定期訪問はないとのことだが、子どもがなりやすい病気や症状（おっぱいを飲まない、ひきつけ、高熱、呼吸が早い、下痢が 2 週間続く、吐くなど）、母乳と離乳食についても伝えている。

こうした活動を行うヘルスボランティアであるが、今回お会いした方は働き始めて約 10 年とのこと。最初はお金を借りる立場だったが、BRAC から収入を得られる仕事として紹介され、今に至っているそう。この 10 年の変化として、周りの皆から尊敬されるようになり、何かあったとき相談してくれるようになったことが嬉しいと話してくださった。家庭訪問というスタイルであるが、決して一方通行の教育（情報伝達）ではなく、双方向の相互コミュニケーションもなされていることがうかがえた。

#### 9月4日 JICA Chandanbari Union の Birth planning session より

妊娠についてカードを使った教育指導が行われていた。メンバーは、栄養改善の指導員（Community Nutrition Promoter：CNP）、妻(妊婦)・夫・家族（姑・夫の妹 2 人）がいた。妊婦だけでなく家族も一緒に行うところが重要で、夫と姑、特に夫に意識をきちんともってもらおうよう訴えかけていることが感じられた。BRAC での Health Program と同様、母乳・離乳食の話もし、最後には 5 つの兆候をおさらいし、皆が各自責任をもつよう再度強調していた。

今回お会いした妊婦の方は 20 歳で初産。子どもを産むことや育てることに対しての気持ちは、妻と夫ともに同じ思いだということで“ちゃんと栄養をあげよう、5 年たったら学校に行かせよう”とのこと。子どもをもつことへの覚悟のようなものが感じられた。また出産への思いとしては、“ここでちゃんと説明されているから怖くはない。無事に出産できると祈っている”とのこと。地域の中で担当してくれる人にサポートされている感覚がもたれているようだった。

#### 9月4日 Chandanbari Union の Community Support Group(CSG)の会議より

ここで話し合われていた内容としては、①前の記録確認 ②出産結果報告・確認※ ③新しい妊婦を台帳に加える ④コミュニティ資源の確認 であった。

台帳と地図（家のマークが記載されている）に番号が振ってあり、CSG として妊婦の妊娠期間・夫の名前などを把握している。妊婦を見つけた人がその担当者になっている。また、リソースマッピングの図もあり、村にあるリソースをどう役に立てるか考えられていた。中には NGO など含まれており、特に人的資源が重要な資源となっているようだった。

#### 9月4日 Chandanbari Union の Community Clinic より

地域の診療所的存在で、CSG の上位組織にあたる Community Group (CG) が病院運営をサポートしており、政府が各地域に建てようとしている。常勤のヘルスワーカーの他、ユニオンの議長、コミュニティのメンバーにお会いできた。今に至るまで、ユニオンやコミュニティの人の資金や協力が合って施設を修繕してきたことが語られた。要望としては、現在医者郡以上の病院にしかないのでは週に 1 回は医者が来てほしいことや、雨漏りの修理、塀の完成。水道の設置、銀行口座の開設、トイレ改善などもあった。

ここでは妊婦健診も行っており、また来院理由としては、子どもの病気（お腹壊した、熱、風邪など）が多いそう。地域の母親が頼れる場という印象を受けた。なお、ここでも地域のリソースが書かれた図表ポスターが貼ってあった。

## 4. 考察

### ＜フィールドで感じたことから＞

地域の中でミーティングが自然になされていた。屋外でなされていることもあり、こうした話し合いが大人に限らず子どもにも開かれているように感じられた。バングラデシュの文化的風土なのではないだろうか。開かれた雰囲気は、障害者などの弱者も排除せず、助け合う動きにも表れていたように思う。

また、支援の中では知識や情報の教育という側面も大きいですが、現地でなされていた様子を見ると、サポートされている感覚も感じられていたり、相談も行われたりと、決して一方通行の情報伝達ではなく、双方向の相互コミュニケーションもなされていることがうかがえた。さらに、地域としても村の人々の様子を把握し、適切な援助資源につなげられるように努力・工夫されていることが感じられた。

このような人とのつながり、人が人を支えようとするコミュニティの風土は、今後この国の発展を担っていく子どもたちが育つ上で、重要な体験・経験となるのではないかと考えられた。

### ＜地域コミュニティに関する歴史的背景から＞

バングラデシュでは 10～15 の村落がユニオンという行政村を形成している。このユニオン制は、1875 年以来、形を変えつつも存続しているもので、バングラデシュの地方に根付

いた制度である。さらに約 10 ユニオンを単位として、中央政府の地方行政単位である郡（ウポジラ）が設置されている。ウポジラは 1960 年代に起こった農村開発運動の際に配置されることになった比較的新しい行政単位である。そして、ウポジラの上位の行政単位である District(県)はイギリス植民地統治時代の制度から始まっているものである。英国エリート官僚から、徐々にインド人官僚、パキスタン人官僚、そしてバングラ人官僚に代わっているが、その意識に“行政サービスの提供”はあまりなく、植民地時代からの“統治”のままという部分がある（海田，2003）。こうした背景を考えると、ユニオン以下の地域コミュニティでのミーティングや家庭訪問などの取り組みは、バングラデシュの人々にとって馴染みやすい自然な形態なのかもしれない。

また、矢嶋（2009）によれば、バングラデシュの農村では、屋敷地を共有する世帯集落（バリ）、バリが数個から十数個集まった集落（パラ）、パラがいくつか集まった村（グラム）が構成される。このような地域的な関係に、父系血縁親族関係（グシュティ）やイスラーム教寺院に参拝する社会的つながり（ショマージュ）が複雑に重なる。バリ、パラ、グラムそれぞれにマタボールと呼ばれるリーダーが複数いて、インフォーマルな評議や、日常のいろいろな揉め事や争いについての話し合いの習慣を通してゆるやかな村としてまとまっているとされる。今回、ミーティングなどで複数のリーダー格の存在が見受けられたが、こうした背景もあり、リーダー同士や執行部の協力体制がとれていたのかもしれない。近年、若者の出稼ぎなどもあり、マタボールは高齢化し数としては減少しているとされる。人間関係の中で暮らす村の生活を支えてきたそのような存在の養成も含め、地域コミュニティを活かした支援が考えられるのではないかと思われる。

## 5. 調査に参加した感想

私は今回特に母子保健と初等教育実践の様子に重点を置いていましたが、さまざまな支援分野があり、工業や経済発展、女性の立場などあらゆる方面で起こっていることが人々の生活や生き方にダイナミックに絡んでいることを感じました。

また、国際協力となると“支援”という意識が湧いてきますが、自分が行う“支援”行為は誰が誰に対して行っていることなのか、自分と異なる現状に出会ったとき相手に何を思っているのか、重要なメッセージを受け取ったように思います。今後の自分に問いかけていきたいと思います。バングラデシュ人の温かさや前向きさ、成長力や吸収力、海外で活躍する日本人の方々の姿勢にも刺激を受け、とても心に残る体験となりました。お世話になった方々に心より感謝申し上げたいと思います。ありがとうございました。

## 6. 参考文献

海田能宏（2003）. バングラデシュ農村開発実践研究—新しい協力関係を求めて コモンズ  
矢嶋吉司（2009）. マタボールの役割—農村の社会構造 大橋正明・村山真弓(編著) バン  
グラデシュを知るための 60 章【第 2 版】 明石書店 pp.184-189

## 1-4 訪問記録

### JICA 安全ブリーフィング

- ・訪問日時：2013 年 8 月 31 日（土）16：00－16：30
- ・面談者：岡村昭夫次長

#### 1. 概要

バングラデシュの治安を取り巻く情勢と留意点について、主に 5 つ話を伺った。

##### （Ⅰ）総選挙をめぐる与野党対立の激化

バングラデシュでは 2 大政党（現政権与党アワミ連盟、最大野党 BNP）の対立の歴史がある。交互に政権を取っている状況だ。次回総選挙（一院制国会、小選挙区制 350 議席、総選挙は 5 年に一度）は現憲法の規定により 2013 年 10 月 26 日から 2014 年 1 月 24 日の間に実施する必要があるとされている。バングラデシュで問題となっているのが、中立な選挙を行うためのゼネスト（ハルタル）の頻発だ。バスや車、鉄道などの交通機関を止めさせ、経済活動をさせないようにするのである。さらに、以前はあくまでも非暴力的だったが、最近は暴力的になっていることも問題とされている。

##### （Ⅱ）独立戦争戦犯裁判の進捗

バングラデシュは二回の独立を経て現在に至る。1947 年に英領インドから東パキスタンとして独立、1971 年にパキスタン・イスラム共和国からベンガル人として、バングラデシュとして独立した。1971 年独立時に独立派と独立阻止派の戦闘により、公称 300 万人、実際にも少なくとも 100 万人の知識人が虐殺された。その後の戦犯裁判の推進が前回総選挙におけるアワミ連盟の目玉公約であり、2013 年 1 月以降被告は 14 名になったが、このうち 11 名が野党のイスラム政党ジャマティ・イスラミの現役幹部だったため、ジャマティ・イスラミは抵抗しハルタルを宣言した。

##### （Ⅲ）「シャハバード運動」「ヘファジャティ・イスラム」

死刑判決が予想されたジャマティ・イスラミの韓部長補佐に終身刑判決が下されたことに対し、数万人規模の市民がダッカ市内シャハバード交差点に集結し、数週間にわたって座り込みを実施。政治家や官僚、民間組織が相次いで運動への連帯を表明し、一大市民運動になった。一方、ヘファジャティ・イスラム（チッタゴンの地元イスラム系団体）がシャハバード運動に対抗。ダッカ抗議集会には数十万人が参加し、抗議活動で数十名が犠牲となる。最近の問題として、このような抗議活動に一般市民が巻き込まれるようになったことが挙げられる。

##### （Ⅳ）ラナ・プラザビル崩壊事故の余波

2013 年 4 月 24 日、ダッカ市郊外サバール地区にあったラナ・プラザビル（複数の繊維工場や商店・銀行が入居）が崩壊。1192 名が死亡し、それ以上の負傷者が出た。この事故は日本でも連日報道されていた。この事故を受けて、建築基準違反や注意喚起無視な

どが明らかになり、それに対する抗議活動（デモ、投石）が起こっている。実は、崩壊前にも同種の縫製工場の火事により約 100 名が死亡している。火事の際、非常口があったにもかかわらず使用されなかったことが死亡者増加につながったとされている。このように、非人道的な企業・工場の姿勢に対する市民の不満が募っている。

#### （V）注意すべき事項

バングラデシュに滞在するにあたり、最低限注意すべきことが 6 点ほどある。1. ハルタル実施中は原則外出をしないこと。2. ダッカ周辺には 4000 もの繊維工場があるとされるが、繊維工場労働者の抗議に巻き込まれないように注意すること。3. ひったくりや強盗などの一般犯罪に巻き込まれないように意識すること。そのために、深夜移動を避け、車で移動中は窓を閉めて鍵をかけるなどの対策が必要である。4. 無差別な威嚇や脅しを目的とした小型手製爆弾に近づかないようにすること。5. 連絡手段は常に確保しておくこと。6. 在バングラデシュ日本大使館の安全情報を確認すること。

## 2. 質疑応答

Q. ひったくりや強盗などの一般犯罪に特に巻き込まれやすい場所はあるか。

A. バスステーション。置いている荷物を取られやすい。しかし、手にもっている荷物を引っぱられ、離さないでいると怪我をすることもあるので、場合によっては身の安全を守ることを第一に荷物を手放す勇気も必要。

Q. 縫製工場崩壊の件について、法的に建築基準法は存在するのか、どの程度機能しているのか。

A. 建築基準法は存在する。しかし、実際の建物が法律を遵守していない場合が多い。原因は、取締が強化されていないことにある。

## 3. 考察

バングラデシュに滞在するにあたり、「何に気をつければよいか」という問に対する答えは無数にあり、決していくつかで断言できないことを痛感した。政治、経済などあらゆる側面を把握してでさえ、完全に身の安全を守ることができるとは言い難い。また、情報収集するにしても、単に情勢を把握するのみにとどまらず、膨大な情報の中で何が自身に必要な情報なのかを見極めていかなければならない。このことはバングラデシュに限ったことではなく、海外に滞在する場合全てにおいて言えるだろう。身の安全を守るために自らが主体となって情報収集をする重要性を教えていただいた。

（文責：有田美玖）

## JICA バングラデシュ事務所

- ・訪問日時：2013 年 8 月 31 日（土）17：00～18：00
- ・面談者：佐藤祥子保健アドバイザー

### 1. 概要

#### 海外で働くということについて

- ・インドネシア、タイ、アメリカ、フィリピンなど、海外生活 16 年目。
- ・バングラデシュという異国の文化に自分という異文化が入ることにより、positive/negative な影響を与えうる。
- ・異文化で働くということは、自分が相手にとってどう見えるかを考えること。それを踏まえて、自分は、その国の文化を尊重する姿勢を見せることとして服装を合わせている(バングラデシュでは、サリーを着ている)。

#### 看護婦について

- ・バングラデシュでは、看護婦は価値が低いイメージがあり(夜間家を離れるのは売春婦と同じ、他人の体に触れる汚い存在、結婚する価値の低い)、看護師の力がきちんと理解されていない。
- ・今、学士レベルの、自分で判断して動けるナースをつくろう！という動きがある。
- ・縫製工場で働く女性のイメージが変わった(以前：村から出て働く、父・兄が守れなかったダメな存在 ⇒ 現在：稼ぎ手として力をつけてきている)ように、看護師のイメージもこれから変わるかもしれない。

#### 人権・暴力について

- ・首相など、女性の社会進出はしている国ではあるが、全体でみると割合は低い。
- ・都市圏では、民法に基づいて人を裁くようにはなっているが、地方ではまだまだイスラム法の方が重んじられるところもある。

[例]2010 年 5 月、既婚者のイトコにレイプされ、イスラム法上の姦淫の罪で、炎天下の中で鞭打ちされて殺された 14 歳のヘナちゃんのニュース

- ・DHS(Demographic and Health Survey)によると、バングラデシュの女性が考える夫に殴られてもいい理由(複数回答、対象：結婚している一般女性)には、料理をこがしたとき(4.1%)、子供の世話をしない(18.1%)、Sex を拒んだとき(8.1%)、夫と口論する(22.4%)などがある。32.5%の女性が少なくとも 1 つには○をつけている。
- ・教育レベルが低い女性ほど、また、貧困層の女性ほど、夫に殴られてもいいと考えている(老若の差はない)。このことから、大衆向けのキャンペーンも大事ではあるが、人口の中のどの層にアプローチすべきかを、考えるべきである。
- ・バングラデシュの女性は、18 歳くらいで 30 歳くらいの男性と結婚をする。つまり、家庭

という共同体が生まれたときから経済的・社会的に男性の方が地位が上であり、このような社会で本当に女性はこれから変わっていけるのか。

### 保健について

- ・バングラデシュでは、女性は息子をもたらす存在として価値があるとして扱われる。
- ・バングラデシュでは、妊産婦死亡率が高い。その死亡の要因としては、3つあげられる。割合としては、①、②、③の順に多い。

#### ①第1の遅れ

危険発生時の遅れ(家族内での話し合いが遅い、もたもたして、迷っている間に時間が経ってしまう等)である。

#### ②第2の遅れ

手段上の遅れ(道がない、車がない等)である。

#### ③第3の遅れ

受け入れ側での遅れ(医者がいない、輸血がない等)である。

- ・保健は、地域開発に近い要素を持つ。社会的な側面(ソフト面)に目を向ける必要がある。ex)いかに、ハード面で整っている病院をつくっても、女性が外出できない、病院に行けないような社会だったら意味がない。

### 佐藤さんからのメッセージ

- ・情報を見る目を養ってほしい。誰が、誰に向けた情報なのか？フィルターをかけて情報をみてみる。その情報と自分との関係性を考えること。

## 2. 質疑応答

質問：IT技術はどのくらい入ってきているか？

回答：「デジタルバングラデシュ」というスローガンを唱え、各方面で情報の整理・整備を徐々に行っている。診断書や文書などをデータ化して、探しやすくしようとしている。

## 3. 考察

お話の中でも、地方と都市圏との違い(考え方や、状況の違い)などを感じた。問題に対するアプローチ方法も、人口の層によって違ってくるだけでなく、都市か農村か、どのような地域か、ということで変わってくるのだらうと感じた。与えられた情報を鵜呑みにするのではなく、その情報の裏にあるものを考えたり、自分との関係を考えてみたりして考える必要があると思う。

(文責：松本江利奈)

## BRAC Microfinance Program (Dabi), Bashan village

・訪問日時：2013年9月1日（日）10：20～

・面談者：Ms. Anowwara (president)

Ms. ルミ (program organizer)

### 1. 概要

NGO の BRAC のマイクロファイナンスプログラムのうち、担保を必要としないプログラムを実施している Bashan 村の様子を見学させて頂いた。BRAC ではマイクロファイナンスを5つのステージに分けており、Bashan 村は最貧困層（ultra poor）とされ、そのうちのマイクロファイナンスを受けるトレーニング段階、ファーストステージ「Dabi」に分類される。援助対象は村の女性で、メンバーから選出された会長（プレジデント）やプログラムオーガナイザー（BRAC職員）の指導の下、家畜の飼育や豆の栽培をしながら2年のトレーニングを経たのち本格的なマイクロファイナンスを開始することができる。今回は月1回行われるミーティングの様子を見学した。村の女性が集金や記録をするためのたらいを中心に輪になって集まり、お金の返済や各自が持つ通帳にその記録などをつけていた。

### 2. 質疑応答

・お金を借りる際にどのような手続きが必要であるのか。

→BRAC にはマイクロファイナンスを受けるにあたり、自分と夫（または父親）の写真をはった身分IDカード、申請書などを提出しなければならない。ちなみIDカードは3年に1回役人がやってきて指紋などをとり発行してもらう。グループのプレジデントの推薦を受けてプログラムオーガナイザーが提出されたそれらの書類を BRAC にあげ、審査を経てマイクロファイナンスを受けることができる。

・返済頻度はどの程度か。

→1か月に1回の頻度で返済し、1年で借りた金額と利子を返さなければならない。借りた月は猶予期間とされ、翌月から返済義務が生じる。毎月の返済金額は同じである。

・借りたお金の使用用途（村の女性たちから話して頂く）。

→

（ケース1）

夫が雑貨店を経営しており、そのお店を広げるために使った。

（ケース2）

すでに8、9回借りており、その際は土地の購入や家の修繕のために使用した。ちなみに前回は1万タカ借りた。今回はリキシャ引きをしている父親にスクーターを買ってあげる



ため4万タカ借りている。

(ケース3)

2か月前にすでに返済を終えているが今回はただ貯金をするためだけに参加している。

(その他)

BRACのプログラムオーガナイザーの男女比率は男女半々。

村のマイクロファイナンスグループに参加している女性のうち最年少は20才の方(既婚)女性の多くが既婚者で、平均して2〜3人程度の子供がいる。

女性全員が携帯電話を所有している。

### 3. 考察

D a b i プログラムは本格的にマイクロファイナンスを受ける前段階としてのステージだということだが、融資を受けた村の女性たちはそれによって暮らしが向上しているようだった。一つ気になったのは、お金を何に使用したか聞いた際、お金は女性を通じてしか貸されないが多くの女性がそのお金をもとに自分で何か仕事をつくるのではなく家族や夫もしくは父親の稼業のために借りているという点であった。家族のために使えば女性の暮らし向きが良くなることにつながるのは確かだが、お金を女性自身のために使えるようになるのが本当のゴールではないかと思う。

(文責：高木優希)

## Community Empowerment Program

・訪問日時：2013 年 9 月 1 日（日） 11：00～11：40

・訪問先：Polli Shomaj meeting, Gazipur

・面談者：Mr. Luttar Rahaman (Field Organizer)

Ms. Forida Akter (President)

Ms. Rohima Bagom (Adviser)

### 1. 概要

BRAC による Community Empowerment Program の一環として、実際にガジプール県で行われているミーティングを見学させていただいた。ミーティングは月一回行われ、村の女性であれば誰でも参加することの出来る総会（**general meeting**）と、11 人の幹部による執行委員会（**executive meeting**）があり、それらを毎月交互に行っている。村の住民が自ら提案した議題をもとに、それらを執行委員会で話し合い、翌月の総会で扱うものを決定する。したがって、住民の関心に沿ったテーマを扱うことができ、人権や教育、農業など、分野も幅広く多岐にわたっている。また、各テーマに合わせてそれぞれの分野に精通しているゲストを呼ぶことも多く、その場合は執行委員会が希望を出し、BRAC がその交渉のサポートにあたる。総会では、その他にも食糧援助や資金援助などの中で、制度は整っていても住民が知らないために利用されていないものを知らせる場も設けている。このように情報を広く発信することで、認知度を高めると同時に、本当にその援助を必要としている人を見つけやすくなる。また、ここのミーティングメンバーの中からは過去に 3 人の女性が選挙に立候補しており、当選者はいないものの女性の社会進出の効果が認められる。今回見学したミーティングは **general meeting** であり、ゲストに Rohima Bagom さんが迎えられていた。

### 2. 内容

話し合われた議題は以下の 2 点である。

#### ① 政府による障害者手当について

障害者手当は精神障害、身体障害ともに対象とされており、手当を受ける条件としてバングラデシュ国民であること、6 歳以上であること、収入が 24,000tk 以下の貧困層であること、年金をもらっていないこと、などが決められている。実際にこの村には 3 人の障害者手当希望者がおり、その中で父を亡くし、母も働いていないという少年が現れ、彼に手当を受けさせるための話し合いがなされた。手当の申請をするには、まず福祉省に連絡を取り、7 日以内に申請書を提出しなければならないそうである。

#### ② 人権侵害について

女性が DV やレイプ、財産の強奪などの被害を受けた場合、その土地の有力者に仲裁を頼んで示談すればそれでよしという考えが根強く、警察に訴える人はまだ少ない。しか

し、村の有力者というのは汚職が横行しやすく、公正に裁かれ、罰せられているとは言いがたいのが現状である。そこで、この現状を変えるために必要なものとして、コミュニティ内の団結、高い意識、女子教育、そして警察へ訴えることが挙げられた。時間にかかるが、こうやって一つ一つ扱っていかなければ解決には繋がらないという理念のもと、被害者当人だけでなく、問題を見つけた人は警察もしくは **BRAC** の職員に伝え、決して村の有力者による示談には任せないという決議が行われた。

今までのミーティングで他にどのような議題が扱われ、どんな対応がされてきたのか、具体例をいくつか紹介する。例えば、娘が学校に行きたがらないのだからどうすればいいのかという議題に対しては、**BRAC** の協力を得て学習のモチベーションを上げる方法を講義した。また、ココナッツの不作が話し合われた時には農業アドバイザーの方を呼び、今のやり方の見直しや新たな知識を得る機会を与えたそうである。さらに、夫が離婚する際には婚姻時の契約で定めた婚資を全て支払わなければならないというイスラーム法の決まりに反し、娘の夫が何も支払わずに娘のもとを去ったとの訴えが出た時には、**BRAC** がその夫に直接支払いを命じた。しかしその男性が要求に応じなかったため、裁判所に訴える措置を取ったそうである。

### 3. 考察

住民が自主的に集まり、皆で一つの議題を考えるという場が実現されている姿を見て、彼らの意識や向上心の強さを肌で感じる事ができた。今回のミーティングでは **Luttar Rahaman** さんという **BRAC** 職員の男性がずっと中心となって話を進めており、住民の方が意見する場面はあまり多くは見られなかったが、それでも熱心に耳を傾けている様子は伺えた。議題も住民から出されたものであることから、住民のニーズが上手く反映された取り組みではないかと思う。ただ、情報は全て口頭のみで伝えられ、参加者も皆手ぶらでただ聞いているという状況だったので、どこまで正確な情報を持ち帰ることができるのかやや疑問が残った。どれほど識字能力があるのかは確認ができなかったが、今後はさらにそういった点の環境改善など、質の向上も求められるだろうと思う。それでも、障害のある少年のために皆が自分の時間を費やして話し合ったりするなど、お互いに支え合うコミュニティの団結力の強さは今まさに日本が失っているものであり、女性に限らず **Community Empowerment** は単に途上国だけの課題ではないと気づかされた。コミュニティの希薄化がかなり進行している日本にとっても、学ぶべきことは多いだろう。

(文責：片山珠)

## Health Program

- ・訪問日時：2013 年 9 月 1 日（日）
- ・訪問先：BRAC regional office
- ・面談者：Rashida さん (Health Volunteer), Jharna さん (Health Worker), Kajal さん (Program Organizer), Khaled さん (Program Organizer), Taslima さん (Field Organizer)

### 1. 概要

バングラデシュには政府と BRAC が連携して行っている DOTS (Direct Observed Therapy Short-course)と呼ばれるプログラムがある。Rashida さんは Health Volunteer (HV) として働いている。彼女は家庭訪問を行い、咳が止まらない人の痰を採取して検査所に届け、結核と診断された際に治療をすぐに始めさせ、6 か月間の治療において薬を確実に服用してもらうため毎日患者の家を訪問する。結核の治療・薬は無料であり、6 か月後、結核が完治すると患者 1 人につき 500 タカが BRAC から彼女に支給される。また、彼女は BRAC のマイクロクレジットの顧客でもあり、医薬品を BRAC から購入し、それに少し価格を上乗せして販売することで収入を得ている。彼女は一般の薬だけでなく、コンドーム・ピルなどの避妊具や生理用ナプキン、お産セットなども販売している。

Health Worker (HW)である Jharna さんは母子保健を担当しており、妊婦のいる家庭を訪問し、健診を行う他、食事、注意すべき 10 の病気、家族計画の重要性、お産に備えた貯金など、出産に向けての指導を行う。

BRAC の Health Program は体系化されており、1 人の HW の下に 10 人の HV がいる。そして 1 人の HV が 200～250 軒の家を担当し、HV は 1 日に 20～25 軒の家を訪問する。

### 2. 質疑応答

HW と HV はすべて女性であり、Program Organizer には男性も含まれる。HW は 10 年の学校教育を受けたのち、BRAC で 15 日間の研修を受け、現在の業務についている。HW は月に一度妊婦のいる家へ訪問する。出産後も HV がそれぞれ 3 日以内、28 日以内、48 日以内に最低 3 度は家を訪問し、その後は特に子供を見る意味での訪問はなく、一般の定期検診で訪問する形になる。

### 3. 考察

Rashida さんは、この HV という仕事を始めたことにより収入も増え、コミュニティの人々から尊敬されるようになったといい、とても嬉しそうだった。HV の存在はコミュニティの人にとってもプラスの存在であり、互いに良い関係性を保てていると思う。

また、HW を通じて妊婦に対して出産に向けての教育を行うことで、母親や新生児の妊婦死亡率や乳幼児死亡率などが低下しているという話を聞いたが、HW や HV の存在もそれに貢献しているのだろうと思った。（文責：生津千里）

## BRAC Dairy and Food Project

・訪問日時：2013年9月1日（日）15：50～16：30

・面談者：Shahidur Rabbani（職位：Production Manager）

### 1. 概要

NGO 団体の BRAC が経営する、バングラデシュで二番目に規模が大きい酪農工場である。なお最大規模の工場は国営であるため、それに次ぐ規模ということになる。

ここでは、買い入れた牛乳を加工して出荷する作業を行っている。マイクロクレジットによりローンを組んでお金を借りて乳牛を飼育している人が返していけるように、企業化したプログラムである。ここでは約 700 名が働いているそう。見学時に見かけたのは男性が多かったように思われるが、約 60%が女性であるそう。

#### <製造工程から製造品流通の流れ>

農家→収集→冷蔵庫センター→工場→…

…→分配：BDFP センター(46%)／他の分配先(54%)→小売業者→消費者

10℃を超えると微生物が発生してしまうため、農家から冷蔵庫センターまでの移動・保存は 4℃以下に保つようにされている。冷蔵庫センターは農家から約 5km 以内にあるが、各冷蔵庫センターから工場（ここあるいは国営の工場）までは 400～500km の距離がある。しかし、断熱材付きのトラックにより運搬するため 4、5℃～6℃に保ったまま運ぶことが可能になっている。ここではこのトラックを 28 台所有しているそうである。

#### <製造品>

商品としては 18 種類作っている。例えば、滅菌牛乳、UST（Long life Milk と呼ばれる消費期限が長く、約 6 ヶ月保存可能なパック牛乳）、マンゴーミルク、チョコレートミルク、ヨーグルト 3 種、バターなどである。

全体の 15 万リットルのうち、10 万リットルは自然乳として市場に出し、5 万リットルは加工乳としているそうである。これは例えばパウダーミルクなどである。

また、BRAC というブランドとしては、牛乳以外にチキンなども売っているそうである。このようにして利益を出しているからには、BRAC も税金を払っている。NGO のプログラムとは言え、通常の企業と同じように行っている。

#### <見学>

工場内は、かすかに消毒の匂いがしていた。工場に運ばれてきた牛乳は、まず実験室でサンプルチェックを行うそうである。ここで品質が確かめられた後、トラックのタンクから、天井に這わせた管を通して、自動的に牛乳が工場内に運ばれていく。こうした丁寧な品質管理を行っている証拠として、消費期限とともにパッケージに「ISO」の印が付いてい

る。牛乳が入っている容器は紙パックではなく、銀色のアルミ製の袋状のパックであった。端を切ってストローをさして飲むようになっている。

また、この工場では、水のリサイクルも行っており、汚水からきれいな水に精製するタンクがあった。

## 2. 質疑応答

Q. この製品はスーパーで売っているのでしょうか。

A. はい、売っています。

（この工場の訪問後、現地のスーパーに行く機会があり、実際に商品を確認することができた。）

## 3. 考察・コメント

Shahidur Rabbani さんの案内して下さる様子からは、ここはバングラデシュの中でもきちんとした設備で自信をもって紹介できる工場なのだということが伝わってきた。ここでは、工場での生産という企業と同様の活動がなされており、企業に近いけれども、その生産による利益はきちんと人々の生活の自立・向上に結びつくことが目指されているという、幅広く多彩な支援 NGO 団体の BRAC のあり方が実感できた。

（文責：長屋裕子）

## BRAC Human Rights and Legal Education in Manikganj

・訪問日時：2013 年 9 月 2 日（月）10：05～10：30

・面談者：BRAC Group Organizer, BRAC Bare Foot Lawyer

### 1. 概要

BRAC の Human Rights Education では農村部の女性を対象にした犯罪被害者支援や人権教育を行っている。訪問では講師の裸足の弁護士(Bare Foot Lawyer)と呼ばれる女性が集まった 40 名弱の女性たちに対して人間（女性）として何が必要なのかを絵を見せながら教えているところを見学した。絵を用いる理由は文字が読めない人も多いためだそう。子どもは学校へ行くべきということや家事は女性だけの仕事ではないことなどの、衣食住や教育、宗教や選挙、法律などについて触れていた。そしてそうしたことは人の権利であって政府も人々にそうした権利を保障する責任があるということも行っていた。

この活動の目的としては農村部の女性たちに人権について知ってもらい、自分たちも権利を持っていることを認識してもらうことがあるそうだ。

### 2. 質疑応答

- ① 先生をしていたのは裸足の弁護士(Barefoot Lawyer)と呼ばれるこの地域出身の女性で、1986 年から活動している。この仕事についた理由については女性を助けるためと話していた。最近では夫に一方的に離婚されてしまった女性が生活を保証されるように夫と交渉するのを支援したそう。
- ② BRAC 全体では 35 人の弁護士、114 人の裸足の弁護士がいてこうした人権教育や犯罪被害者の支援に取り組んでいる。そしてこの人権教育は 12 回のクラスが 1 セットになっており、また週に 2 回法律相談も行っている。人権教育の対象は女性で、参加している人の多くは 18 歳以上だが特に年齢制限は設けていない。またこの教室の広報は、BRAC の他の活動で個別の家庭へ訪問する人が知らせているらしい。
- ③ 来ている女性にこの教室に来た理由と得たものを訪ねたところ、人権という教室の内容に興味を持って参加したが、はじめは夫からは毎日教室に通うことに対して不満を言われたことや、今は夫も理解してくれて自分も法律のことを知り強くなれてうれしいとの返答だった。

### 3. 考察

この教室ではかなり広範囲の人権を扱っていたが、絵を示しながら教えて行くのでわりと私たちにとってもわかりやすかった。そして 40 名弱という多くの女性が昼間に人権を学びに来ることができるということからある程度女性たちが自由に決定できることや BRAC の勢力が農村部でも強いことが予想できる。教室自体は 12 回の集中講義のような形だが、週 2 回法律相談を行うことができることは、学んだ人権を実際の生活と結びつけることを

可能にするものだろう。

#### 4. 備考/コメント

人権についての教室は毎日やるとのことだったが実際にどれだけの女性が毎日参加することができるのか、またどのように内容を変えているのかが気になった。

(文責：柳下明莉)



## BRAC Primary School

・訪問日時：2013 年 9 月 2 日（月）11:30～12:20

・面談者：アシフさん（BRAC 職員）

### 1. 概要

今回見学した BRAC Primary School は 3 年前に出来た。元々あった別の建物を小学校として再利用しているため、建設費はかかっていないが、トイレと手洗い場だけは必ず増設している。なるべく村の中心に学校を位置させて通学も便利にしている。教室は 1 室だけで靴をぬいで上がる。靴は入り口に円形にきれいに並べられていた。入り口を入ってすぐ黒板が 1 つあり、子供たちはコの字型に男女混合で座っていた。机やいすはなく電気もついておらず少し薄暗い。窓は 2 か所あった。子供たちは座っている前に教科書とペン立てと教科書の上に竹のものさしを置いていた。バングラデシュの初等教育は 5 年制なのでそれに合わせてこちらの小学校も 5 年制であるが、特徴的なのは 5 年に 1 度しか生徒を受け入れないことだ。つまり 1 年生で入学した子供を 5 年間教育し、その子供たちが卒業してから次の新入生を迎えるのだ。入学するのは就学年齢の 6 歳の子供だけでなく、家庭の事情で学校へ行けない子供やドロップアウトしてしまった子供も含まれる。今回訪れた 3 年生のクラスは男子 12 人女子 21 人で合わせて 33 名いたが、身長を見る限り少し年上の子もいたように見受けられた。この小学校では 1～3 年生まで国語(Bengali)、英語(English)、算数(Mathematic)、環境(Environment)の 4 教科を教えており、4～5 年生になると加えて理科 (Science) と宗教(Religious)の授業が増える。教科書は BRAC から配られるものだ。政府の基準にそってできている。見学の流れとしては、子供たちの英語での自己紹介のあと私たちお茶大の学生も英語で自己紹介。そのあとに BRAC 職員の方から小学校の説明をしていただき、主に子供たちへの質疑応答、子供たちから日本人への質疑応答、そして通常授業ではなく私たちのために用意してくれた子供たちから歌とダンスの披露、最後に泉が学生を代表してあいさつをし、長縄を披露、贈答した。

### 2. 質疑応答

Q.将来の夢は？

A.医者、パイロット、教師、科学者、警察官、軍人、看護師、エンジニア、歌手

Q.好きな教科は？

A.ベンガル語が人気。算数、英語、理科が同等ほどで宗教が少なめであった。環境と答える子はいなかった。

Q.学校に対する印象は？

A.先生がよく教えてくれてうれしい。ダンスや音楽も楽しい。友達というのが楽しい。と肯定的な意見ばかりだった。

Q.宿題はありますか？

A.ある。

Q.ペンや筆記用具はどうやって手に入れたんですか？

A.学校から配られる。

Q.壁に貼ってある掲示物は何ですか？

A.子供たちが作った作品が飾られている。

### 3. 考察

BRAC の小学校は非正規な小学校といえるが、子供たちが卒業後スムーズに進学できるようになるべく政府の方針に合わせて教育を行っている。通っている生徒は 1 度学校に通っていたがドロップアウトしてしまった生徒や学校へ行けなかった生徒なので、様々な事情や心境があるはずだが、それでも学校が楽しいという意見ばかりだったので、どんな形であれまずは教育に触れて友達を作る機会を子供たちに与えることが重要なのだ。日本の学校について興味を持っている子供も多かったため、他の国の同世代の子供の生活などについて触れる機会はなかなかないのだろう。しかし多くの子供がこのことに対し興味を持っていた。

(文責：泉有香)

## BRAC Micro Finance

- ・訪問日時：2013 年 9 月 2 日（月）12：30～
- ・訪問先：アシュラフさんのお店
- ・面談者：アシュラフさん(traditional medical doctor, 薬販売)

### 1. 概要

アシュラフさんはマイクロクレジットの顧客の中でも非常に成功した人である。生活に特化した Dabi とは異なり、このクレジット（progoti）は店舗を持っており、借りる 3 倍の財産を持っている必要があるなど、返済能力のある人にしか貸さず、中流階級向けである。

彼は 12 年ローンを借り続けている。その理由として、一般の銀行は手続きが面倒だが、BRAC のローンは、国民全員が持っている National ID と営業許可ライセンス、土地などの財産を持っていれば簡単に受けることができるからである。初めの年は 30 万タカを借り、返却したのち、翌年には 40 万タカを借り、予定通り返却した。こうして今までに借りたローンは全部で 400 万タカに上る。このお金で彼は店舗をさらに広げた。彼のお店では、ドイツやパキスタンから輸入した薬を販売しており、現在は約 40 万タカ相当の薬をそろえている。彼のお店がある通りは 2km にわたってバザールがあるが、その中で 74 の店が融資を受けている。

クレジットの利子は 27%と、日本と比較すると高いように思われるが、バングラデシュでは預金の利率が普通預金で 4～5%、定期預金で 12%ほど（参照：国際人材交流機構）である。一方日本は、貸付の利率が 16～18%で預金の利率がわずか 0.05%である。このことを考慮すると、バングラデシュの 27%の利率は相対的にみればそれほど高くないといえる。

### 2. 質疑応答

質問：アシュラフさんは毎年 BRAC からお金を借りているが、お金を借りずに貯金するという選択肢はないのか。

返答：利子は高いが、店を広げたり、薬の数を増やしたりしたいのでお金が必要である。それによって得た収入できちんと返済している。

質問：利子が 27%と高いが、返済できない顧客はいないのか。また、そのような人にはどのような対応をとるのか。

返答：返済できない割合は小さいが、このバザールでは 74 人中 1 人が返済できなかった。このように返済できない場合は、民事裁判にまで発展することがあり、その際は家など財産の差し押さえが行われたり、連帯保証人へ返済を求めたりすることもある。

### 3. 考察

マイクロクレジットと言うと貧しい人（特に女性を中心に）にお金を貸して、生活の質

の向上や貧困から抜け出すための手立てとするというイメージが強かったが、このクレジットは性質が異なると感じた。利子 27%をととても高いと感じていたが、預金の金利も考慮すると日本よりも良心的であるということが興味深かった。

#### 4. 備考

アシュラフさん以外の方とも面談を設ける予定だったが、雨のため断念。

#### 5. 参考文献

一般社団法人 国際人材交流機構(2013/11/18 閲覧)

<http://www.ihn.or.jp/>

(文責：生津千里)

## **Ayesha Abed Foundation(Handicraft Production and Training Centre)**

・訪問日時：2013 年 9 月 2 日（月）14：20～15：10

・面談者：Shymal Kr. Das(工場長)、Ashim さん(BRAC の職員)

### 1. 概要

Ayesha Abed Foudation は、お土産ものや手工芸品をつくっている家内工業の拠点であり、つくられたものはアーロンショップで売られるほか、外国にも輸出している。

従業員は 473 人で、そのうち 350 人が女性いる。ここで働いている人の時給は 7 千 Tk ～8 千 Tk であり、縫製工場と比較してみると、縫製工場の時給はだいたい 3 千 Tk～4 千 Tk くらいなので、比較的高いのではないかといえる。しかし、縫製工場のようにノルマがあるわけではない。その上、Child Care Room があったり、医者が週 2 回きたりすることなどから、従業員にとって働きやすい環境が整えられていた。

見学した工程は、以下の通りである。

①布地に模様をつけるための、模様を木に彫るところ

②Block Print

インクをつけて、ハンコのように模様をつけているところ



**Figure 3** 布に模様をつけていく従業員

③Screen Print

ステンシルのように、一度に広範囲に模様をつけているところ

④Block Library

10 年前からの柄を保存しているところ

⑤Machine Embroidery

ミシンで刺繍をしているところ



**Figure 4** ミシンの工程の様子

⑥手での刺繍をしているところ



**Figure 5** 刺繍工程の様子

⑦併設している販売店舗

## 2. 質疑応答

質問：柄をデザインしているのは誰ですか？

回答：専属の **desiner** がスタッフとしていて、その人がデザインしている。

## 3. 考察

医者が週 2 回きたり、Child Care Room があつたり、給料も平均的な縫製工場の 2 倍ほどもらえることなどから、労働条件としてはとても整っているように思われた。

非常に細かい作業を行っている工程もあるが、同じ作業を繰り返し行う仕事なので、練習をすれば文字が読めない人や、専門的な知識がない人でも行うことができる作業である。教育を受けられなかった女性などにとっては、非常に良い雇用機会を創出している工場だと感じた。

(文責：松本江利奈)

## BRAC Horticulture Nursery

・訪問日時：2013 年 9 月 2 日（月）

・面談者：MD. DECOWAR HUSSAIN / SENIOR MANAGER(BRAC)

### 1. 概要

品質のよい苗木に利益を少し上乗せして主に貧しい農家に対して売っており、緑化のはたらきもあるため、環境活動という面もある。

主に、果物類、香辛料、材木、観葉植物などの約 200 種の苗木が生産されている。また、それらの苗木を育てるための土も生産している。事務所に置く用とする大きめの苗木も生産している。ここで生産される苗木はアーロンでも販売されているものもある。

Green house というビニールハウスでは色んな種類のサボテンが生産されていた。

苗木を生産するにあたっての雇用の創出のはたらきもしている。

### 2. 考察

品質のよい苗木を貧しい農家の人々に売るという面だけではなく、生産するにあたって人を雇うことで雇用の創出にもつながっている。訪問した際にも、4～5人のグループ2組ほどでマンゴーの苗木をつくっていたのだが、全員女性であり、女性たちの仕事の創出にもつながっているという点をうかがえた。

### 3. 備考/コメント

マンゴーの苗木については、実がなるまでに3～5年ほどかかり出荷するまでには7年ほどの時間がかかるが、マンゴーの苗木の生産が一番簡単であるということであった。

（文責：須崎情恵）

## BRAC Sanitary Napkin Production Center

・訪問日時 2013 年 9 月 2 日（月）15：20－16：00

・面談者 Shelina Regon 氏

### 1. 概要

Sanitary Napkin Production Center は、BRAC の企業部門の一つに属する。ここで製造するナプキン市場には出回らず、BRAC の Health Program activities で活躍する Health Volunteer 向けに販売される。Health Volunteer とは、担当の農村の患者に対して薬を提供することを主な仕事としている女性の方々である。Sanitary Napkin Production Center で製造されたナプキンを購入し、少しの利益をつけて農村の女性に販売することで、Health Volunteer 自身が収入を得るという仕組みになっている。このようにターゲットを限定して製造されているため、農村の女性は市場の半額程度の値段でナプキンを購入することができる。

Sanitary Napkin Production Center の従業員は全員女性で 45 人が雇われており、5 つの部屋に分かれて作業を行う。ナプキンの原材料である綿を切って折りたたみ、ネットに入れて筒状にする工程を行う部屋が 2 つ、ミシンで縫う部屋が 1 つ、121 度で滅菌する部屋が 1 つ、滅菌したナプキンをドライヤーで乾かして袋詰めする部屋が 1 つである。このように、工程ごとに部屋が分かれており、流れ作業が行われている。衛生管理の面も徹底されており、従業員はどの部屋で働く場合でも全員三角巾とマスクを着用していた。労働形態についても話を伺った。まず、従業員には毎月のノルマが課せられている。従業員全体で月に 3 万個のナプキンを製造することが目標だ。1 袋に 10 個のナプキンが入っているため、月 3000 袋の製造が目標である。労働時間は、8 時から 17 時までで食事は付いておらず、残業もない。これらを条件に毎月一人当たり 5000 タカを賃金として受け取ることができる。ダッカ市内と比較すると賃金は低いのだが、Sanitary Napkin Production Center がある立地を考慮しても、市内から離れたところに在住する従業員ばかりなので、生活する分において賃金は相対的に高いと言えるようだ。

### 2. 考察

Sanitary Napkin Production Center は、ナプキンという女性が使用する製品を通じて、女性の活躍の連鎖を生み出す大変魅力的な事業である。女性の従業員が製造したナプキンを女性の Health Volunteer に販売し、Health Volunteer は農村の女性ナプキンを安く提供する。どのアクターにおいても、それぞれに利益がある。バングラデシュはイスラム国家であるため、Sanitary Napkin Production Center でのナプキンの製造を含め、女性の性に関わることは女性が担うことを BRAC では大切に、女性の雇用を重視しているという印象を受けた。特に、Sanitary Napkin Production Center のように市内から離れた地域でも女性が生き活きと働く姿は大変印象的であり、彼女たちこそ今後バング



ラデシュが発展していく原動力になるだろうと強く感じた。BRAC がバングラデシュ全体で多様な NGO 活動や Sanitary Napkin Production Center のような企業活動を行っていることを実際に見聞し、BRAC の多大な影響力を実感することができた。しかし一方で、BRAC の企業活動が成功せず打ち切りになった際に被雇用者への対応はどうしているのかが不透明といった問題もある。Sanitary Napkin Production Center の従業員の女性たちは、スキルを身に付け自信を得ていた。しかしそれだけにとどまらず、雇用者、被雇用者の壁をできるだけなくし、より主体的に社会に関わっていける環境を整える必要が課題としてあるのではないか。

(文責：有田美玖)

## JICA 初等教育専門家との面談 “バングラデシュの初等教育と JICA 協力”

- ・ 訪問日時：2013 年 9 月 3 日（火） 9：40～12：00
- ・ 訪問先：Directorate of Primary Education
- ・ 面談者：橋本和明専門家（Primary Education Adviser）  
Mr. Mostafa Kamal Pasha（Field Consultant）  
Mr. Aziz Ahmed（元初等教育局局長）

### 1. 概要

ダッカにある初等教育局を訪問し、バングラデシュにおける教育の仕組みや現状、現在行っているプログラム、JICA の活動内容など教育分野に関する様々なお話を伺った。

#### (1) バングラデシュの教育制度

バングラデシュでは 5～6 歳の 1 年間を対象とした就学前教育、6～11 歳の 5 年間を対象とした初等教育、11～18 歳の 7 年間を対象とした中等教育、18 歳以上を対象とした高等教育があり、初等教育までは無償で受けられる。中等教育はさらに 3 つに分かれていて、3 年間の Junior Secondary Education、2 年間の Secondary Education、2 年間の Higher Secondary Education で構成されているほか、高等教育の中にも大学や大学院、短大、職業訓練の専門学校などが存在する。現在は初等教育が義務教育と定められているが、教育省は初等教育と 3 年間の Junior Secondary Education を統合し、義務教育を 8 年間に延ばそうと計画をしている。しかし、コストやインフラ、アクセスなどの面で課題が多く、実現にはまだ遠い。

また、バングラデシュには教育を管轄する組織として初等大衆教育省（Ministry of Primary and Mass Education）と教育省（Ministry of Education）がある。前者は Non-formal Education、障害者教育、就学前教育、初等教育を担当しており、後者は中等教育、高等教育、職業教育、マドラサを管轄している。マドラサは教育省の管轄下にあるイスラームの学校で、主要 5 科目も学習するが割合として宗教の時間が多く、コーランを読むためにアラビア語の授業もある。国は国家予算の 12～13% を教育にあてている。

#### (2) 初等教育の仕組みと現状

表 1 初等教育の日本との比較（2012）

	日本	バングラデシュ
小学校数	21, 100	92, 000
生徒数	6, 677, 000	17, 500, 000
教師数	418, 000	370, 000

上の表から、バングラデシュでは教師の数が圧倒的に不足していることは明らかである。その中で全ての生徒に対応するため、学校は午前と午後の 2 部制を採用しているが、一方では時間が足りず、教育の質もなかなか上がらないというジレンマも抱えている。一般的

に給食はないが、一部の貧しい地域では WFP による School Feeding Program を実施しているところもある。初等教育の学校は 13 以上の種類に細かく分類され、教師数や生徒数、男女比などの統計が取られている。それらをまとめた国全体の統計の変化を表したものが以下の表である。

表 2 初等教育統計

	2005			2012		
	合計	男子	女子	合計	男子	女子
純就学率	87.2%	84.6%	90.1%	96.8%	95.0%	98.8%
終了率	52.8%	—	—	73.8%	71.7%	75.8%
ドロップアウト率	47.2%	—	—	26.2%	—	—
卒業試験合格率	92.3%	92.7%	92.0%	97.35%	97.53%	97.19%

これを見ると、2005 年に比べて 2012 年には全ての数値が改善されていることがわかる。ただ注意すべき点として、地域間格差と統計の不透明さがある。地域間格差はその言葉通り、都市部と農村部との間ではいまだ大きな違いがあるということだ。首都ダッカは環境も整っており、教育の質がいい。しかし北部の沼地が多い地域では、貧しい子供は学校へ通うのに毎日自分の足で川を渡らなければならない。特にシレット県は国内最低水準と言われている。次に統計の不透明さとは、統計の対象になっているのは市民権を持っている子供に限られており、出生登録をしていない子供は含まれていないということである。ところが出生登録をされていない子供の数は多く、実際には 150～300 万人あまりもの子供が学校に行けていないのではないかと見られている。したがって、そういった子供たちの支援を行う NGO 活動がバングラデシュでは盛んなのであり、また不可欠なのである。バングラデシュの特徴の一つとして、男子よりも女子のほうが就学率が高い。これは 2005 年の段階ですでに結果が出ているが、その傾向は今なお続いている。

次に具体的にどのような課題点があるのか、量的側面と質的側面の両方から見てみたい。量的側面で一番の課題はドロップアウト率の高さである。2012 年で 26.2%と言われており、原因にはアクセスが悪い、義務教育であっても試験を受けるのにはお金がかかる、卒業しても就職が保障されるわけではないことから行く価値が見出せない、などが挙げられる。一方質的側面の課題として、2011 年に 726 校で 17000 人を対象に実施した試験の合格率が国語で 25%、数学で 33%という結果が問題になっている。原因は、思考力を測る問題が多く出題されたためと考えられており、今までいかに暗記中心の教育を受けさせてきたかを物語っている。したがって今後は思考力に重点を置いたさらに質の高い教育が求められる。

### (3)Primary Education Development Program 3

2011 年から始まった PEDP3 と呼ばれるこのプログラムは 29 もの細かなプロジェクトで構成されており、バングラデシュ政府と援助機関が協力して計画を実施するセクターワイド・アプローチによって、5 年間実施される。対象は初等教育の学校で、マドラサはこれに

含まれない。資金は9つの援助機関(世界銀行、アジア開発銀行、ユニセフ、EU、イギリス、スウェーデン、オーストラリア、カナダ、日本)から5年間で最大計83億ドルが渡されるが、1年ごとに評価が行われ、定められた9つの指標に到達できなかった場合にはこの援助額が減らされる。したがって政府は必死に結果を出そうと取り組むのである。その指標は3年目の中間レビューで適切かどうか見直される。

#### (4)JICA Support Program 2

JICA のサポートは 2004 年に始まり、最初は教員研修や理数科のカリキュラムの見直し  
が主な内容だった。2012 年には 20 年前から使われていた教科書を改訂し、研修内容もさ  
らに発展させた。具体的には研修の指導者をトレーニングする、教師同士で学内の問題点  
を話し合い、それをさらに異なる地域の教師間で共有する、といったことを行った。さら  
に TSN(Teacher Support Network through Lesson Study)と呼ばれる授業研究を導入し、  
2012～2013 の 1 年間で 7070 人の教師と職員に実施した。今年度は 14000 人以上の教師に  
行う計画である。また、Communication for changes といい、担任と保護者間でのコミュ  
ニケーション手段として連絡帳を使う取り組みを、現在 5 つの学校で実験的に導入してい  
る。その他にも、Learning with Joy や Message of Lights といったテーマの初等教育プロ  
グラムを一部ラジオで流したり、教育におけるサクセスストーリーを描いたビデオを制作  
してテレビで放送したりもしている。また、活動のモニタリングも行っている。

Support Program2 以外に JICA が行っている支援活動には、PEDP3 のための 2500 万  
ドルの無償資金援助、日本で行う教員研修の実施、PEDP3 を主とした初等教育プログラ  
ムのアドバイザーの派遣があるほか、現在 15 人の青年海外協力隊が教育分野で活動している。

最後に、バングラデシュではなぜ女子の就学率がこれほどまでに高いのか、Aziz Ahmed さ  
んに伺った。バングラデシュは伝統的に家族やコミュニティの中に教育が深く根付いてお  
り、イスラム国だが女子教育に関しては比較的リベラルな考えを持っているという。独立  
直後の 1980 年代では、女子の就学率は 30～35%にすぎず、識字率も 20～25%だったが、  
この状況を改善するためにまずモチベーションの向上を目指してテレビやラジオ、新聞な  
どのメディアを利用したキャンペーンを行い、宗教指導者にも女子に教育を受けさせるよ  
う指導を頼んだ。次に貧困層への奨学金を設け、男子用と女子用でトイレを分けるなどの  
環境改善にも取り組んだ。さらに女性教員の増員にも励み、80 年代で男性：女性＝6：4 だ  
った状況から、現在は 5：5 の割合にまで変化し、女子教員が一人もいない学校はない。高  
等教育ではいまだに男子の方が多いが、女子の数は右肩上がりであり女子寮の設立なども進ん  
でいる。

## 2. 考察

バングラデシュの教育分野における数値が他の途上国と比べても特に優れた変化を遂げている裏側には、国家と海外の援助機関との連携の強さが影響している。また、複数の援助機関が協力してプログラムに取り組むことによってより規模が大きく、効率的で、モニタリングもきちんと管理された教育サービスが実現できているのだと感じた。NGO には NGO にしかできないミクロな支援がある一方、このように政府レベルで多額の資金を動かすマクロな支援というのも不可欠であることから、様々なアクターが情報共有し、お互いに協力しながら活動を行うことが今後ますます求められるだろうと思う。

(文責：片山珠)

## JOCV 勤務の小学校訪問

- ・訪問日時:2013 年 9 月 3 日 (火) 14:00～
- ・訪問先:JICA JOVC の方が勤務してらっしゃる現地小学校とスラム街
- ・面談者:大石小也華隊員・金宮剛隊員・武藤功調整員・Ratna Gcain 校長先生・Shika 先生・Shuly 先生

### 1. 概要

JOCV (海外青年協力隊) としてバングラデシュの小学校教員として働く大石隊員・金宮隊員とともに、ミルプールの小学校を訪問し、小学生の授業参観・交流を行った。授業は英語・算数・ベンガル語・理科・社会を中心に行われていた。バングラデシュの小学校は 5 年制でこれに加え、就学前教育も導入されつつある。今回訪問した小学校は、公立の小学校に経済的理由等で通えない子どもたちのために BDP という現地の NGO が建設した学校である。小学校の近くにあるスラム街を実際に見学した。今回訪問したスラム街は、スラムの中でもそこまで貧困レベルの高いところではなかった。

### 2. 質疑応答

〈校長先生への質問〉

- ①この小学校において、開校当初から最も変化を感じられたことは何か  
→バングラデシュでは、中学校に行くためにはテストに受からなければならない。それは、公立もこういった NGO による小学校も同様の試験であるため、最初は中学校まで行ける子が少なかった。しかし、現在は 5 年生にまで進級した子のほとんどが中学校に進学している。今後も、まずは進級、そして中学校へ進学できるように取り組んでいきたい。
- ②子どもたちに人気の科目は何か  
→圧倒的に英語。しかし、成績はさほど良くはない。
- ③今後の取組みについて  
→今後は、JOCV なしでも、後からんだことを生かして自分たちの力だけで学校運営できるようにしたい。

### 3. 考察

今回、何らかの理由により小学校に通えなくなった子どもたちのために現地の NGO が建設した小学校を訪問させて頂いた。私は、英語の授業に参加させて頂いた。驚いたことに、その内容を見たところ、恐らく日本の中 2 レベルのものを 5 年生 (現地の小学校の最高学年) が学習していたようであった。大石さん (JOVC) にお話を少し伺ったところ、「バングラデシュの小学生は学習能力だけでなく、精神的にも日本の中 2 レベルにあるのではないかと一緒に過ごしていて思います」と話されていた。それは一緒に過ごさないと分からないことであろうと感じた。しかし、子どもらしい無邪気さ、あどけなさも感じられた。

一緒に長縄跳びをして遊んだのだが、男の子よりも女の子の方が積極的で笑顔が印象的だった。そのような子どもたちを教えている先生方は教育熱心で、在校生がきちんと卒業して中学校に行けるようにと日々取り組んでいるという。今後、JOCV 抜きにも自分たちだけで学校運営できるようにしたいと考えておられた。

また、近くにあったスラム街にも訪問した。今回訪れたスラム街にはテレビがある家が多く、私が想像していたスラム街とは違い、インフラ設備が少しは整っていたようだった。

最貧困国と言われるバングラデシュではあるが、ここ数年の成長率はかなり大きい国でもある。小学校も含め現在バングラデシュでは学校制度の確立に取り組んでいる。今回はそのほんの一端に触れただけであるが、今勉強している子どもたちが将来、世界に影響を与える存在になるのではないかと、そう感じた今回の訪問であった。

#### 4. 備考/コメント

JICA(Japan International Cooperation Agency)

JOCV(Japan Overseas Cooperation Volunteer )

BDP(Basic Development Partners)

(BDP について参考資料 : [http://acef.or.jp/?page\\_id=98](http://acef.or.jp/?page_id=98))

(文責 : 乙村瞳)

## SMPP における BP と CSG 定例議会訪問

- ・訪問日時：2013 年 9 月 4 日(水)10：30～
- ・訪問先:JICA 母性保護プロジェクトによる現地コミュニティ訪問
- ・面談者:吉村幸江専門家・横井健二専門家

### 1. 概要

JICA では女性保護プロジェクトを行っている。これは、Central(中央)・District(群)・Upazila(県)・Union(群)と階層的に行われている。ここでは、そのうちの Union での活動を紹介する。Union には CG(Community Group)というものがあり、BP(Birth Planning)という出産計画を指導している。これはさらに、CSG というものがあり、CG の構成員はある一定地域の CSG メンバーで成り立っている。日本で言うと、村が CG で各村の町が CGS にあたる。CSG は自分が担当する地区での Birth Planning を行っている。Birth Planning とは妊婦だけでなくその親戚を集めて、出産～産後の指導を行っている。また、CG では CGS が集まって、その Union にどのくらいの産婦がいるのか、産後の女性についてはどこの病院で出産または自宅分娩だったのか等の確認を行っている。CSG メンバーはその村のクリニック職員だけでなく、元教員だった人、伝統的産婆など多様な構成員である。

### 2. 質疑応答

〈TBA(Traditional Birth Attendant)の方に質問（今回、CSG としてある家族に Birth Planning を行っていた方）〉

#### ①昔と今とで変化したこと

→今までなかった知識を得られたことで、自分のお産に対する考え方が変化した。また、このような自宅での教育は以前なかったため自宅分娩がメインだったが、この教育のおかげで危険なときは病院に行ってより安全なお産ができるようになった。

#### ②今回の TBA の方の年間平均お産介助数

→20 人/年（今回の TBA の方は、お産介助以外にも仕事をされているそう）

〈CSG の方への質問〉

#### ①CSG の頻度

→2 ヶ月に 1 回。ちなみにメンバーは固定。

#### ②お産以外での議題はあるのか

→結婚遺産金（バングラデシュでは結婚する際、嫁側が遺産金を準備しなければならない）についての事前指導やインフラ整備（妊婦を緊急輸送する際の確認）、また子どもを学校に行かせるよう指導の他、トイレを作するためにはなど、お産だけでなく村全体の保健に関わることも含む



### 3. 考察

女性保護プロジェクトのコミュニティ見学ということで、私は村のある集団の女性をある程度全員集めてお産の情報提供を行っていると思っていたのだが、実際はお産をする家族が集まって、家族に対してお産について教えるというものであった。個人的にこれまでの伝統的なお産とは異なる方法を提供するものだから、村の人に本当に浸透しているのかということが疑問であった。しかし、私のこの考えは間違っていた。BP とは、今あるお産方法に加えより安全なお産方法を提供する、つまり伝統的なお産法を否定するものではないため、現地の人はなるほど、それは知らなかったといったように新たな命を迎えるのであった。

さらに、我々は CSG の話し合いにも立ち会わせてもらった。そこでは、村のマップを作成し、どこに妊産婦がいて、今何ヶ月で・・・という詳細情報を CGS メンバーが共有していた。その方法は非常に原始的であったが、CSG 一人一人の力によって村の Birth Planning を進めているのだと感じた。

村に足を踏み入れ、自分の目でその活動を見学させて頂いたが、村民個々人が村をより良くしようとしているのがひしひしと感じられた。今までは知識がなかっただけで、JICA の協力がきっかけとなり、少しずつコミュニティとしての活動が機能し始めているのではないかと思う。人口が多だけに政府が全て介入することが難しく、NGO の力は必須であろうと思われる。ボトムアップ教育がうまく機能しているようだった。

### 4. 備考/コメント

TBA(Traditional Birth Attendant)=伝統的産婆

(文責：乙村瞳)

## Community Clinic

- ・ 訪問日時：2013 年 9 月 4 日（水）11：30～12：00
- ・ 訪問場所：Chandanpur Village／Chandanbari Union／Monohardi Upazila
- ・ 面談者：Joblimuddn（27）（ヘルスワーカー）  
Osmangani（50）（Union(行政村)のメンバー）  
Giasuddin（80）（Community(行政村の下に作られる地域)の議長）  
Srinsultoma（40）（妊婦検診担当）

### 1. 概要

ここは、ヘルスワーカーが週 6 日勤務で常駐しているクリニックである。家族計画担当者と、保健医療（ヘルスサービス）担当者は週 2 日程度で勤務しているとのことだった。

コンクリート造りの小さな建物に、6 畳もないほどの狭い部屋があり、そこがヘルスワーカーによる診察室となっていた。待合室といったスペースは特になく、外にも診察待ちの人が並んでいた。診察室には、いくつかの問題点(トラブル)が書かれた木の絵のポスター（葉の部分に問題点が書かれ木の形にまとめられている。※写真 1 左側参照）と、その解決法が書かれた木の絵のポスター（問題の木の葉と同様に、解決法が葉の部分に書かれている。※写真 1 左側参照）が貼ってあった。その他、地域にある資源についても木のイラストの中に書かれ、わかりやすくまとめられていた。ここは、地域の人が困ったことを相談できる診療所のような様子であった。また、ここでは妊婦健診も月 1 回行われているようで、登録されている妊婦にはお知らせがいくようである。妊婦健診では、腹囲測定、心音確認、血圧、足のむくみ、逆子かどうかなどのチェックなどを行っている。このような地域のクリニック（Community Clinic）を、政府は各地域に建てようとしているそうである。

なお、このクリニックは 1998 年に建てられた。最初は土地のみだったが、Union(行政村)の村長や地域の議長の支援もあって予算が支出され、塀やドアを作ったりして徐々に現在の形になってきたそうである。現在の要望として、雨漏りの修理、塀の完成が挙げられた。また、水道の設置や銀行口座の開設、トイレ改善も望んでいるとのことだった。また、現在医者には郡以上の病院にしかいないため、少なくとも週に 1 回は医者が来てほしいという要望も聞かれた。

クリニックの運営については、コミュニティグループ（CG）がサポートしているそうである。CG の下位組織にコミュニティサポートグループ（CSG）が 3 つほどある。1 つの CSG には 400 件ほどの家庭が含まれるとのことだった。

### 2. 質疑応答

Q. どういう症状や問題で来る人が多いのでしょうか。

A. 子どもの病気。例えば、お腹壊した、熱、風邪、など。

### 3. 考察・コメント

Community Clinic は子どもの体調が悪い場合などに、近くにある頼れる診療所という印象だった。クリニックの運営を支える地域の議長や行政村のメンバーからは、この病院を住民のためにもっとよくしたいという意欲を感じた。制度上、県、郡、地域というように医療施設にも階層があるが、ここは最も地域の住民に近く、地域に根付いた存在となっており、小さな場所ながらも大きな役割を担っていることが感じられた。



(写真 1 左：問題点(トラブル)が書かれた木の絵のポスター 右：解決法が書かれた木の絵のポスター)

(文責：長屋裕子)

## Narsingdi District Hospital 県病院

・訪問日時：2013 年 9 月 4 日（水）12：20～13：15

・面談者：副院長および各部屋の統括者（妊婦健診担当者、臨床検査技師、看護婦長、他）

### 1. 概要

コンクリート製の大きな総合病院。各部屋を紹介していただいた。

#### ・産前健診スペース

以前は外来患者が大勢いる中でやっていたが、現地のスタッフのアイディアにより、プライバシーが守られるように廊下の端についたてを設置し、健診スペースを確保したそうである。産前健診は午前中に行われている。新規と継続、合計十数人が来院していた。

登録台帳に状態や様子が記載されている。また、妊婦カード（位置づけとしては日本の母子手帳みたいなもの）がある。内容はチェックリストのようなもので、検診の度に持ってきてもらうことになっている。産前健診は無料である。

#### ・薬局

5S を念頭に置いた改善運動で、Work improvement team (WIT) が効率化を図った工夫をし、薬を整理整頓した。例えばアルファベット順に薬を並べたり、事前に 1 回分に分けておくなど。花を置いたり清潔感にも気を配っているようだった。処方記録も保管してある。取り組みとしては、病院同士で競わせて賞を与えるなど、持続できるシステムになっている。実際にスタッフは継続して努力していることが伝わってきた。

#### ・薬品倉庫

冷蔵保存、使用期限の厳守もきちんと管理されていた。輸血用の血液も保管されているが、保管庫が小さすぎるので大きいものがほしいと言っていた。機械にはカバーをかけるようにしている。

#### ・ナースルーム

お産の準備室～分娩室を見せていただいた。通常出産の場合は 2 日入院、帝王切開の場合は 5 日入院、お産に際して複合症が発生した場合は 2 週間入院できる。これは国際基準にも合っているそう。

#### ・男性病棟（内科・外科で分かれている）

大部屋にベットが並べられている。家族が付き添う（ほとんど女性であった）ことになっており、身の回りの世話は家族が行う。病院食もあるが、多くは持ち込んでいるようだ。

- ・手術室

3つの部屋あり、産婦人科では帝王切開が行われる。

- ・物品管理室

倉庫の物品に関して **stock keeper** が管理していた。**KAIZEN** 運動の開始者であり、台帳がわかりやすくきれいに種類ごとに（外科、内科、リネン、道具、様式、化学薬品など）配置されていた。台帳は1冊1冊順番にも配慮していた。

## 2. 考察・コメント

整理や工夫に関する取り組みが大きな改善点のようだった。一時的ではなく継続して努力していることが伝わってきた。日本に比べれば清潔度が高いとは言えないが、小さなアイデアや工夫が光る病院であった。

（文責：長屋裕子）

## JICAバングラデシュ事務所

・訪問日時：2013年9月5日（木）11：00～

・面談者：JICAバングラデシュ事務所 富田洋行次長

### 1. 概要

JICAのバングラデシュにおける開発事業についての講義をJICAバングラデシュ事務所富田次長にして頂いた。内容は以下である。

1. バングラデシュの基本概要と政治・経済情勢
2. バングラデシュの開発課題・国家開発計画
3. バングラデシュにおける日本政府とJICAの支援

バングラデシュ最大の開発課題として貧困問題があげられる。経済成長をし続けているものの、国の経済は縫製産業と海外労働者からの送金に依存しているという状況である。またその他にも電力・エネルギー問題や教育・保健問題など様々な分野において開発課題が存在している。これらの課題に対し、日本政府と日本の国際協力機関であるJICAは1993年から有償・無償に関わらず様々な支援を行ってきたという実績がある。特に近年では円借款での協力が増加しており2012年には1664億円にのぼる支援を行ったそうである。

最後にJICAとは何か？必要なのか？という問いかけのもと、日本がバングラデシュに対して援助をする意義について富田次長自らのお考えも話してくださり、日本の国際協力について考えるよいきっかけともなった。

### 2. 質疑応答

・ベンガル人が国の民族構成における大多数を占めているが民族問題はあるのか

→民族問題はゼロではない。チッタゴン地区には少数民族が暮らしており小規模の争いは発生している。

・国の資源として天然ガスがあるそうだが、その開発やそれに伴う海外企業の参入などはないのか？

→国が独占している状態である。利権の巣窟となっており資源の活用はできていない

### 3. 考察

富田次長がおっしゃっていた、JICAはバングラデシュへの唯一の「とっかかり」であり日本経済が縮小していくなかで日本を外に出すツールだ、自分は日本のために仕事をしているという言葉が非常に印象的であった。莫大な資金を投入し他国を援助することが

本当に必要なかどうかは答えのない議論であるだろう。しかし、実際に J I C A のような日本を代表して国際協力に携わっている方の活動を目にし、様々な課題は残しつつも確かな成果が得られていることを知ったことでこうした活動が日本のためでもあり、バングラデシュのためでもあるということを実感できたように思う。講義の中にもあったようにバングラデシュは貧困を始めとする数々の問題を抱える国である。人々が携帯を当たり前のように手にしている一方でインフラ整備や産業発展は進まず、そのアンバランスさが途上国としてのバングラデシュを如実に表しているように感じた。人材や資源に開発も進んでいない。しかし、それは言い換えれば開発の余地が多く残されているということである。事実、多くの開発援助によって変化が生まれ始めており、数年後もしくは数十年後に再びこの国を訪れた際にどれほど変わっているのかを見るのが非常に楽しみであると感じた。

(文責：高木優希)

## Karupalli (カルポリ)

・訪問日時：2013年9月5日（木）

・面談者氏名：斎藤哲也/SV(JICA)、小桜瑞希/JOCV(JICA)、金子結希/JOCV(JICA)

### 1. 概要

1989年にBRDB（農村開発局）とJICAの協力により、地方農村部で生活する手工芸品等の販売拠点として設立した。（カリポリの店がある場所は、BRDBの行政機関のビルである。）

農村に住む人々の生活の質を向上させることを目的としている。国のビジョンとして掲げられている「貧困対策」のために、農村地域の人々の収入源をつくるため、女性たちの仕事を創出している。農村部・都市部両方で作られた製品をカルポリで販売している。

BRDBの生産センターが、以前は南部を中心に多くあったが、今では北部にも増やしており、質のよい製品をダッカに送っている。

売り上げは開店時から右肩上がりであり、年間でも一番売り上げが伸びる時期がラマダン期である。

今後、進めていきたいプランとしては、三点ほどあるという。一点目に、輸出を視野に入れており、ライセンスも取得済みであるため、eコマースを利用した販売も考えている。そのためにNGOとのつながりを考えていきたい。二点目として、カリポリの店が日本人観光客らのコミュニケーションの場、観光などの情報発信の場となることも目指している。また三点目に、店を全面改装することで、外から見たときの店の全景を変え、店内を明るく広くし商品の量を増やすことで売り上げの向上も狙っているが、そのための予算の問題がある。

今後の課題として、品質の向上と商品開発がある。商品の開発については、新しいデザインを考案するワークショップが昨年から立ち上げられている。また、ラマダン期は年間の四割強ほど売れるため、新商品を増やすなど特に力を入れている。

バングラデシュやネパール、インドを中心に南アジアの地域にて現地のNGOと協力しながら支援活動を行っている日本のNGOであるシャプラニールとの活動で、過去にブックカバーなどの手工芸品を販売したこともあるが、品質の問題が生じたため、改善するため中断した。

### 2. 質疑応答

・客の層について

ダッカに位置するこのカリポリの店周辺の市場自体が中流クラスの人々がよく来る場所である。また周辺は行政機関があるためオフィス街でもある。

・品物の価格について

価格は高くも安くもない。（貧困層をターゲット BOP とは少し違うため）



- ・これから挑戦してみたいことについて

空港の免税店への進出。日本でいう観光省、観光局や JICA の観光隊員もあるため、そういった色々なつながりを活用することで目指していく。

- ・現在考案中の新しいデザイン、新しくデザインを考案することについて

日本とバングラデシュの伝統的なデザインをコラボレーションさせた商品などを現在考案中。

### 3. 考察

農村の人々の生活の質の向上に目的をおき、女性たちの手工芸品の生産の仕事を創出し、販売することで利益を出す。また、販売する際のレジの役割も現地の女性が担当している。そのように、手工芸品の生産過程や販売過程において、現地の女性の力を借りていることはバングラデシュの成長にもつながっている。

e コマースを利用したり空港の免税店などといった販売する拠点を増やすことや新商品の考案、店の全面改装をするなど、今後の売り上げの伸長のための努力があらゆる面で見られた。

### 4. 備考/コメント

カルポリにいらっしゃった日本人三名の方々の仕事内容について

- ・手工芸隊員（小桜さん）：商品のクオリティチェック、新商品の考案
- ・接客トレーナー（金子さん）：接客、在庫管理トレーナー
- ・経営管理（斉藤さん）：経理状況の管理（バーコードで管理することで、売れ行きを分析したり生産計画を立てる）

経営管理の方は短期、手工芸隊員・接客トレーナーの方は長期で活動されている。

（文責：須崎情恵）

## 1-5 写真



BRAC が運営  
する小学校  
にて生徒さ  
んたちと



BRAC が運営  
する縫製  
工場の見学



女性向け  
人権教育  
の見学  
裸足の法律  
家と呼ばれ  
る女性





JICA 初等  
教育専門家  
橋本さんより  
お話を伺う



JICA 母性保  
護プロジェ  
クト  
コミュニテ  
ィサポート  
グループの  
見学



JICA バング  
ラデシュ事  
務所のみな  
さんと

## Ⅱ． 学生報告

### 2.ベトナムスタディツアー



## ベトナム社会主義共和国基礎情報

政体	社会主義共和国
面積	32 万 9,241 平方キロメートル
人口	約 8,970 万人（2012 年時点、国連人口計画推計）
首都	ハノイ
民族	キン族（越人）約 86%、他に 53 の少数民族
言語	ベトナム語
宗教	仏教、カトリック、カオダイ教他
主要産業	農林水産業、鉱業、軽工業
GDP（2012 年、IMF） 一人当たり GDP	約 1,377 億米ドル 1,523 米ドル
経済成長率	4.9% （2013 年上半期）
物価上昇率（2012 年）	9.2%

### 略史

年月	略史
紀元前 207 年	南越国の成立
1884 年	ベトナムがフランスの保護国となる
1930 年 2 月	ベトナム共産党結成
1940 年 9 月	日本軍の北部仏印進駐（1941 年南部仏印進駐）
1945 年 9 月 2 日	ベトナム共産党ホーチミン主席、「ベトナム民主共和国」独立宣言
1946 年 12 月	インドシナ戦争
1954 年 7 月	ジュネーブ休戦協定、17 度線を暫定軍事境界線として南北分離
1965 年 2 月	アメリカ軍による北爆開始
1973 年 1 月	パリ和平協定、アメリカ軍の撤退
1976 年 7 月	南北統一、国名をベトナム社会主義共和国に改称
1979 年 2 月	中越戦争
1986 年	第 6 回党大会においてドイモイ（刷新）政策が打ち出される
1991 年 10 月	カンボジア和平パリ協定
1995 年 7 月	アメリカとの国交正常化、ASEAN 正式加盟
1998 年 11 月	APEC 正式参加
2007 年 1 月	WTO 正式参加
2007 年 10 月	国連安保理非常任理事国（2008 年～2009 年）に初選出

※参考 URL:外務省ホームページ <http://www.mofa.go.jp/mofaj/area/vietnam/data.html>  
（2013 年 12 月 23 日にアクセス）

## 2.ベトナムスタディツアー

### 2-1 現地調査日程

9月1日(日)	成田発 JL759 ホーチミン着
9月2日(月)	War Remnant Museum 見学 Reunification Palace 見学 講義1: Dr.Tuan (ベトナムの医療に関するブリーフィング)
9月3日(火)	GpA: Orphanage in Linh Xuan 訪問・交流 GpB: General Hospital in District2 訪問・見学
9月4日(水)	GpB: Orphanage in Linh Xuan 訪問・交流 GpA: General Hospital in District2 訪問・見学
9月5日(木)	午前: GpA,B Orphanage in Linh Xuan 訪問 午後: GpA,B General Hospital in District2 訪問
9月6日(金)	午前: Nursery School in District5 訪問・見学 午後: Green Bamboo Warm Shelter 訪問・交流 ホーチミン医科大学 訪問 ホーチミン発 JL750
9月7日(土)	成田着

### 2-2 参加者名簿

氏名	学年	学科・専攻
君島 英恵	1	文教育学部人文科学科
岡南 愛梨	1	生活科学部人間生活学科
新井 佑理	2	文教育学部言語文化学科グローバル文化学環
齋藤 美咲	2	文教育学部人間社会科学科グローバル文化学環
酒井 佑果	2	文教育学部言語文化学科グローバル文化学環
王 玥	2	文教育学部言語文化学科グローバル文化学環
金子 はるひ	2	生活科学部人間環境科学科
鈴木 裕香	3	理学部生物学科
野崎 可織	4	文教育学部人文科学科グローバル文化学環
榊原 洋一	教授	大学院人間文化創成科学研究科
駒田 千晶	AA	グローバル協力センター
村松 志野	AA	榊原研究室

## 2-3 調査報告書

### 現状と格差から見えるベトナムの姿

君島英恵 文教育学部人文科学科 1 年

#### 1. 調査のテーマ

発展途上国と位置づけられているが、近年経済成長を続けるベトナムの現状を、インフラや衛生状態、都市の景観や教育から考察する。また、その中で、孤児やストリートチルドレンといった子どもたちが少なからず存在し、その原因や教育格差を追求したい。私は発展途上国へ行く事が初めてであったため、発展途上国としてのイメージが私の中にあったが、従来のイメージを払拭し、人々の生活のリアルな姿、日々や社会の中で抱える問題、決して恵まれているわけではない環境で生きる子どもたちの姿を、改めて見つめなおしたいと考える。

#### 2. 調査設問

ベトナムの中心地と郊外の比較。子どもの教育について。幼稚園と孤児院での子どもたちの比較。孤児やストリートチルドレンとなってしまう理由など、実際にベトナムを訪れ、景色や人々の様子を観察し、インタビューで回答を得る。

#### 3. 調査結果

##### ベトナムの中心地と郊外の比較

一週間ホーチミン市に滞在したが、中心部はとても都会的で、観光客も多い。高層ビルも立ち並び、道路も整備されていた。バイクで移動する人がとても多く、バイクのナンバーが不足しているという問題もある。戦争証跡博物館や銀行には発展途上国の面影が見られないほどであり、高級ブティックのお店や外国人向けのショッピングモールは日本の景観と変わらないものであると感じた。近年では、観光でも人気のある国であり、危険な国ではないが、スリやタクシーのぼったくりは多い。バスは身動きが取れないほど込み合っており、時刻表も降車ボタンもなかった。ショッピングセンターでは、荷物





をロッカーに預け、貴重品のみにてなければ買い物ができなかったし、警備員の姿も多く見かけた。一方郊外や都市部の裏路地に入ると、中心地との差が建物や生活に見られ、ゴミを道路付近にそのまま捨ててしまうため、衛生状態も中心地に比べ悪い。最終日に私達が訪問したストリートチルドレンのshelterも私達が滞在したホテルから歩いていけるほどの距離にあり、ホーチミン市の中心地に位置づけられる場所にあったが、街並みに経済成長を進めるベトナムの都市の姿と、発展途上国としてのベトナムの都市の姿が見えたように感じた。

### ベトナムの子どもたち

今回のスタディツアーで、『孤児院』『幼稚園』『shelter』の3ヶ所で、ベトナムの子どもたちの様子を観察することができた。3ヶ所での子どもたちの様子と背景を比較したい。



私が3日目、4日目に訪問した『Orphanage in Linh Xuan』は、HIVに感染した子どもたちを専門に集めた孤児院である。国からの援助を貰っているためか、外観は立派な建物であり、教育もきちんに行われていた。先生の質は良いらしく、授業では英語、パソコン、IT、ヒップホップも行っているという。薬局もあり、医師が薬と栄養の管理を行っており、6歳からHIVの教育

も行っている。小学生以下の子どもたちと接する機会があったが、日本の子どもたちに比べ、全体的に細い子どもたちが多く、ベトナムの病院や幼稚園での子どもたちより、とても人懐っこかった。孤児院の子どもたちの主な感染理由が母子感染であり、孤児になってしまうのは、経済的理由と偏見のためという理由が多いと考えられる。一度孤児院に預けられると、家族の面会はほとんどないが、ボランティアの人々が多く訪れている。孤児院の子どもたちは、独占欲が強いように感じた。初めは譲り合って使っていた紙やペンを、時間がたつにつれ譲らなくなる子どもの姿が見えた。普段の生活で



は、道具や食事、衣服はすべて平等であるため、自分だけのもの、自分だけの特別なものが欲しいと感じているのではと思った。

最終日に訪問した『Hoa Mi2 Kindergarten』では、建物の豪華さ、カラフルさと遊具の充実に驚いた。孤児院と比べると、子どもたちはふくよかであ



り、ドレス風のワンピースを着ている女の子も見え、経済的な格差を感じた。園内ではおもちゃも充実しており、手作りのおもちゃや、図書館には本も充実しており、子どもたちが十分に遊べる環境であると言える。日本でもなかなか見られない程立派な幼稚園であったが、ベトナムでは一般的なものであるという。しかし、この幼稚園での障害者の受け入れは、自閉症程度なら大丈夫であるが、日常生活に支障の出る程の障害の受け入れは行っていない。ベトナムでは、障害者の受け入れはまだ一般的ではないらしい。

『Green Bamboo Warm Shelter』というストリートチルドレンの保護施設は、NGO 団体 Ho Chi Minh City Child Welfare Foundation のコミュニティプロジェクト

で、ストリートチルドレンの男の子の支援事業を行っている。国から資金をもらっていないため、レストランを経営したり、寄付を募ったりしなければならない。ここに住む子どもたちは、学校に行くことも可能であり、世界各国から多くのボランティアの人々が来るため、様々な言語を学ぶことができるという。子どもたちがここへ来る背景として、スタッフやお坊さんに保護される場合が多い。ベトナムでは、家庭の経済的理由や共働きのため、また自ら家族を捨てストリートチルドレンとなってしまうという背景がある。DVも多いと聞いた。



#### 4. 考察

今回ベトナムを訪問して、ベトナムの『発展』している姿と『発展途上』の姿が見えたように感じた。教育、医療制度やインフラ整備の面で発展が進んでいる。しかし、格差や衛生状態に関してはまだまだ課題が多いように感じた。都市部では高層ビルやマンションが建ち、タクシーから高級住宅地が並ぶ様子も見ることができた。しかし、郊外の川沿いには廃屋のような家が並んでいた（そこに人が住んでいるかは分からない）し、孤児院の近くのハンモックカフェのトイレの衛生状態はとても悪かった。District hospital では、トイレの衛生状態は、日本人の感覚からでは良いと言いがたく、入院場所で患者同士の境（カーテンのようなもの）がなく、個人のプライバシー保護という考えはないようであった。教育に関しては、家族のいる子どもと孤児やストリートチルドレンの格差はあまり感じな

かった。英語教育や IT の授業があることで、ベトナムの教育の発展が見えた。まだベトナムでは英語は一般的なものではなく、英語を話せる人は少ないが、孤児院や shelter では、多くのボランティアの人から語学を学ぶことが可能であるし、教育水準は、一般的な子どもとあまり変わらないように感じた。むしろ、HIV の患者であること、ストリートチルドレンであったこと、孤児であったことの偏見が彼らの将来の壁になってしまうのではないかと考える。しかし、その偏見や格差を超えるだけの力を持っているように感じたし、ベトナムの将来を担っていく存在である。

急速に発展し、未来志向型の考えに固まると、社会的弱者へ目が届きにくい。戦争を経験し、発展へ向かうベトナムの『発展』と『発展途上』の現状をきちんと把握していく必要がある。孤児やストリートチルドレンといった社会的弱者のケアや衛生管理は、目を向けるべき課題であり、ハンディキャップのある人々との共生も必要とされる課題である。

## 5.調査に参加した感想

以前より発展途上国で生きる子どもたちの姿に関心があり、今回のスタディツアーはとても良い機会であった。ベトナムの孤児院や shelter を訪問した際、施設で生きる子どもたちの笑顔に安心すると共に、厳しい現実や問題が見えた。HIV に感染した子どもたちは、健常者の子どもたちと変わらず元気であるが、彼らの手足はとても細く、病気が進行している様子が見えると聞いた。Shelter の運営も資金繰りから人材の確保まで、大変な事が多い。ボランティアの厳しさを改めて感じた。しかしその厳しさに反して、どちらの場所も『もう一度行きたい』と思えるほど、人の温かさや優しさがあふれる場所であり、ボランティアやスタッフの人々の姿に、深い感銘を受けた。



私にとって初めてのフィールドワークの調査であったが、スタッフの人々や病院の患者、幼稚園の先生などにインタビューを行い、普段日本でもなかなか注意深く観察しないような、幼稚園、病院、孤児院などを観察し、日本との違いやベトナムのリアルな姿を見ることができた。その際大変であったことは、言語である。改めて自分の語学力の必要性を感じた。一方、通訳をしてくれたホーチミン医科薬科大学の学生と仲

良くなることができ、一緒に博物館を見学したり、夕食を一緒に食べたりして、とても楽しい時間を過ごすことができた。このことから、現地の人々から情報を聞き出し、自分の意見を伝えるためには、語学を習得しようとする努力の他に、諦めず相手の言葉を分かろう、自分の意思を伝えようとする意識も大切であることも改めて思った。

一緒にスタディツアーに参加した学生や、ベトナムにボランティアへ行っていた村松さん、

榑原先生や AA の駒田さんとの意見交換でも、多くの発見や意見を得ることができ、自分と異なる意見や新しい考え方を知ることができた。実際に現地へ赴き、人々の様子を見ることは、テレビなどのメディアの情報では分からない、その土地の空気や人々に触れる事ができるし、自分の質問にすぐにフィードバックが帰ってくることも魅力であると感じた。今回のスタディツアーは本当に貴重な体験であり、今度はベトナムにボランティアに行きたいと強く思っている。

## ベトナムの子どもたち

岡南愛梨 生活科学部人間生活学科 1 年

### 1. 調査のテーマ

世界中のどんな「子ども」も、みな同じように大切に扱われるべき存在である。ベトナムで訪れる施設や出会った人から子どもの生活についての情報を集める。

### 2. 調査設問

ベトナムの子どもたちのおかれている状況は日本の子どもたちとどう違うのだろうか。

### 3. 調査結果

#### 【幼稚園の子どもたち】(Hoa mi 2 幼稚園)

カロリーがしっかりと考えられた給食を毎日食べる。(歳によって給食の量は異なるが、メニューは同じ。) 孤児院で出会った子どもたちと同年齢層だとは思えないほど体格が大きい子どもが多い。

\*24 クラスあり、子どもは 1000 人以上通っている。57 人先生がいて、2 人の教頭先生、1 人の園長先生、48 人のスタッフがいる。

\*様々なおもちゃが用意されている。ありすぎではないかと感じたほどであった。お菓子の袋をリサイクルして作られたおもちゃなど、手作りのものも多くあった。廊下にもおもちゃが随時使いやすいうよう用意されていた。大きな扇子や布などもあり、子どもたちは好きなように着飾って遊ぶこともできる。

\*音楽の授業では、伝統的な衣装や音楽を使った劇をすることがある。楽器当てクイズや、歌やダンスなど、子どもが体を使って楽しく音楽に触れる機会が用意されている。

\*年に 2-3 回、動物園や美術館、プール等に遊びに行く。

\*洗顔や歯磨き等も幼稚園で学ぶ。

\*給食費は 28,000VD/日 (日本円で約 140 円)だが、military kids や貧しい家庭の子どもは、幼稚園が用意している money tank から補助が出る。

\*図書館に用意された絵本は、先生や子どもが作ったものが多数おかれている。

\*校庭に置かれた遊具たちは毎年塗り替えられ、子どもたちが遊びたいという気持ちを引き出す。幼稚園は全体的に、新しく綺麗でカラフルな雰囲気であった。子どもたちのカラフルな絵もいたところに飾られていた。

\*小さな植物を廊下で栽培しているようだった。

\*現在の課題点：毎年政府が新しい教育方針を提案してくるため、毎年新しいことを始めるのが大変。

【孤児院の子どもたち】(Linh Xuan, Thu Duc)

訪問者に対して人見知りをすることがなく積極的な子どもが多くみられた。子ども同士で物の取り合いで喧嘩する様子が時々見られた。

\*17歳までの141人の子どもに対し、スタッフは83人。

\*外部団体がボランティアで子どもたちを遊園地やプールに連れて行ってくれることがある。

\*食事や健康の管理、初等教育へ繋がる教育、社会で自立的に生きていく方法を学ぶことが大切にされている。

\*薬の服用の仕方も学ぶ。病気についての情報は年齢が上がるにつれて少しずつ伝えていく。

\*外部との交流を持つ機会として、4年生から10年生までは外の学校に通う。

\*お小遣いはもらっていない。欲しい物があった時はナースに伝える。

\*6歳からは部屋が男女で分けられる。乳児に2部屋、2歳から5歳に2部屋、6歳以上の子どもに4部屋用意されている。部屋の様子は、ベッドがたくさん並んでいて、活動をする際はそれらをはじに寄せてスペースを作っているようだった。おもちゃ等はあまり見かけなかった。部屋にテレビのある部屋もあった。

\*紙やクレヨンでも取り合いになっていた。また、訪問者のかばん等に手を伸ばして何かおもちゃは無いか探そうとしていた子どももいた。

\*現在の課題点：人手不足なこと。更にたくさんの人に施設の存在を知ってもらって社会からの支えがもっと欲しい。

【障がい(発達や知的)がある子どもたち】

直接そういった子どもたちの通う施設に行くことは出来なかったが、行く先々で質問をして情報を集めた。

\*Tuan 先生 そういった障がいを持った人たちは親たちが集まってコミュニティを作り、その中で子どもは支援を受ける。海外から情報を集めて支援し合っているが、それはコミュニティ内でのことなのでとても内に向けた支援の仕方である。医療はそのような領域にまで手を伸ばせる余裕はまだ無いだろう。

\*学生A 心理学すらまだ信用性が無いと考えられており、あまり盛んでは無い。脳に障がいのある子どもたちは、そういった子ども向けの特別支援の学校に通う。

\*学生B 障がいを抱えていても頑張れば健常児と同じ学校に入れる。でも身近にそういった人はいない。

\* 病院で診察に来ていた障がいのある子どもとその親の話

父親が一週間前に他界し、母親が仕事を探しているが高血圧なこともあってなかなか見つからない。子どもは5歳だが、幼稚園には行っていない。特別支援の学校は存在するが、高すぎて通わせられないだろう。

- \*幼稚園 障がい児は受け入れないことが多い。軽度な子なら少しいることもある。
- \*孤児院 孤児院にもダウン症の子どもが 2 人いるが、どう扱って良いのかわからない。授業を落ち着いて皆と同じように受けることは出来ないため、年齢的には学齢期だが、幼児と同じクラスに入って生活している。
- \*ストリートチルドレン向けのシェルター 年に何回か障がいのある子どももやってくることはある。しかし、すぐふらっとどこかへ行って戻ってこなくなってしまうことが多い。

#### 【ストリートチルドレンである子どもたち】(Green Bamboo Warm Shelter)

実際の子どもには数人しか会うことがなかったが、少し会った感じでは明るく元気で優しい男の子たちであった。

- \*シェルターに来る 40%の子どもは孤児である。
- \*14 歳以下の子どもは学校に通わせてあげることを目標に、15-16 歳の子どもには仕事を見つけてあげることを目標にする。
- \*年に 100 人以上の子どもがやってくる。
- \*スタッフは 5 人で、ソーシャルワーカーは 2 人。
- \*1 階でやっている資金集めのためのレストランにはコックがいるが、子どもたちも積極的に手伝いをしている。
- \*手芸糸でミサंगा作りなどをしていた。
- \*世界各国から短期でボランティアがやってくる。言語を教えてもらうことも多らしく、英語を理解する子も多い。様々な言語が話せると、より高い仕事に就くことができる。
- \*子どもたちの将来としては、40%は家族の元に戻り、30%の子には仕事を見つけてあげ、30%はこの施設に留まることになる。
- \*現在の課題点：お金が無いこと。
- \*シェルターの子どもの他にも街なかで、宝くじを売っている人や、物を求めて話しかけてくる女の子に遭遇した。

#### 4. 考察

調査結果からわかるように、ベトナムという一つの国の中でも、様々な環境で生活をしている子どもたちがいる。例えば遊びについてである。幼稚園においては、子どもの子どもらしさを引き出すようなカラフルな環境が作られていた。対して孤児院ではクレヨンや紙などでさえも取り合いになってしまうところから、満足いくほどたくさんのおもちゃが周囲に無いことがわかる。シェルターではミサंगा作りなど簡単に出来る遊びを彼ら自身で見つけ出している様子が見られた。

今回は子どもたちの実態だけではなく、周囲の人からの彼らに対する考え方についても感じられることができた。例えば、障がいのある子どもたちの様子について様々な人に聞

いたが、その人の立場等によって回答が大きく異なったが印象的であった。社会における障がいのある子どもの認知度があまり高くないことがこのことから感じ取れる。

大人でそのくらいであると、子どもたちの場合どうなのだろうか。確かに、日本よりも多様な生き方をしている子ども向けの施設が多くある分、様々な子どもがいることは日々感じているかもしれない。しかし、実際に交流するような機会は、あまり無いように感じた。孤児院から地域の学校へ通う子どもはいるが、そこに至るまでに孤児院側は社会の偏見を取り除くのに WHO にイベントを開催してもらうなどと、苦勞をしたと聞いた。日本の小中学校において、障がい児クラスはよくあることだ。幼稚園でもそういった子どもがいることはそこまで不思議なことではない。

子どもたちがみな平等な暮らしが出来るようになることが、一番の理想である。そのために今一番に出来ることは、おそらく子どもたちがお互いの存在を知って、お互いにコミュニケーションを取ることでないか。将来の国を背負う子どもたちは、まず周りに生活する人について認知し、交流を通じて様々なことを知るべきである。これはベトナムに限った話ではなく、日本においても言えることだ。日本で障がい児との交流は、幼少期にはよくあると上記したが、高校以降はかなり少なくなってしまう。同じコミュニティで生活する以上、共に生活していることの意識を高め交流することが、格差を減らしみな生活しやすくなるための一歩であるだろう。

## 5. 調査に参加した感想

日本において子どもがみな同じような教育を受けて成長し、ほとんどの子どもが似通ったバックグラウンドを持っていることが、いかに恵まれていることなのかを感じた。また、経済的な理由等様々な大人の事情が、育つ環境が変わるほどここまで子どもに影響を与えるものだということに驚いた。

## 6. 調査を経て今後行動してみたいこと

もっといろいろなところにいる子どもたちと関わってみたいと感じた。また、今回訪れることができなかった障がい児の通う学校等にも行って現状を見てみたい。



## ベトナムにおける人間関係の特徴と社会形成

新井佑理 文教育学部言語文化学科グローバル文化学環 2 年

### 1. 調査のテーマ

ベトナムがどのように発展してきているのか、今後どのような方向へと向かっていくのか、その鍵を握っているのは、先進諸国ではなく、政府の政策や研究者の報告書でもなく、ベトナムに住む人々自身だろう。現地に滞在し、一般的な暮らしや街の空気、人々から伝わってくるものを肌で感じることで、ベトナムを内面から見ていく機会が得られると考えた。国を形成する一人一人との触れ合いを通して、社会の細部から国全体を見ていくことをテーマとした。

### 2. 調査設問

ベトナムにおける人間関係の特徴に着目し、家族や地域などのグループが社会でどのような役割を果たしているかを明らかにする。日本との比較を行いながら、そのプラス面とマイナス面を考察し、人間関係から見たベトナムの地域社会の特徴と、今後のさらなる発展に必要とされる要因を探りたい。

### 3. 調査結果

#### 《病院での調査》

##### ① 族関係

家族の関係は強いと考えられる。特に、祖父母と孫、いとこ同士などの関係の強さが目立った。ほとんどの患者の傍らに付添いの家族がおり、ベッドの上で食事を共にしたり、添い寝をしたりしていた。出産直後の女性たちのいる病室にも案内していただいたのだが、ベッドに寝ているそのすぐ横には生まれたての赤ちゃんがいて、日本では見ることのできない光景に驚いた。その後インタビューに移り、約 10 人の患者やその家族にお話を聞くことができた。その内容を、主に家族関係に焦点を当てて抜粋しまとめた。

- ・付添い A さん（女性、推定 30 代）：入院中の母親の付添い。一日中いることもある。
- ・付添い B さん（女性、37 歳）：27 歳（男性）のいこの付添い。症状は頭痛と吐き気。
- ・付添い C さん（女性、57 歳）：4 か月の孫の検診の付添い。孫の母親は働いている。
- ・付添い D さん（女性、18 歳）：5 か月の姪の付添い。母である姉とバイクで来た。症状は発疹。
- ・付添い E さん（男性、推定 40 代）：明日に手術を控えている入院中の父親の付添い。他 2 人の付添いの家族、父親と共に昼食をとっている。

以上のようなインタビュー結果を得られた。病人の面倒を見るのは必ずしも両親や子供とは限らず、祖母やいとこ、おばなども積極的に関わっていることが分かった。家族のつながりは日本に比べて広範囲まで強い傾向にあるようだ。

付添い A さんの例のように、付添いの家族は一日中病院にいることも少なくないという。面会時間が決められていることの多い日本とは対照的に、ベトナムの病院の多くでは一日中付添いができるそうだ。付添い C さんは孫の面倒を見ている 57 歳の若いおばあちゃんだ。現地大学生によると、ベトナムの女性は若いうちに結婚して子供を産む傾向が強く、若くして祖父母になることが多いそうだ。若い祖父母は孫の面倒を見られるため、そうした家庭の出産後の母親は仕事を続けることができるのだという。付添い D さんの例にあるように、大半の患者はバイクで来院しているのだが、D さんと姉が二人で付添いをしているのは、バイクを運転する役割と赤ん坊を抱きながら乗る役割の二人が必要だからだろう。

見学の間、付添い E さんたちの例のように、病室で家族と共に食事をとっている患者さんが多く見られた。病院の代表者にお話を聞くと、日本のような病院食の提供は行っていないそうだ。患者たちは、院内のカフェテリアや売店のようなところで食事をとるか、家族に用意して持ってきてもらう形をとっているという。このような点から考えると、入院中の食事に関しては家族のサポートが不可欠だということは明らかだ。

## ② 者同士、家族同士

印象的だったのは、病院内での患者のプライベート空間の少なさだ。入院病棟では、廊下から病室の中がガラス越しに見えたり、ベッドとベッドを区切るようなカーテンが無かったりした。特に、大きな病室に 10 以上のベッドがずらりと並んでおり、何の仕切りもない中で入院患者とその家族が混在していた部屋では、周囲の患者の治療も見えてしまい、会話も筒抜け状態で、「個」への配慮の不足を感じた。

インタビューでは、これらについての不満が聞かれると予想したが、それを訴える人は意外にも一人もいなかった。様子を見ている限りでも、皆当たり前のように、特に周囲のことを気にすることなく休んでいるように見え、隣の患者とコミュニケーションを取ろうとしているほどであった。特に産婦人科の入院病棟では、一つの部屋に 3 人ほどの産後の女性たちとその家族がいたのだが、みんなで赤ちゃんの誕生を喜んでおり、一体となった空気を感じることができた。部外者の私たちのインタビューも快く受け入れてくれ、2 時間前に生まれたばかりの赤ちゃんを抱かせてくれるほどオープンだった。このように、患者や家族同士の関係も、日本の多くの場合のようにそっけないものではないと分かった。

## 《幼稚園での調査》

訪問した幼稚園は大規模なもので、広い園庭と大きな園舎、教室いっぱいの園児たちという風景が印象的だった。実際に音楽のクラスを見学させていただいたのだが、先行調査の通り、依然として教師主導の「音あてゲーム」や「手遊び」、「踊り」などが主なもので、園児たちが自由に楽器を使ったり思いのままに体を動かしたりといった様子はほ

とんど見られなかった。このことと関連する点だが、一人の教師が 20 人程度の園児に指示を出すという形式の活動であり、両者の関わりは少ないと感じられた。

園児の家族、地域との関わりに視点を移してみると、日本と比較して園がそれらに対して開けているという印象を持った。園児は何時に登園、帰宅してもよいそうで、訪問していた際は午前中だったにも関わらず、迎えに来た家族に連れられて何人かが帰宅していった。もう一点、家族関係で興味深かったのは、子供を保育園に通わせようとしないで自宅で面倒を見たがる家庭がある、という状況についてだ。子供と過ごす時間を大切にしていることがうかがえる。ベトナムでは短い期間であっても保育を受けなければ小学校へは進めないことになっているため、園のスタッフは園に通っていない地域の就学前の子供の家庭を回り、通園を促すこともあるそうだ。スムーズな入園を図るため、園を開放して親子が様子を見に来られるようにしたり、通常も門の出入りをある程度自由にしたりしており、地域との関わりも多いと言える。

#### 《交通》

ベトナムの交通で何より特徴的なことは、隙間なく走る大量のバイクである。二人乗りは普通で、中には家族四人乗りのバイクもあり、運転する父親と後ろに乗った母親で子供をサンドするようにして乗る光景がよく見られた。小学校の行き帰りも家族が運転するバイクが一般的なようで、夕方には校門付近に集まる迎えのバイクが数多く見られた。このように、公共交通や一人一台の自転車ではなく、一台のバイクを家族皆で乗るという特徴にも、密接な家族関係は何らかの影響を与えているのではないか。一方で、家族でのバイクの共有を当然と考えているために、公共交通の整備が未だ不十分なままなのでもある。この状況からわかるように、家族関係は交通インフラを整備していく上での大きな要因にもなると考えられる。

#### 4. 考察

ベトナムにおける人間関係の特徴として、家族の結束や周囲の人々とのつながりを大切にしていることがあげられる。訪問先の方々は私たちが快く歓迎してくれ、インタビューにもお願いしたすべての方に協力していただけたなど、親しみやすく温かい人々ばかりで、すぐにベトナムで過ごすことの心地よさを感じられた。一方で、各施設でのケアの様子を見ると、全体的に「個」を意識した気配りやサポート体制が十分ではなく、家族や個人に任せている部分が多いと感じた。特に病院に関しては、患者の身の回りの世話はほとんど家族が担っており、患者が一人で来院し入院することは困難だと言える。社会の中の病院という大きなまとまりとしての、「個」への支援体制が不足しているのではないか。

このような社会では、今回出会ったような、家族のサポートを受けることの難しい孤児やストリートチルドレンのさらなる孤立が引き起こされるのではないかと考える。彼らは、自らの力で生き、新たな家庭を築いていかなければならない。頼れる家族の少ない彼らが

社会にスムーズに戻っていくためには、社会基盤を整えて、家族だけに頼らずとも必要な支えを受けられるようにならなければいけない。人々の温かさや地域とのつながりなど、ベトナムの良さを生かしつつ、より「個」に根差した社会づくりが必要なのではないかと考える。

## 5. 調査に参加した感想

この調査を通して最も強く感じたことは、現地へ赴き、人々と出会い、空気を感じることの素晴らしさである。実際にベトナムを歩いてみると、通りのいたるところに新たな発見があり、人々の日常生活を垣間見ることもできた。そして何よりも、これから国を成長させていこう、どんどん前へ進もう、という熱気が強烈に伝わってきた。目には見えないしうまく言葉で表すこともできないが、ベトナムで感じたことすべてが私の心を満たしていった。そのインパクトに押され、事前調査で集めてきた情報が、単なる無機質で中身の薄いものとはか思えないほどだった。

また、人々との出会いが私の中で大きな原動力となった。訪問前は現実的に考えることのできていなかった孤児やストリートチルドレンに会い、触れ合うことで、彼らの存在をようやくはっきりと認識できるようになった。言葉が通じず、互いに理解し合うことまではできなかったものの、共に過ごした時間の中で心が通ったと感じられたことは大きな喜びであった。明るくて人懐っこい彼らに大きなパワーをもらえたことを感謝している。遊んでいる間は私自身も夢中になり、楽しい思い出ができた反面、別れた後は常に彼らの背負っているものを思い出した。そして、これから、たとえ狭い範囲内でも、どんな形であろうとも、すこしでも彼らの幸せをサポートしたいと強く感じた。「国際協力」と名のつくような大きなことでなくても、本物の温かい心を大切にしながら、自分にできることをやっていきたい。

## 6. 調査を経て今後行動してみたいこと

漠然と憧れや関心を抱いていた国際協力への思いがぐっと強まった。まずは多くの経験を積み、貪欲に吸収していきたい。例えば、ボランティアや他のスタディツアー等に積極的に参加し、世界で起きていることをより深く学びたい。NGOの活動にも参加できたらと考えている。今回訪問した孤児院やシェルターをもう一度訪れ、大きくなった子供たちに会うことも一つだ。そして、自分が生きていく中で、世界の人が一人でもより幸せになれるためにできることを見つけ、実行していきたい。

## ベトナムにおける公共施設と地域とのかかわり

齋藤美咲 文教育学部人間社会科学科グローバル文化学環 2 年

### 1. 調査のテーマ

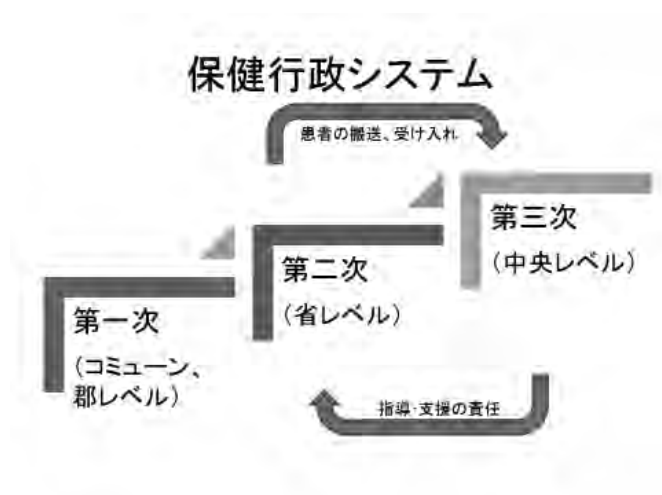
医療、福祉におけるコミュニティの役割

### 2. 調査設問

私は、人々が暮らすコミュニティ全体がどの程度人々に安心感を提供しているのかということに関心を抱いている。特に医療、福祉、教育などのサービスレベルはコミュニティの質に直結しており、人々の暮らしを支える大事な要素である。平時から有事のときまで、ひとの心身を守るためには、そのような施設と住民の間の信頼関係がないとうまく機能しないと私は考えている。現在のホーチミンにおいて、今回訪れた施設がどのように地域コミュニティや他の施設と連携し、協働しているのかを調査することで、ベトナムにおいてコミュニティがどのような役割を果たしているのかを発見することができる。よって、主に下記の視点から今回の調査結果をまとめていきたい。

- ◆病院や孤児院、その他訪問した施設と地域、その他の組織とのかかわりはどのようなものか。またそれはどの程度人々に安心感を与えているか。

(参考) ↓ベトナムにおけるリファレルシステム



### 3. 調査結果

#### 【District 9 の病院】

この病院は 2008 年に建設が終わり、その時点で 220 のベッドを所有していた。現在は常に約 90%のベッド使用率で、祝日やお祭りがある日などはほとんど満員だという。これらの数値や、人でごった返している受付と待合席付近から、需要の高さをうかがえる。ベトナムでは、レベルが高い病院ほどベッドが足りていない現状がある。その理由のひ

とつは、リファレルシステムがうまくいっていない点にある。人々は、地域の **health center** が信用できないため、最初の診察の段階で多少値段が高くとも高次レベルの病院に行くことが多い。この傾向は富裕層になればなるほど高まる。この現状を打開するため、政策としてはリファレルシステムを整備したいところだが、ホーチミン医科薬科大学の Tuan 先生によれば、病院側は患者数が多くなればその分収入も増えるため、患者数を減らす努力などあえてしたいと思わないという。

他の参加学生が、小児科にかかっているお母さんへのインタビューから得た情報によると、家の近所の **health center** で診てもらっても一向に治らなかった病気が、この病院で診断・治療をしてもらったところすぐに治ったため、こちらを信用している。なので、家から非常に遠い病院であっても頑張って通っているということだった。地域の **health center** は軽度の病気の患者向けで、機械や設備が十分ではないため、より重度の病気を患ったひとにとっては、そちらで行われる治療は意味を為さないことがままあるのだろう。リファレルシステムによれば、病気のレベルによっては **health center** から高次の病院へ紹介がいくということになっているので、この場合はシステムがうまく機能していなかったといえる。このように、各病院が自院の利益ばかりを考えるのではなく、適切な治療を国民に提供するために、リファレルシステムをどのように改善すべきか、あるいは新制度や仕組みをつくるべきなのか、今後検討する余地がある。

さて、施設を見学していたところ、ホーチミン医科薬科大学や他の病院からのサポートが多いことがわかった。事務局の方から伺ったところ、NGO からのサポートはなく、地域コミュニティや他のチャリティ活動からの支援で成り立っているとのことだった。また医師の質を上げるため、ふたつのシステムがあるという。①大きい病院から先生を呼ぶ方法と、②医師をより大きい病院に送り出し、訓練をしてからまた戻ってくる方法だ。一方でこの病院も、地方の病院をサポートしているとおっしゃっていた。このようなことから、病院同士のサポート関係は充実し、機能しているようである。

チャリティに関していえば、最近メディアに取り上げられることが多くなり、それに伴いチャリティや寄付も増えたとのことだった。

### 【孤児院】

この孤児院は、預かっている子どもたちを社会化する手助けをするということを念頭に活動しているという。たとえ HIV に感染していても、社会に適応すれば健常者の中で生きられるということだった。具体的には小学校 4 年生から地域の学校に通わせる、ひととのコミュニケーションの取り方を教える、などの活動である。

いまでこそ子どもたちは、地域の学校に通うこともできるようになったが、昔は小学校の他の保護者が HIV 感染者をおそれていたため、彼らが社会に出ることは難しかったという。そのような状況を打開するために、当施設が地域コミュニティに対して、HIV についての正しい知識を広げるための機会を設けるよう働きかけたという。その後、人々は徐々に受け入れはじめ、HIV 感染者への差別が減少し、理解が深まったとのことだ。

そして子どもたちは、他の子どもたちと一緒に外で遊んだり水泳をしたり、また旅行に行くこともできるようになったそうだ。

さて、この施設は、市から社会的補助や医療補助を受けており、海外の機関からもサポートがあるとのことだった。また、週末には、何らかの組織や団体、あるいは学生が施設を訪れ、子どもたちと遊ぶこともあるという。確かに、施設には様々な写真が飾られており、その中には日本の大学生グループと思われる団体が子どもたちと触れ合っている写真もあった。しかしながら館長さんがおっしゃるには、実際に必要な費用を調達するには非常に苦勞しているようだった。

#### 【幼稚園】

この幼稚園は 2013 年 9 月現在、3～5 歳の 1279 人の子どもを預かっており、3 歳は 1 クラス 40 人、4 歳は 58 人、5 歳は 62 人と徐々に生徒数が増えるという。なぜかという、この幼稚園に何ヶ月か通うと地域の公立小学校(無償教育)に上がるための証明書が発行されるため、途中で入園する子どもたちが多いからだそうだ。その情報を伝えるためにも先生が幼稚園に通っていない子どものいる地域の家庭を訪問し、入園するよう促すのだという。

地域の小学生や中学生と遊ぶプログラムなどはあるのかと伺ったところ、特別なイベントは設けていないが、地域の人々は受付をすれば幼稚園が始まる前と放課後にこの施設に入れるという。そのような時間帯に地域の子どもたちが来たときには、年上の子が年下の子の面倒を見る形で遊んでいるとおっしゃっていた。

また、園長さんは、保護者が施設や先生をサポートしてくれるのだと、その関係性に満足しているようだった。この施設でもチャリティやボランティアなどが大きなサポートになっているという。

#### 【ストリートチルドレンのシェルター】

このシェルターは、いわゆるストリートチルドレンが最低限の生活(食事、睡眠など)をできるような駆け込み所である。政府からは助成金をもらっていないが、地域との関係性でいえば、この施設を訪れる子どもたちのなかに、僧侶が街中を回っているときに見つけられ届けられる子がいるという。仏教徒が 8 割であるベトナムならではの状況といえ、不明瞭ではあるが、少なくとも孤立している子どもを見つけ、安全な場所へ届ける見回り役の存在は大きい。

#### 4. 考察

今回訪れた病院は総合的に見て非常に質がよく、インタビューからも読み取れるように、来院患者は安心して見えた。それは、NGO などのサポートがなくとも、コミュニティやその他のチャリティによるサポートの功績も大きく貢献しているように思う。また、そのようなサポートにはメディアの力も大きく関わっていることから、やはり社会全

体で社会福祉現場を見守る努力は重要である。一方で、ベトナム全体の医療を考えると、リファレルシステムの機能については今後も懸念されることだろう。

孤児院については先ほども述べたように、HIV についての正しい知識を住民に伝えたことにより、子どもたちが地域の学校に行けるようになったことが、コミュニティとの関係の重要性を大きく表しているだろう。つまり、施設がコミュニティに対して何かしら働きかけ、コミュニティ全体で状況を改善するよう動けば、人々の誤った認識を払拭し、状況を大きく変えることができる可能性があるということだ。またこの働きかけは、孤児院の子どもたちやスタッフだけでなく、地域の住民にも安心感を与えるきっかけになったことだろう。このような努力は決して簡単ではないものの、地域コミュニティ全体で解決する姿勢を保つことができれば、地域の社会福祉や住民の生活が改善することは間違いないだろう。

## 5. 調査に参加した感想

私の調査テーマは抽象的ではあったものの、訪問した施設と地域との関わりや、その他の組織との協力関係などを発見することができ、非常に有意義であった。特に、孤児院の例ではコミュニティの果たす大きな役割を知ることができ、私自身勇気をもらったと共に、社会全体で問題解決しようとする努力の重要性を再認識した。いずれの施設も親切な方ばかりで、またサポートやチャリティなども多く行われているということがわかり、今後ベトナムがどのように変化していくのか楽しみである。

## 6. 調査を経て今後行動したいこと

今回の調査を経て、ベトナムは大きく発展を遂げているものの、いまだに外国政府や NGO からの支援を必要としていることがわかった。そこで私は、ベトナムの抱える社会問題やサポート状況を周りに知らせることから始めたい。また当初は、社会福祉施設とコミュニティの関係を、ベトナムと東京で比較する計画だったが、今回の調査を経た考察でそこまで至らなかったのが反省点として挙げられる。したがって、今回の調査結果を自分の身近な地域と比較し、見つめ直し、その知見を日本の地域にも生かしたいと考えている。

## 7. 参考文献

今井昭夫、岩井美佐紀 編著（2012 年）『現代ベトナムを知るための 60 章(第 2 版)』明石書店

三橋 広夫（2005 年）『これならわかるベトナムの歴史』大月書店

日経メディカル オンライン

<http://medical.nikkeibp.co.jp/leaf/all/special/pandemic/topics/201203/524051.html>

対ベトナム国 事業展開計画（2011 年）

<http://www.mofa.go.jp/mofaj/gaiko/oda/seisaku/jigyoku/pdfs/viet.pdf>



## ベトナムの幼児教育

酒井佑果 文教育学部言語文化学科グローバル文化学環 2 年

### 1. 調査のテーマ

ベトナムにおける幼児教育施設について学ぶ。

### 2. 調査設問

ベトナムの幼児教育に関する事前学習では、ベトナムでは教育の社会化が進んでおり、社会全体で子育てする、という傾向があるようだが、「教育の社会化」を進めていったときに、「教育意識が高く、経済的な負担能力も高い地域」と「そうでない地域」との間に教育格差が拡大していく可能性があり、そのような格差は都市部と農村部で顕著であると学んだ。そこで、大都市であるホーチミン市の幼稚園では、どのような教育が実際に行われているのかに着目し、見学して調査した。

### 3. 調査結果

私たちが訪問した幼稚園はかなり大規模なものだった。24 個の教室があり、3 歳から 5 歳の子どもが在籍していて、年齢毎に 8 クラスあり（1 クラス約 40 名）、先生は 57 名が働いている。図書室、プール、給食のための調理室、洗濯室、教室等の部屋が備わっている。幼稚園に払う費用は月に日本円で約 8000 円。昼ご飯とおやつが給食として出される。以上のことから、設備に関して本当に恵まれている幼稚園のようである。

音楽の授業を見学させてもらうことができたが、一人の子どもに目隠しをさせて、それ以外の子ども達が楽器を鳴らし、何の楽器の音かを言い当てるゲームを行っていた。また、歌と踊りのお遊戯を見せてもらった。訪問時間も半日と短く、また、私たち見学者向けの授業だったと思われるため、なかなか普段の日常的な幼稚園の様子を見られたとは感じられなかった。

事前学習では、ホーチミン市の幼児教育施設では、資金不足のため園庭が確保されておらず、保育活動の中心は室内である、また、付近は交通量が多く、園児が遊ぶ場所が無いため戸外活動が不足していると学んでいたが、実際訪問して感じたことは、園庭は遊具がぎっしりと置かれていたが、確かに子どもの人数に対して十分な広さとは思えなかった。子ども達は年齢によって、園庭で遊べる曜日が定められているそう。しかし、他の園の設備が非常に整っていることから、広さが足りないのは資金不足が原因というより、都市部に特有の敷地が狭いということが原因なのではないかと思った。また、戸外活動の不足に関しては、確かに周囲は交通量が多く、幼稚園の門から一歩外に出れば、和やかな幼稚園の雰囲気とは別世界の、バイクが多く通る騒がしい大通りに面していて、園児が付近の戸外で遊ぶには危険すぎると感じた。だが遠足として、動物園などに出掛けることはあるそう。

#### 4. 考察

この地域では、子どもが5歳の時点で幼稚園に入園していないと、地元の公立小学校に入学する権利が得られないようだ。入学権利が得られなかった子どもは、私立の小学校や遠方の小学校へ通わざるをえなくなる。よって、5歳になる子どもがいる家庭を幼稚園の職員が訪問し、入園するよう勧めてまわるらしい。このことから、幼児教育は各家庭で私的に行われるのではなく、幼稚園という社会的な場で行われるべきだという、ベトナムの「教育の社会化」を感じた。

また、「教育の社会化」によって生じるという教育格差に関してだが、農村部の幼稚園は訪問していないので、都市部の幼稚園と比較はできなかったが、私たちが訪問した幼稚園は、調査設問の項目で言及した、「教育意識が高く、経済的な負担能力も高い地域」の幼稚園の代表的な例なのではないかと感じた。幼稚園の設備が非常に整っていること、ベトナムの家庭における平均月収は3万円であるといわれているにもかかわらず、幼稚園に月に支払う額は8000円であり、また、子どもたちの服装や髪型も非常に気を遣われており、親も富裕層が多いと予想されることから、そのように感じた。

ベトナム政府も、格差緩和に向けて対策を講じようとしており、例えば、2002年に発表された幼児教育政策においては、「社会経済的に困難を抱えた地域や山岳地域・離島などに高い優先順位をおき、それらの地域では保育料は徴収しない」、「公立の幼児教育施設を主に困難を抱えた地域に集中的に設置し、都市部や経済的に発展した地域においては非公立の設置や公立の非公立化を図ること」、「困難を抱えた地域では公立を基本とし、教員も政府雇用とする」など、貧困地域優遇策を採ることによって格差の是正を図ろうとしている。教育の社会化を推し進め、質の良い教育を社会全体で行っていくつもりならば、格差の解消は必須であると思った。富裕地域の教育や設備の質を下げることによる格差解消は当然不可能なので、上記のような政策を行うことが重要だと感じた。

#### 5. 調査に参加した感想

5日間、非常に充実していました。志高く、積極的なお茶大のメンバー、各施設で歓迎してくださったベトナムの人々、通訳として同行してくれて、仲良くなったベトナムのホーチミン医科薬科大学の学生など、人に恵まれたスタディツアーでした。引率者である榊原先生が、「ベトナムは来る度に発展が感じられて、活気があり、自分も元気をもらえる。」とおっしゃっていましたが、本当にその通りだと感じました。秩序ある日本とは全く違う、目まぐるしく賑やかで騒がしいベトナムにより刺激を受けました。今回ベトナムで出会った人々が、未来のより発展したベトナムでどのように活躍していくのか、再びベトナムに会いに行きたいと思いました。貴重な機会をいただきありがとうございました。

#### 6. 調査を経て今後行動してみたいこと

幼稚園や孤児院、ストリートチルドレンを保護する施設（シェルター）、病院の小児科を

訪問する等、子どもと接する機会の多いスタディツアーだったこと、また、孤児院やシェルターのボランティアの方の活動を目の当たりにしたことから、子どもに関わるボランティア活動に関心を持った。日本で自分ができる活動を見つけたり、長期休暇には海外にボランティアに出掛けたりしたいと思った。

## 7. 参考文献

上野恭裕（2004 年）『ベトナム社会主義共和国の保育実態と今後の課題に関する一考察：BINH MINH 幼稚園の視察を通して』，日本保育学会大会発表論文集（57），234-235

浜野隆（2010 年）『ベトナムにおける幼児教育の動向-「教育の社会化」と格差問題への対応』， <http://www.blog.crn.or.jp/lab/01/23.html>

## 医療と教育現場から見るベトナムの社会格差

王珣 文教育学部言語文化学科グローバル文化学環 2 年

### 1. 調査のテーマ

わたしの出身国中国は今急速な経済成長を遂げているが、その中にある「格差」という問題が非常に目立っている。医療において、「看病貴、看病難」という問題があり、教育において、農村部では貧乏で学校に行けない子供たちの問題など、様々な分野で格差が見えているが、アジアにおいて経済成長率が二番目になっているベトナムにおいて、成長しつつある社会の中で目に見える格差を自分の目で見てみたい。そして今回は、公立病院、公立保育園、私立孤児院など、ベトナムの医療や教育の現場に足を運ぶ機会があり、政府の支援のある公立施設とそうではない私立施設両方見られるので、実際の現場の比較を通して、ベトナムの「格差」を発見し、それについてより深く追究して、調査できたらいいなと考える。

### 2. 調査設問

医療と教育において、ベトナムの公立と私立の施設がどのようにベトナム社会で位置づけられているのか、国民がどのように選択し、どこに問題を感じ、どのような解決を求めているのか、そこからベトナム社会の格差の現状、背景を調査する。そして、それに対して政府の取り組みに焦点を当てて調査を進めたい。ベトナム社会のあらゆる「格差」について深く追究したいと思う。

### 3. 調査結果

#### 【幼稚園】

ベトナムの公立幼稚園は自分の想像よりだいぶ広くて充実した環境だった。2 歳から 5 歳までの子供がいて、一学年 1200 人ぐらいの規模だった。1 学年は 8 クラスに分かれており、1 クラスは 2 人～3 人の先生がついている。先生全員が教員になる養成教育を受け、資格を持っている。先生たちは制服を着用していたし、大きい園内でたくさんの遊具が設置しており、どれもとても新しく見られる。毎年遊具を新しくするために工夫をされているらしい。このような環境はホーチミンにおいてごく普通の公立幼稚園の様子だが、農村の状況は詳しく知らないが、都市部とはだいぶ違うだろう。

幼稚園の先生のインタビューによると、ベトナムの公立幼稚園は統一した同じ値段の学費をとっている。先生たちの出勤時間もきちんと政府により決められている。子供が公立幼稚園に入る条件は以下の 3 つのように教えてもらった。

#### ① 住居の地域

一つの District には数多くの幼稚園が存在し、例えば district 5 には 30 ぐらいの幼稚園があり、住民が自分たちの都合で（家までの距離、便利さなど）自由に子供に通わ

せたい幼稚園を選択する。

② 子供の年齢

3 歳以下の子供は受け入れられないというルールは厳しい。3 歳以下の子供は私立幼稚園に行くことは可能である。

③ 子供の健康状態

健全な子供たちしか受け入れない。障害を持つ子供たちは特別措置のある学校に行かせる。

以上 3 つが公立幼稚園に入るすべての条件となる。ただし、両親が公務員だと子供が入りやすい。

幼稚園の先生たちは、現在の給料や教員生活に大変満足している様子で、唯一困難を感じていることは、政府が毎年新しいレッスンを出してくるので、それについていくことと、どのように上手く実施するかということに対し、とても苦勞していることである。

【地域の公立病院】

手術見学

今回特別に許可をいただき、手術用の特別な服に着替え、進行中の外科手術を見学した。実際に手術をするたび、どんなことが必要なのか詳しくわからないが。見学した感覚としては、衛生状態、消毒などについて、基本的なことはするが、どれも徹底的にやる感じはしなかった。病室に洗面台がなく、即時に手を洗い、消毒することは難しいと思われた。そして、携帯を使うこともあったりと、緊張感が自分の想像したのと違った。

産婦人科お医者さんのインタビュー

このお医者さんはこの公立病院に来る前は私立病院で働いた経験があるので、私立病院の話もしてくれた。私立病院はだいたい一人のお医者さんに 2、3 人の看護師さんがついている。公立病院よりだいぶ高いサービスの水準や技術を持っている、そして給料が非常に高い。そのようないい環境を諦めて公立病院を選んだ理由を尋ねると、お金持ちの患者さんばかり来るので、自分があまり社会に役に立っていないと感じたので、公立病院に来たと言った。今最も大変だと感じることはこの病院のお医者さんと看護師さんの数が足りないことである。今この公立病院の産婦人科では全部で 5 人のお医者さんしかなく、夜勤はほとんど 1 人だけが出勤する状況となっている。それで一人一人の労働が非常に重くなっている。公立病院の質を高めるには、まずはいいお医者さんと看護師さんを増やすことが一番急ぐ必要がある。

病院医務局員さんインタビュー

今より多くのベトナム国民が医療保険に入り、公立病院でそこまで高くない医療費で治療を受けられるけれども、その中で一部のお金の問題で治療を受けられない人に対して

病院側はどんな対応をしているのかという質問に対し、事務局員さんは、病院側はたくさんの方のチャリティ支援を受けており、ドナー制度も導入していると話した。そして、最近多くの有名なテレビメディアが病院に来て、社会へ貧乏で治療を受けられない人のために予算を立て、寄付を呼びかけている。そして、NGO や NPO からの支援はないが、治療費の支払いが困難である患者さんのために、ビジネスマンなどによるチャリティ活動やチャリティツアーが多く行われていると話した。

病院の外科のベッドで患者さんへのインタビュー

時間：午後 1 時半

対象：胃痛の男性、60 代～70 代

話によると、胃の手術をしたが、完治するためにさらに手術がまだ必要みたい。しかし十分のお金がなくて、病院側が手術をさせないため、退院するしかない。

#### 【公立孤児院と私立孤児院】

孤児院に関しては、公立と私立の二箇所を訪問した。一番の違いといたら、私立のほうは政府からの支援が全くないということで、すべてがボランティアや民間の団体の支援で成り立っている。そのため、公立孤児院のように充実した 1 日のスケジュールがなく、全面的な教育を受けられる環境、衛生条件も備わっていない。私立孤児院の院長の話によると、公立孤児院に行くには多くの条件が必要で手続きが面倒である。しかしここはストリートチルドレンや DV 家庭にいる子供たちを含め、どんな子供でもすぐに受け入れられる。ボランティア頼りなので一人一人に充実した環境を与えるには限度はあるが、子供に居場所を与えるためにボランティアが心を込めて最大限の努力をする。

## 4. 考察

### 【幼児教育】

今回は残念ながら、私立の幼稚園には行けなかったが、学校の環境と先生たちのインタビューからすると、高い費用をかけてハードの面を求めるために私立の幼稚園に行く必要性を感じなかった。しかし、1 クラス 60 人前後ということなので、そこで「教育の質」と言う問題も考えなければならないと思う。やはりそれだけ規模があり、人数のある幼稚園では、教員が如何にそれに対応し、うまく管理していくかを今の教育の質を高めるために課題として考える必要があると思う。

事前調査で、ベトナムは幼児教育のみならず初等教育においても非常に高い就学率を達成しており、識字率も、同程度の経済水準の国に比べ著しく高いと分かった。幼稚園先生のインタビューで教えてもらった入園の条件によると、かなりの普及率があると実感できる。これは、ベトナム人政府が初等教育に大きな力を入れていることを感じられる。しかし、これはあくまでも都市部の状況である。先生の話によると、地域によって農村では幼

稚園の普及もまだ問題となっていて、通学困難などで行けない子供たちもまだまだたくさんいる事実がある。実際私たちが車で田舎のほうへ行くと、公立幼稚園のような施設の存在が非常に想像し難い環境であった。幼児教育の資格を持っている先生も都市部の幼稚園に集まり、初等教育においてそこで大きな格差が生じる。格差是正において、格差をそれ以上拡大しないように、政府が教育資源の分配の平等、貧困層の教育を受ける権利を今後もっと重視すべきだと考える。特に教員のレベルを均等にするために、貧困地域ではいかに教員のレベルアップを実現できるのかは今後において大きな課題だと考える。

### 【医療サービスの質】

ベトナムでは、地域のヘルスセンターから郡病院、省病院、国立病院まで段階に分けられている。しかし、医者は大学時代の成績を元にして決められ、いい成績であればあるほど、大きな病院に勤務できるのだそうだ。そして、私立病院の場合、給料が高いということで、多くの有能な医者を引き止める大きなポイントとなるだろう。そのため、地域公立病院のサービスや質が比較的到低く、は国民にあまり信用されず、小さい病気でもそのまま大きい病院行くか、私立病院に行く傾向がある。そうすると、元々政府が果たしたかった病院の機能分担の目的がなかなか果たしていない。公立病院でインタビューを受けてくれたお医者さんのように、社会貢献をしたいので高い給料を諦めて地域の公立病院を選んだ医者は現実的にまだ少ないだろう。優秀な医者が大きな病院に集中する傾向は世界的どこもあるかもしれないが、完全に成績で医者を分配するのであれば、地域病院と大きい病院の間のサービスの質の格差がどんどん広まっていき、地域病院の質を高めることは非常に難しくなると思うし、なかなか国民の信用が得られないと考える。

貧困層の人の治療について、公立病院の事務局員の方がチャリティ支援を受けて援助する形をとっていると話したが、病室で聞き取りをした際、実際にお金がなくて手術を受けられずに諦めざるを得ない患者さんがいた。メディア、社会、ビジネスマンの援助チャリティ支援はもちろん大きな支えとなるが、それに頼りすぎるのは貧困者に不安を感じさせるだろう。事前勉強では、ベトナムは貧困者に対する福祉事業として貧困者の医療費免除される貧困者保険制度を導入し始めたが、その中でも準貧困層といわれる層の問題が大きく、医療施設受診が経済的理由でできない場合も多いということを学んだ。やはり切実に政府がこれに対する対策の更なる浸透と普及に力を入れたほうが国民の安心に繋がると感じた。

### 【公立孤児院、私立孤児院】

孤児院の場合、政府が関わっているかないかで環境がずいぶん変わることが分かった。そこでベトナムの貧富の差、身分の差を公立と私立孤児院の子供たちを見て実感した。社会主義国家で教育重視のベトナムであり、私立だからといってこのような子供たちのための孤児院施設に一切援助しないやり方に疑問に思った。特別な背景を持っている子供こそ

より多くの関心や教育が必要だろう。本当の教育の平等に向け、政府が公立孤児院の入院制限の緩和、私立孤児院の見直しなど、制度の改善が切実に必要だと考えている。

## 5. 調査に参加した感想

今回のスタディツアーでは、ほかの日本人の友達はベトナムの風景、ベトナムの交通状況などに対して驚いたことはたくさんあったようでしたが、私は逆にベトナムの街の風景に非常に親近感を感じました。自分の国中国とよく似ているから。ブランド品を多く陳列している繁華街を少し離れたところで、庶民の感じの小さい家屋が並んでいたり、田舎に行くと、外から家の中まで見える所があり、どう生活していくか想像すらできない屋内の状態だったり、中国でも普通の光景です。あらゆる所で「格差」ということを人々に感じさせる。私はこのような「格差」が溢れる環境で育てられたということでもあり、「格差」に対して非常に特別な思いを持っていました。医療、教育において、公立と私立の問題、地域の問題でベトナムの格差が見えているが、両親が公務員だから入りやすいなど、社会の不平等を一般民衆の身近に感じることも決して少なくないと思いました。ベトナムでは社会主義らしきものはあまり感じませんでした、そのことを聞いて、やはり政府と関連する人、物を優先してしまうという問題がどうしても存在すると思いました。だからこそ、社会主義国において格差を是正は決して短時間で実現することではなく、長期的に周りの格差を発見し続け、長期的に問題視して考え続ける姿勢が非常に大事だと思います。今回ベトナムで学んだことを生かして、今後発見し続ける目で、もっと自分の国のことを見て調査していきたいと思います。

今回のスタディツアーは観光旅行では行けない所にたくさん行き、様々な仕事をしている人、一般のベトナム民衆と話をすることができて本当によかったと思います。言葉の壁はありますが、それを乗り越えてお互い一生懸命意思を伝えようとすることによって、さらにその有難さを感じました。一緒に参加したメンバーと一週間助け合ったり、交流しあったり、私にとって刺激になることがたくさんありました。こんなにたくさん学べて、色々吸収できるツアーは本当に初めてで、機会を与えてくれた榊原先生、駒田さん、村松さん、参加者の皆さん、現地に会ったすべての方々、本当にありがとうございました。

## 6. 参考文献

[http://www.ncgm.go.jp/kyokuhp/library/health/pdf/201012\\_vetnam.pdf](http://www.ncgm.go.jp/kyokuhp/library/health/pdf/201012_vetnam.pdf)

今井昭夫、岩井美佐紀 編著(2012 年)『現代ベトナムを知るための 60 章(第 2 版)』明石書店



## ベトナムにおける水の考え方

金子はるひ 生活科学部人間環境科学科 2 年

### 1. 調査のテーマ

ベトナムでは水をどのように確保、利用しているか。

### 2. 調査設問

近い将来、水戦争が勃発すると言われているほど、水資源の価値は高まりつつある。それらの困難を乗り越えるためには、すべての人が水の使い方を改め、水に対する意識を高めなければならない。

新興国ベトナムと先進国日本には水に対する考え方が違うだろうし、私たちが学べることはたくさんあるはずである。ベトナムの水環境については、具体的な資料があまりない。生水はお腹を壊す、ペットボトル水を飲まなければならない。硬水だからお腹が緩くなるなど...実際に現地に行って、水の保存方法、水に対する現地に人たちの考え方を知り、それがどう日本社会に応用できるのかを考えていきたい。

### 3. 調査結果

#### ※ 飲料水としての水

ベトナムでは、飲料水として、一般に水道水は飲まず、右の写真のようなあらかじめきれいに処理されたボトルウォーターを飲む(写真左)。私がインタビューしたすべての人が一度煮沸殺菌された水、又は、ボトルウォーターを飲んでいることが分かった。ちなみに、インターネットで料金を調べてみたところ、“La vie”19L で 4 万ドン (200 円程度) だそう。(※1)初任給 3 万円と言われているベトナム(2013 年現在)では安くない。尚、このボトルウォーターは孤児院、病院、保育園と、私が訪問したあらゆる場所に設置されていた。このボトルは定期的に配達される。空になったケースは廊下に積まれ、業者の方が回収をする(写真右上)。街中で、業者の方が人力車で水を配達している姿を見ることができた(写真右下)。

日本では、喉が渴いたときに、水道の蛇口をひねって水を自由に飲むことができるが(特に小中学校などで)、それがこの国ではできない。喉が渴いたら、このボトルウォーターが設置されている部屋まで行き、そこで初めて水を

#### ▼ボトルウォーターの様子

左) ボトルウォーター(孤児院)  
右上) 空の容器(病院, 保育園)  
右下) 配達の様子



飲むことができる。ちなみに幼稚園では園児 1300 人に対して、4 つしか設置されていないそうだ。

わたしのグループを担当したホーチミン医科薬科大学の生徒は、毎日ペットボトル水を買っている。持ち運びが簡単で、安心な水だからということだ。

#### ※ トイレ水としての水

ベトナムのトイレは日本と異なる。ホテル、空港などの外国人観光客が頻繁にくるところには自動水洗式トイレが普及しているが、カフェ、病院などの地元の人が集まる場所に設置されているトイレは自分で水を桶に汲み、最後に流して使用する。カフェでは雨水を、病院では水道水を貯めていた。トイレットペーパーは各自が持参をしなければならない。



▲貯水槽の様子

左)カフェのトイレ 右)病院のトイレ

#### ※ コップをシェアする

また、日本では見たことのない習慣を見つけた。飲み物を飲むときに使用するコップをみんなで共有するということだ。つまり、この国では他人が使ったコップを洗うこと無く、使い回しをする。例として、孤児院では右図のように設置されたガラスのコップをみんなで使用する。また、昼食を食べた小さな屋台風レストランにも設置されていた。(私は念のため、一度飲料水ですすいでから使用した。)

ちなみに使い方は簡単で、整頓されて置かれているコップを自分でとり、水を飲んだあと、元のように上下逆さまにして戻すだけである。孤児院では水だけでなく、暖かいお茶もいつでも飲めるようになっていた。

#### ▼コップの使い回し

上)孤児院

下)屋台レストラン



#### ※ 卓上の食器について

卓上にはお箸、スプーンがまとめて用意しており、客が自分自身でとれるように設置してある(写真右)。屋外であってもそのままむき出しで置いてあった。すぐ隣には小さな紙(ティッシュのようなもの)があり、使う前に毎回客が各自で、自分が使う箸やスプーンを磨くそうだ。私もそのやり方に習って食事を済ませた。尚、食器の洗いは日本と同じで、大きな汚れはまず水で流し、そのあとに洗剤を使用して念入りに洗い、水できれいにすすぐというスタイルである。

#### ▼ティッシュペーパーで 箸やスプーンを拭く



## ※ プールの授業

訪問した幼稚園にはプールがあった。一年中気温が高いベトナムでは、いつでも泳げるそうだ。しかし、ホーチミン医科大学の生徒の話によると、小学校、中学校では水泳の授業が普通はない。街で泳げる場所があるかと聞いたところ、市営のプールが所々に存在するのだと言う。

▼保育園のプール



## 4. 考察

飲料水はボトルウォーターを、加熱する料理には水道水を、トイレには雨水を使用するなど、目的に応じて水の使い方が分けられている点が素晴らしい。日本で行われているような、きれいに浄化された飲める水を洗濯水・トイレ水として使用するのは無駄遣いであり、この多元給水システムを取り入れて行くことを勧めていくべきだと思う。しかし、別の視点からこの状況を捉えると、違った見方をすることができる。雨が多いベトナムでは水資源が豊富であるが、その水を大量に効率よく浄化することができないということだ。水道水をそのまま飲めるようになったら生活がもっと楽になるし、今まで配達で苦労していた肉体労働は減る。

コップを使い回しする習慣は、慣れてしまえばいいのだろうが、衛生的に安全なのかどうかはわからない。口から口へと移る伝染病などへの感染経路になってしまいかねない。水資源がたくさんあるのにも関わらず、毎回コップを洗わないのは、洗う必要がないと考えている・労働力を減らすため、だと考えられるが、これがベトナムだけの習慣なのか、それとも、新興国で行われていることなのかは不明。今後比較してみたい。

箸やスプーンを使用する前にティッシュを使用して拭くということは、やはり完璧にきれいな状態でこれから使う食器を保存していないことが原因だと考えられる。しかし、ここから学べることは、完全にきれいに洗わなくても、食べる前に各自が責任をもってきれいにすれば良いということだ。(資源の節約につながるかは疑問だが)このように、「水」だけを使って完全に汚れを取り除くのではなく、別の資源である「紙」を使用して代わりに食器を洗うこともできるのだ。今まで水だけでしかきれいにできないと考えられている物も、将来、水を節約し、代替品を使って同じことができるのかもしれない。新しいアイデアだと思う。

プールの授業が無いことは意外だ。朝と晩の二回シャワーを浴びることが普通のベトナムには、水資源がたくさんあり(スコールが降る)、また暑い国なので、水泳は盛んな娯楽・スポーツだと考えていたからだ。大きな川が街には流れているし、海までの距離はあるものの、水泳できる自然環境は近くにある。それにも関わらず、水泳を授業の一貫としない点は、やはり、水道費用が高いためだと推測される。水質を維持するのも簡単なことではなく、安全な水の無駄遣いはできない。

全体のまとめとして、まだベトナムの水道水は飲料水として安全なものとは言えず、ボ

トルウォーターを買うことが必要だ。水処理のための大きな施設を導入し、より簡単に、多くの人に安全できれいな水供給されることがこれからの課題だ。

#### 5. 調査に参加した感想

「水」というテーマをもとに、ベトナムの生活を様々な角度から見ることができ、大変勉強になった。これからの未来、日本全体で、そして世界的に水は大きなテーマになり、各自の水に対する考え方を見直さなければならない時がやってくるであろうが、その解決策のヒントをベトナムから得ることができた。「節水」とは、より少ない水で済ませることだけでなく、水の種類によって使用用途を変える、汚れは紙で拭いて代用すること水を節約することである。私にとって新しい「節水」のイメージが湧いた。初めての新興国で新しい経験がたくさんでき、自分の糧になった。毎年変化して行くベトナムの成長を、この目で見て感じていきたい。

#### 6. 参考文献

Vietnam Go : ミネラルウォーターの価格

<http://www.vietnam-go.com/kuchikomi/topic.php?id=145689>

(2013/9/15 に最終アクセス)

## 生物が生きている理由

鈴木裕香 理学部生物学科 3 年

### 1. 調査のテーマ

すべての生物が「生きる」ということは当然のように思われるかもしれない。その一方で近年日本では自殺者数が多いことが問題になっている。そこで、生きることは苦しいことに溢れているのにも関わらず、なぜヒトあるいは生物は生きていけるのか、何が生きがいであって生を支えているのか、ということについて興味をもった。人が生きるのに必要なものは、家族・友人・金・社会貢献等、様々に言われるが、不自由無く日本で暮らしている中では、何が本当に大切なものなのか、なぜ多くの人は多少苦しくても死なないのかわからなかった。また、生まれながらに病気に苦しんだり孤児として生きていたりする人々がいることに対して不平等ではないだろうかと感じ、彼らは幸せなのか、彼らの生きる意味・生きがいは何なのかという疑問を抱いた。

### 2. 調査設問

生物がなぜ生きていけるか、ということを考えるために様々な状況で生きる人々の生き方を知り、人々が何を「生きがい」としているかを知る。また、日本での生活は日本人である私にとって当たり前ようになってしまっているが、ベトナムの人々の生活を見ることで日本と比較して様々な面から考える。

### 3. 調査結果

私が最初に訪問した施設はエイズの子どもの孤児院である。ここでは 0 才から 17 才までの子ども達が教育や病気のケアを受けながら生活している。彼らは親が生きているか他界してしまったかに関わらず、エイズの治療のために親から離れて暮らしている。彼らは施設外に出ることはほとんどなく、家族の施設訪問は可能であるが実際に訪れる家族は稀だという。別の日に私達は現地の一般の幼稚園も訪問したのだが、孤児院の子ども達の体はやや細かった。また、孤児院の子ども達は訪問した私達にすぐ慣れて体全体で一緒に遊び、私達が紙とペンを出すとそれらを非常に欲しがって熱心に遊んでいた。彼らは一見楽しそうに遊んでいるだけのようにも見えたが、見知らぬ私達にしがみつくようにして一緒に居たことや、紙とペンに対して驚く程執着していた様子から、母親や物を自分 1 人で独占する経験が少ないために、訪問者に対して警戒するよりも、このような反応を見せるのではないかと思われた。

今回ベトナムで訪問した施設の中で特に印象的だったのは、ストリートチルドレンの保護施設(Green Bamboo Warm Shelter)である。このシェルターは男の子用で、1 人のベトナム人女性を中心としてボランティアで人々が運営している。ここの何人かの子供は学校に通っている。一緒に話をした子供達は皆生き生きしていて素直に見えた。将来ダンサー

になりたいという子や既にこのシェルターを出て料理人としてここに帰ってきて働いている子がいた。ミサンガを作るのが得意な子は私達にミサンガを作ってくれ、その時の表情はとても真剣だった。このように自分のできることを見つけて行っている様子はとてもたくましく見え、1人の人間として輝いていた。また、最年長の子は非常にしっかりしていて「彼ら(シェルターの男の子達)はみな僕の兄弟のようだ」と言って彼らの面倒を見ていた様子は非常に心に残り、本当の家族でなくても強いつながりを築くことができるのだと感じた。

現地の病院を訪れて見学をすると、そこでは面会時間の制限は無いことがわかり、常に看病に来ているという家族に出会った。また、病室にはベッド同士を遮るカーテンは無かった。このようなことからベトナムの家族のつながりが強いことが感じられた。

#### 4. 考察

現地の施設訪問から、人と人の強いつながりや、好きなこと・得意なことが生きがいになるのだと考えられた。シェルターでの子どもの様子と子どもをサポートしようとするボランティアの人々の様子から、強い人間関係は一般には母子間や家族間で生まれるものだが、そうでなくても大切に思い合える他者の存在が同様に生きがいとなりうるのだと強く感じられた。

人間は脳が非常に発達しているため会話することができ、複雑に感情をもっているので、このように人とのつながりを強く感じるができるが、人間以外の生物ではどうだろうか。まず、ヒトの中に「死ぬ」ことと「死を抑制する」機能があると仮定する。死ぬという機能をもっていることは、自殺者がいることから仮定できる。これまでの考察をふまえると、死を抑制するものというのが、他者との強いつながりであると考えられる。

人間以外の生物で死について2つの可能性を考えた。1つめは、人間と同じように死を抑制する何かが存在することであり、もう一方は死ぬ仕組み自体が無いということである。(ただしここで言う自殺とは、社会性の動物が行うような他の個体の生存を守ろうとしているように見える行動ではなく、人間が行うような、苦しい状態から逃れようとする自殺をさしている。)

前者の仮定については例えば、人間の手によって殺される直前の家畜を見て、その家畜の目を見て、死にたくないと訴えかけているようであった、と言う人がある。私はそのような場面に遭遇したことがないのでわからないが、もし本当であれば、そのような動物も何らかの死から逃れるしくみが存在するのかもしれない。ある研究では、哺乳類を対象として実験を行い、早期に離乳した場合に不安傾向の上昇やストレス反応性の亢進が認められている。それらは神経の活動と関連するものである。

後者の仮定については、進化の過程で(人間のような積極的な)死ぬ仕組みをもった生物は生き残ることができなかったため、現在の生物はすべて、積極的に死ぬ機能はもっていない

いのだと考える。例えば、人間は高度に考えることができるので「死」というものの存在を知っており、死ぬことが選択可能であるが、死ということを知らなければ死を選択できないだろう。生物は脳や神経をもった動物ばかりではなく、植物や単細胞の動植物も存在し、それらには苦しみから逃れるという概念は当てはまらないように思われるため、後者の仮説が妥当ではないだろうか。

人間の自殺とは異なるが、そもそも生物にはプログラム細胞死があり、細胞レベルでは多くの生物が自殺をしている。これらをふまえると可能性としては、死はすべての生物にとって潜在的に選択肢として存在しており、神経の発達にともなって死のレベルが変化してきて、多様化したのかもしれない。

生と死は生物学的にも人文・社会的にも大きな問題だろう。文化によっても様々な考え方があるのかもしれないが、高度に感情をもつ人間にとっては、生は 1 つの個体ではなく、人と人との関わりの中で成り立っていくものだと考えられる。

## 5. 調査に参加した感想

私はこれまで海外へ行った中で、今回のベトナムが最も「外国に来た」という感覚を強くもった。ベトナム自体の独特の雰囲気はもちろんのこと、スタディツアーとして計画立てられて現地の施設に入って、様々な話を聞いたり様子を見ることができたりしたことがその原因だと思う。慣れないことが多かったがそれらすべてが新鮮で、非常に貴重な楽しい経験になった。私は理学部なので直接的に社会に応用が利く分野ではないことが多いが、知識欲を勉強の動機にしつつ、単に仮説を並べ立てるだけでなく証明に近いことができるようになって少しでも学問と現実をつなげていけるようになりたいと思う。

## 6. 参考文献

麻布大学伴侶動物研究室 <https://sites.google.com/site/carazabu/research>

## ホーチミン市の直面する課題とこれからの発展

野崎可織 文教育学部グローバル文化学環・地理学コース 4 年

### 1. 調査のテーマ

＜はじめに＞

ベトナムは約 65 もの中央直轄市と省からなる国であり、今回私が訪れたのはそのうちの一つのホーチミン市である。ホーチミン市での状況が ベトナム全体について当てはまるものではないが、いち早く経済発展を遂げた市であり、今後のベトナム全体の発展のモデルとなるだろう。

＜研究テーマ＞

当初設定していたテーマとして、「経済発展に伴って広がる格差とその要因」を挙げていた。しかし実際に訪れ、ホーチミン市における富裕層と貧困層の格差や階層分化の存在はあるものの、北部や南部、都市部と農村部といった広い地域間においての格差の広がりを指すと感じた。（例えば孤児院と市内の幼稚園の施設や経営基盤の格差は大きな問題ではあるがそれは経済発展に伴ったものではない。）そこで今回は当初のテーマから変更し、ベトナムにおける経済発展のモデルとなっているホーチミン市における問題やこれからの課題を考察することにした。

### 2. 調査設問

今回訪問した施設に直接的に関連したテーマではない為、あらかじめ設問を用意するのではなく会話のやりとりの中で自分のテーマに関して聞きたい内容を拾いだすことを心がけた。同時に街中での観察や通訳として参加して頂いた学生との対話を通した調査も重要視している。以上を踏まえた上で医療、教育、雇用、インフラの 4 つの点からまとめ、調査結果とする。

### 3. 調査結果

＜医療＞

#### 施設や設備

ホーチミン市の District Hospital を訪問。開放感溢れる施設や CT、レントゲンやその他の医療機器に衝撃を受けた。政府が医療に対して力を入れていることが、乳幼児死亡率や感染症の減少、そして実際の施設でも見られた。

#### 医療サービス

また、国民の約 60%は任意で健康保険に加入しており、その場合医療費負担は 20%。実際に私がインタビューした患者さんは加入しており、金銭的な負担はそれほど大きなものではないと話していた。また、医療費の払えない貧困層に対しては病院が寄附金や予算を



充てており、病院の担当者が笑顔でその話をしてくださったのが印象的だった。

### 課題

高度な医療サービスや制度の反面で、リファラルシステムがうまく機能しておらず、患者が軽度な病気でも大きな病院に来てしまうという問題があった。2 歳児の患者の母親は、地元の病院で誤診を受け、こちらの病院にしたという。彼女はこの病院に対して大きな信頼を抱いており、地元の病院には今後かかりたくないと話してくれた。

ベトナムでは医学部時代の成績を元に都心部の病院から医師を振り分けていくので、いい医師の集まる都心の大きな病院は人気が高くなってしまう。

### <教育>

教育に関しては、HIV に感染した子どもの孤児院での授業、幼稚園の訪問で学ぶことができた。まず両施設で共通して、ベトナム人がいかに教育を重視しているかを感じた。施設は寄付金で運営しており、金銭的な余裕がないといえる状況であったにも関わらず教科書や本は生徒ひとりひとりに新品のものが与えられていた。授業の進み具合や指導も見ていて少し厳しいと感じるくらい熱心に行われている様子が印象的であった。通訳として来ていた学生が通った公立小学校でも同じように厳しい授業が行われていたようだ。

幼稚園では、公立幼稚園であるにも関わらず豪華な施設が用意されていた。また幼稚園は月に日本円で約 7,500 円の学費がかかるが約 99%の子どもが通っているようだ。そして同時に習い事にも通っている児童も多い。

こういった環境の中で所得による教育格差や、児童の精神面に与える影響が今後懸念される。

### <雇用>

街中を見ていると昼間であるにも関わらずのんびりとカフェで談笑している 20 代～40 代の男性を多く見かけた。

しかし、ベトナム政府の発表する失業率を見るとホーチミン市の失業率は約 1.24% (2012 年) とかなり低い。これには日雇いを含む短期の労働者の数を失業者として計算していないという指摘がある。学生に聞くとベトナムでは女性は家事や縫製などの仕事に忙しくそれに比べて男性はのんびりとしているようだ。

### <インフラ>

全体として医療や教育の発展のレベルは自分の想像を超えるものであり衝撃を受けた。しかし一方で、公共交通機関、上下水道や道路等の整備は十分でない。特に少し市内中心部を離れると舗装されていない道路も多く見られ、カフェでは水洗式でないトイレもあった。中心部に関しても複雑な道路、行き交うオートバイなど特に外国人にとっては不便さを感じる点だろう。実際に、ホーチミン市 2 区で考案されていた英国企業を中心としたト

ウーティエム新都市プロジェクトは交通インフラの不備を理由に開発が進まずにいるなど、市の開発政策にとって痛手となっている。

また、オートバイの利用による大気汚染も大きな問題になっており、街中にはマスクをして乗車する人々の姿が多く見られた。

#### 4. 考察

##### <課題>

全体として多くの課題が見られたが、医療、教育に関しての取り組みや発展、政府の介入度は高いがその一方で、インフラの発展が追いついていないというのが一つの大きな課題なのではないかと考えた。特に他の都市を結ぶ道路とホーチミン市における交通インフラ整備との建設だ。

インフラ整備の必要性として①地方都市（主に南北）間を結ぶ流通経路の整備、②全都市における雇用の創出、③海外企業の誘致、④環境に対しての配慮という 4 つの理由があげられる。ベトナムは若い労働力を多く抱えている上、東南アジアの中心に位置し、外国の工場を誘致するのに魅力的な土地である。投資等による評価だけではなく今後は実体経済においてもアジアのハブとして流通の拠点、豊かな市場としてベトナムが発展していく為には早急なインフラ整備が必要であると感じた。

##### <日本ができること>

現在でも日本は医療、教育、インフラなど様々な面でベトナムに対して資金、技術協力を行っている。日本は以前から橋の建設などベトナムに対して積極的な支援をしてきた。その為私たちが日本人だと知ると好意的な態度を見せてインタビューに応じてくれる方も多くいた。日本にとってこれから大きな市場となるベトナム、それだけでなく学問や技術的な面でもこれからベトナムに学ぶことが多くなるだろう。当たり前の事のように、互いの協力関係の大切さを再認識した。

#### 5. 調査に参加した感想

卒業研究で東アジア経済圏の永続的な発展を題材にしているが、その研究は文献を中心とした調査であり、実際に現地に足を運ぶことはなかった。しかし、自分の目で文献には現れない人々の生活を見ることの重要性を感じた。例えばベトナムは「社会主義国」と謳っているが、ベトナムにおける社会主義の精神は私の想像するそれとは大きく違っていた。彼らの根本にある考えは“自由”と“独立”であり、社会主義国と名のつく前から持っていたベトナム人の精神なのだ。長く続いた植民地時代、そして東西冷戦を経てもなお追い続けた理想であり今まさにそれを達成しているのだという意識を対話の中から感じた。そのような精神が彼らの発展のモチベーションの少なくともひとつになっているのだと考える。これは実際にベトナムに行き、人々の対話を通して初めて分かったことのひとつであっ

た。

普段は経験する事のできない貴重な機会を与えてくださった榊原先生、駒田さん、村松さん、センターの方々にこの場を借りて感謝申し上げます。

## 6. 参考文献

香川広海（2005-12）『ベトナムのドイモイ後の経済格差の拡大とその要因』新潟大学大学院現代社会文化研究 No.34,141-158

レ・タン・ギエップ（2011 年）『経済成長が貧困と所得分配に及ぼす影響：ベトナムの事例』

<http://www.jiu.ac.jp/books/bulletin/2011/graduate/nghiep.pdf>

国際協力銀行（2001 年）『貧困プロファイル ベトナム社会主義共和国』

<http://www.jica.go.jp/activities/issues/poverty/profile/pdf/>

JETRO（2012 年）『ベトナム経済発展の考察』

## 2－4 訪問記録

### ○ 戦争証跡博物館

訪問日時: 2013 年 9 月 2 日 9:00～11:00

訪問場所: War Remnants Museum

28 Vo Van Tan, Ward 6, District 3, Ho Chi Minh City, Viet-Nam

#### 1. 内容

ベトナム国内だけで約 200 万人以上が命を落としたとされるベトナム戦争。そんな悲惨な戦争を二度と起こさないようにとの想いを込めて 1975 年 9 月 4 日に開館した戦争証跡博物館。館の入り口前にはたくさんの戦車や戦闘機が並んでおり別館には実際の拷問所を再現したものが展示されている。一階には子供の書いた絵、そして二階、三階の展示ブースには戦争の経緯や概要の説明、実際の戦争の写真、武器などが展示されている。また、枯れ葉剤の影響を受けた子供の写真、中には奇形になってしまった胎児のホルマリン漬けなどの展示もある。

#### 2. 所感

アメリカ軍の進撃だけでなく、アメリカにおける反戦運動の様子や日本の共産党のポスター、日本の支援、その他海外における活動など幅広い視点からの展示がなされていた。戦争による被害の大きさを知るのはもちろん、戦争や平和とは何かを深く考えさせる内容であった。



実際に使われた戦車



日本の共産党によるポスター

(文責:野崎可織)

## ○Tuan 先生からのレクチャー

日時：2013 年 9 月 2 日 14 時～16 時

場所：Hoang Hai Lang Hotel Meeting Room

52B-62-64 Pham Hong Thai Quan 1, Ho Chi Minh City, Viet-Nam

講師：Tuan 先生（ホーチミン医科薬科大学副学長）

### 1. 内容

#### ①ベトナムの概要

【地理】日本と同じ、細長い形をしている。

【人口】若者（30 歳以下）の人口が全体の 57%という、非常に若い国。しかし、人の数が多くても quality が問題であり、この問題を打開するためには、ハイレベルな教育と、職業訓練が必要であると Tuan 先生はおっしゃっていた。

【経済】年間 7%の GDP 成長率で、アジアでは二番目に速く経済成長を遂げている。

#### ②ベトナムにおけるヘルスケア・システム

ベトナムには、レファラル・システムが存在する。つまり、Commune Health centers → District hospitals → City & Provincial hospitals → Centers of Preventive medicine → Central hospitals というように、順序通りに病院に行き必要であれば紹介制度を経て、比較的安価で、よりレベルの高い病院に行くシステムである。

しかし、システムはうまく機能していない。Tuan 先生によれば、比較的豊かな人々は Commune Health centers に行かず、直接 District hospitals 以上の病院に行ってしまうという。この理由は、Commune Health centers の医療の質にあるとおっしゃっていた。このようなことから、質の高い病院ほど患者数が多くなり、ベッドが不足してしまう事態も起きている。

#### ③ベトナムにおける医療事情

・死因の割合…国全体でみれば、非感染症が 56%、感染症が 29%、そして交通事故などによる外傷が 15%を占める。

・乳幼児死亡率…1990 年の約 50 人から 2010 年の約 20 人(1000 人)へと大幅に減少している。その死因は主に肺炎や下痢などの感染症だ。

・1 歳児の予防接種率…3 種混合ワクチンは 100%に近く、非常に高い確率。

・きちんとした水や衛生を使う人口の割合…1990 年から 2010 年まででそれぞれ 35%ほど上昇し、きれいな水を利用する人々の確率はおよそ 95%、衛生管理された施設を使用する人々の確率はおよそ 75%を達成している。

・医者と看護師の数(2010)…ベトナム国全体でみた場合、人口 10,000 人あたり医者が 12.2

人、看護師と産婆が 10.1 人。地方では、医者 15.2 人で看護師と産婆が 19.5 人と、医者よりも看護師と産婆の方が多い。一般的には看護師の数は医者の数の 3~4 倍くらいだが、ベトナムでは低賃金ということもあり、看護師や産婆を目指す人は少ないとのことだった。また、看護師養成学校もあるが、最近始まったばかりであるため、質があまりよくないと Tuan 先生はおっしゃっていた。

・子どもたちの発病リスク要因(2011)…空気汚染が 3 割、水質汚染が 2 割、食の安全問題が 2 割弱。外国企業の参入が増えたためかと Tuan 先生はおっしゃっていた。汚染されているいくつかの川では、魚が住めなくなっているという。

## 2. 所感

Tuan 先生は短い時間ながらも、ご専門の医療事情だけでなく、ベトナムの社会に関することや私たちの質問にも丁寧に答えてくださった。日本に留学なさっていたこともあり、日本と比較しながらお話してくださったので、私たちも当事者意識を持ちながらベトナム事情をじっくり知ることができた。

印象的だったのは、今後ベトナムも日本と同じように発展すると思うかという問いに対して、Tuan 先生は「No」と答えたことだった。理由は、日本は戦前から技術力が高く、戦後の発展にもそれが生かされたが、ベトナムにはそれがないとのことだった。若くて活気のあるベトナムだが、Tuan 先生は人々の能力がさらに必要だと感じていらっしゃるようだった。

また、子どもたちの発病リスク要因は環境汚染が約半数を占めている。新興国として経済成長が目覚しいベトナムだが、一方で人々の健康を損なうことがあつては悲しい。汚染の理由は多数あるだろうが、日本を含めた外国企業の参入も一つの要因かもしれない。事実、環境汚染はその国だけの問題ではなく、地球規模で考えるものだというのを改めて実感させられた。Tuan 先生のお話からベトナムの環境汚染と日本の経済戦略の関係について考える視点を頂けて、大きな刺激を受けた。

(文責：齋藤美咲)



当日は、ベトナムの祝日（国慶節）  
にもかかわらず、私たちのために、  
講義して下さいました。

## ○ District Hospital in District 2 訪問

訪問日時：2013 年 9 月 3 日（火） 8:30～15:00

訪問先：District Hospital in District 2

130 Le Van Thinh Street, Binh Trung Tay Ward, District 2 HCMC

訪問者：岡南愛梨、王玥、齋藤美咲、酒井佑果、野崎可織、榊原先生（引率）

面談者：院長先生、Son さん（病院の事務担当）、通院・入院患者さん

### 1. 内容

8:00～9:00 病院内の見学、案内

救急外来のための部屋、小児科、外科、産婦人科等の病室、診察室を見学した。

9:00～11:00 病院について説明、質疑応答

- ・患者の数は何人か？

→外来は 1200 人程度、入院患者は 180 人から 200 人程度

- ・ベッドの数は十分か？

→90%のベッド占有率であり、夏はより多くの患者が来るため、ギリギリになる。

- ・いつ建てられたのか？

→2005 年に建設し、2008 年に開業した。

- ・救急車は何台所有しているのか？

→3 台。交通事故が原因で運ばれてくる人が多い。

13:00～15:00 グループ 1 小児科にて診察見学、患者に聞き取り調査

グループ 2 外科の手術見学

私はグループ 1 で小児科の診察見学や患者に聞き取り調査を行った。診察見学では、3～4 組の患者の診察を見学できた。小児科の診察室は、1 つの部屋の中が二つに区切られていて、そこには女医が 3 人おり、診察を行っていた。胃の調子が悪く、食中毒と診察された子どもや、また、父親を亡くしたばかりで診察代を払うのが困難だという子どもとその母親等が来院していた。

聞き取り調査では今日退院するのだという子どもとその母親に話を聞くことができた。その子どもは、以前は別の病院に雇っていたが、病状がよくならなかったのこちらの病院を替えたら、3 ヶ月で病気が良くなったため、この病院には満足しているという話を母親から聞くことができた。

### 2. 所感

ベトナムの病院は想像以上に雑多だと感じた。クーラーは備わっておらず、病室は蒸し暑くて、また、狭い部屋にベッドを何台も置いて医者とナースが 1 人ずつ居るだけの病室もあ

った。ナースの数が足りていないのか、患者の家族がつきっきりで付き添っていないければおらず、また、病院食も無いので食事の世話も患者の家族がしなければいけないのが大変そうだと感じた。

しかし、入院患者に話を聞くと、さしてそれを不満に思っている人はいないようだった。榊原先生の話を知ると、昔のベトナムの病院はもっと医療設備が乏しかったそうなので、きっと医療環境は以前と比べて確実に向上しているのだと思う。今後もどんどんベトナムの医療環境は発展していくだろう。数年後にまたこの病院を訪れて、その発展ぶりを確かめてみたいと感じた。

(文責：酒井佑果)



#### District Hospital

産科病棟にて、看護師、助産婦さんたち。

ベトナムでは医師に対し、看護師不足が深刻な問題になっているとの事。



院内感染予防対策がされた、清潔な廊下。

必ずと言って良い程、患者さんには付き添い人が付いていた。



## ○ Linh Xuan Ophan Education Center, Thu Duc District

訪問日時：平成 25 年 9 月 3 日 8 時 30 分～15 時

訪問先：Linh Xuan Ophan Education Center, Thu Duc District

30/3 Ba Giang, Linh Xuan Ward, Thu Duc District, HCMC

訪問者：君島英恵、新井佑理、金子はるひ、鈴木裕香、村松（引率）、駒田（引率）

面談者：施設長、医師、看護師、保育スタッフ

### 1. 内容

この施設では、HIV をもつ 140 人ほどの孤児が暮らしている。年齢は 0 歳から 17 歳までであり、そのうち 0 歳から 6 歳までは 30 人弱。10 歳までは施設内に設けられた教室で保育や授業を受けるが、それ以降は公立の学校に通学する。施設では主に以下の 2 点を目標に掲げている。まず、孤児たちの生活を支え、健康状態を維持できるようにすること。次に、彼らが成長したのちに社会へ復帰、適応できるよう教育することだ。

健康に関しては、付属の薬局を中心として、毎日 2 回の抗 HIV 薬の服用の徹底や定期的な血液検査の実施、感染の原因となりうる傷口の手当などを行っている。毎日の健康状態のチェックも欠かさない。栄養にも十分に気を配っているようだ。管理栄養士が毎日の献立を考えており、いつでも自由に牛乳を飲めるようにしておいたり、保育園相当の年齢の子供たちには捕食時間を 1 日に 6 回ほど設けてヨーグルトや果物を与えたりするなど、栄養バランスに配慮している。衛生面についても注意が行き届いているようで、朝夕 2 回シャワーを浴びて清潔を保てるようにしている。このような配慮により、施設の子供たちは安定した健康状態にあり、症状の悪化などはほとんど見られない。

将来の社会生活に向け、重視していることは、特に思春期の子供たちへの精神面のサポートである。病気が原因でふさぎ込みがちになったり、家族のいる学校の友人を気にしたり、社会生活をうまくイメージできないなどの問題を抱えているようだ。こうした問題を少しでも解消するため、施設は様々な取り組みを行っている。同級生の保護者へ子供たちの状況を説明し理解を促す、キャリア教育を行う、ヒップホップやエアロビクスのような課外活動を通して心の安定を図るなどが例として挙げられる。

### 2. 所感

施設は開放的であり、スタッフの方々も子供の遊びや行動を制限することは少ないため、全体的に自由な環境で子供たちがのびのびと過ごしている印象を受けた。同時に、幾分か放任して育てているような場面も見受けられた。例えば、遊ぶときはほとんど子供たちだけで遊び、スタッフが加わることは少なかったり、物の取り合いや喧嘩が起きていても仲裁に入ったり叱ったりすることは少ないなどの点があげられる。子供たち一人一人と接したり話したり、一緒に何かやったりという時間は少ないようだ。スタッフには生活や健康

状態の面倒を見るという大きな役割があり、その他の活動のサポートまでは関われないのではないかと考えた。施設の概要についてお話をいただいた後、2歳から5歳までのクラスへ向かったのだが、私たちが子供たちに近づいていくとあっという間に彼らに周りを囲まれ、我先にという様子でお土産をねだられた。この時、子供たちの寂しさや人恋しさのような感情を察した。

(文責：新井佑理)



お土産のシャボン玉で遊ぶ。  
ホーチミン人民委員会（政府）が運営しているが、薬代など慢性的な資金不足人手不足のため、ボランティアの寄付や訪問を喜んで受け入れるようだ。



未就学児の部屋で子どもたちと交流する。紙とペンに夢中になる子どもたち。資金不足のためか、おもちゃなどがない。



施設では感染症予防を心がけている。一日に何度も掃除をしているため、床にはホコリ一つなかった。

## ○ District Hospital in District 2 訪問

訪問日時：2013 年 9 月 4 日（水） 8:30～15:00

訪問先：District Hospital in District 2

130 Le Van Thinh Street, Binh Trung Tay Ward, District 2 HCMC

訪問者：君島英恵、新井佑理、金子はるひ、鈴木裕香、榊原先生（引率）

面談者：院長先生、Son さん（病院の事務担当）、来院者 9 名

### 1. 内容

この病院は district 2 の病院で、17 科が集まっています。医師 65 人、看護師 300 人、他の職員 270 人が働いています。職員全体の 70%が女性であり、医師では男女比が 1:1 です。女性の医師と看護師の平均年齢は 25 才です。救急車は 3 台あります。病院に来院するときの予約システムは行っていないそうです。一般外来では医学生の研修も行っており、大学との提携をしているそうです。この病院で一日に生まれる子供は 3-5 人で、これは日本の大きな病院と同程度だそうです。ベトナムの大病院では 50-60 人が一日に誕生するようです。入院患者への食事提供はしておらず、患者の家族が持参するのが一般的です。病室には患者のベッド同士を遮るカーテンはありませんでした。また、病院内では特別な部屋以外は冷房を使用しておらず、扇風機を使っていました。病院以外のいくつかのトイレもそうでしたが、トイレにはトイレットペーパーがなく、その代わりに水を使用するそうです。

### 質疑応答：

一般外来で診療を待っていた来院者に病院について質問しました。待ち時間については、小児科では約 5-10 分でしたが、他の混雑した科では 1 時間以上の科もありました。家から病院までは 5 分程度で着くと答えた方や、近いと答えた方がいました。医師や病院・治療費に満足しているかという質問には、ほとんど皆さん満足と答え、中には病状によって病院を使い分けるので問題ないと答えた人もいました。また、研修に来ている医学生も助けになっているという回答がありました。

入院患者とその家族にお話を聞いたところ、患者との面会時間の制限時間はなく、必ず誰かがそばにいて看病していると言っていました。

### 2. 所感

病院を見学した結果、ベトナム人の家族内の絆は強いと感じました。また病院の仕組みは縦割りの業務であると考えられました。私たちが見学している時に小さな子供が嘔吐してしまったのですが、その前には受付があったりたまに職員が周りを通ったりするものの、しばらく後に清掃員が来て掃除をするまで誰も手を出しませんでした。各自が決まった自分の業務を的確にこなすためには縦割りは役に立ちますが、病院のような緊急事態が発生

しうる場所ではもう少し柔軟さが必要なのではないかと思いました。

備考/コメント：

訪問した病院の方々は職務で忙しい中、私達の質問をうけたりもてなしてくださったりと、とても温かく友好的に対応してくださいました。また、病院職員や現地の方々と話をするときには通訳として現地の医大生が仲介してくれました。

(文責：鈴木裕香)



院内調剤薬局。医薬品の種類は豊富なようだ。



定期検診を待つ妊婦さん。  
付き添いの女性とベトナムの母子手帳をチェックしている。

## ○ Linh Xuan Ophan Education Center, Thu Duc District

訪問日時：平成 25 年 9 月 4 日（水） 8 時 30 分～15 時

訪問先：Linh Xuan Ophan Education Center, Thu Duc District

30/3 Ba Giang, Linh Xuan Ward, Thu Duc District, HCMC

訪問者：岡南愛梨、王玥、齋藤美咲、酒井佑果、野崎可織、村松（引率）、駒田（引率）

面談者：副施設長、教師、保育スタッフ

### 1. 内容

#### 施設の概要について

2002 年に設立、2010 年から HIV に感染した子どもを主に受け入れるようになる。子どもは 141 人、内 68 人が男子、73 人が女子。2 歳以下、2 歳から 5 歳、6 歳以上の 3 つのグループに分けられている。施設の主な目的は、①食事や薬を与えることと彼らの健康管理、②初等教育へ繋がる教育、③自立して生きる方法を子どもたちに伝えることである。3 年生までは施設内の学校で学ぶが、4 年生からは外の学校へ通うことで社会の中の生き方を学ぶ。始めは HIV 児を恐れる人もいたが、WHO によるイベントなどのおかげで、周囲の人たちの HIV に対する認識も改善してきている。外部からの募金や、会社からのサポートによって、子どもたちは教育を受けたり外へ遊びに連れて行ったりしてもらっている。施設には医師が 2 人いるので、毎日子どもたちは診察を受け、小さな変化にも気付ける体制がとられている。6 ヶ月おきには血液検査も受ける。

#### 質疑応答

Q ここを出た子どもたちの将来

A 高校を卒業するまでここにいることができる。その後は大学に行くか仕事の技術を学ぶ学校へ行く。そして仕事に就く人もいれば、大人向けの HIV 患者施設に入る人もいる。

Q 一番難しい課題

A 収入が充分で無いことと、HIV の子どもたちは病気にかかりやすく、また 1 人にかかるとすぐにみんなにかかってしまうので、子どもたちの健康管理。

Q どうやって子どもたちはこの施設へやってくるか

A 病院に拒まれた子どもか学校から拒まれた子どもがやってくる。または HIV にかかっている両親が子どもの面倒を見られなくなった時。

Q 医師はどこからきたのか

A 一人の医師は外部から頼んで来てもらった。もう一人は、この施設出身で医大に通った後に帰ってきた。

Q 毎年どのくらいずつ施設に来る子どもは増加しているか

A 20 人ほど。先月は 3 人。

Q 何人のスタッフがいるのか

A 83 人。昼と夜で分かれていて、週ごとに交代する。

Q 子どもが初めてここに来たときの様子

A 生まれたばかりの子どもの場合は特に問題はない。親を恋しがる子どもの場合、看護師が 1 対 1 で付いて慣れるまで助けるので、泣いてしまう子どもがいても 1 日ほどで泣かなくなる。

Q 看護師たちについて

A 孤児院で育った人が多く、80%がそのような人たち。看護師は 50 人いて、他のスタッフは事務管理等。

Q どんな時が幸せであるか

A 子どもたちが好きなので、子どもたちといるときが幸せ。

### 授業見学

年齢の違う子どもたちが同じ教室で学んでいた。左が 3 年生、右が 4 年生だったそう。先生は黒板を真ん中で 2 つにわけて、片方に講義をして最後にドリルなどの箇所を指示してもう片方に講義をする…という繰り返して授業を進めていた。今回観察した授業は国語と算数の授業であったが、その 2 つの授業の間に休み時間などはなかった。授業ごとに教科書やノートは回収され、次の授業になると先生からその教科の教科書やノートが配られていた。3 年生の算数の授業では、二桁以上の足し算の筆算を皆で解き方を合唱しながら授業を進めていた。授業中の子どもたちはとても集中していた様子だった。問題を子どもたちが各自で解いている際には先生は子どもたちを見回り、間違いや時には姿勢なども指摘していた。子どもたちはみな共通して万年筆のようなものを使用していた。授業を受ける際子どもたちは制服を着用していた。

## 2. 所感

子どもたちはみなとてもフレンドリーで積極的に私達とコミュニケーションをとってくれた。施設は想像していたよりも大きく、遊具等もあったことに驚いた。教室と生活の場を制服の着用によってきちんと区切りを置いていたことに感心した。施設としての課題で病気に対する対応があがっていたが、訪問時にいたはしかの子どもが食事の時間以外は他の子どもたちと混ざって活動していた点が気になった。こういった対応が良いのだろうか考えさせられた。



(文責：岡南愛梨)

授業の様子。厳しい指導が行われていた。3 年生までの子供が学んでいる。健康状態が良い子は 3 年生以降は、地域の公立小学校に移るとのこと。

## ○ Linh Xuan Ophan Education Center, Thu Duc District

訪問日時：平成 25 年 9 月 5 日（木） 8 時 30 分～11 時

訪問先：Linh Xuan Ophan Education Center, Thu Duc District

30/3 Ba Giang, Linh Xuan Ward, Thu Duc District, HCMC

訪問者：スタディツアー参加者全員

面談者：施設長

### 1.内容

前日までに、グループ A、B と分かれて終日子どもたちとの交流を通じて、フィールド調査を行った。今回はこの体験を踏まえ、施設長にインタビューを行った。

9 月 5 日はベトナムの新学期が始まる日。この国では、伝統的に、初日を儀式的に祝うそう。私たちが到着した頃には、残念ながら既にそれらの儀式は終わっていたが、施設長には、忙しい中インタビューの時間を割いてくださった。

### 質疑応答

- \* 年齢に応じて子供達への対応の仕方は変わる。努力はしているが、十分でない状況。
- \* もっと多くの人に来てもらい、活発的に交流できるとさらに良い
- \* 卒業後もサポートを続けて行きたい。戻ってきてここで働くことも可能。  
病気を持っていることをどのように伝えるかについて。  
3～4 歳：薬の飲み方などをきちんと教える。自分の体の守り方を教わる。  
5 歳以上：年齢、精神状態に応じて、病の事実を説明する。  
これまでに精神的苦痛を受け、落ち込んだ者はいない。しかし、そのような状況に陥った子供達を救う目的も含め、日頃から小さな悩み事が相談できるようにカウンセラーのような人は常に在住している。
- \* 体調を崩した子供のために看護婦さんに気軽に相談できるような設備もある。どんな小さな異変にもすぐに気がつけるように対応する。
- \* お小遣い制度有り。よい行いをした者には特別な贈り物をしたりする。各自のお金の看護師がノートに記入し管理している。
- \* 6 歳になると、男の子、女の子で部屋が分けられる。
- \* 性教育は 6 歳から始まる。13 歳になると、毎夏、教育がなされる。

インタビュー後、就学前の子ども達と再び触れあい、ステキな交流の機会をもつことができた。子どもの中には私達の顔を覚えてくれていて、人懐っこさに子どもたちの抱えるさみしさも感じた。

## 2. 考察

私たちのような、海外から来た人々の支援が大切であることを理解した。孤児院で働いている方達は少しでも子どもを幸せにできるようにみんな努力していることがよく伝わってきたが、まだまだ満足にいたる状況にまで達していないのが現状である。年齢に応じて対応を変えたり、病を持っていることを告げてからのメンタルケアに力を入れたりなど、スタッフの方達には相当な苦労があると考えられる。しかし、二日前に会った私の顔を覚えており、こちらに走ってくる姿から、愛情がもっともっと必要だと感じた。

## 備考/コメント

全力で走ってきて、手を握ったり抱っこをしたり…。それは私の想像を超えた、普通の子供達と何一つ違いの無い、元気いっぱい素直な子達。本当に幸せな時を過ごした。そんな彼らが将来、立派な大人として行きていけるように、もっとサポートできることを考えて行きたい。彼らと遊びながら、どうしたらこの子達がもっと幸せになれるのかを何度も考えたが、答えは簡単には見つからない。この事実をもっと多くの知ってもらい、事前に防ぐことはもちろん、社会全体で支えられるようになることが一番だが、そう簡単ではない。このまま純粋に、まっすぐな明るい子供のまま、将来幸せな大人になってもらいたいと心のそこから願う。

(文責：金子はるひ)



新学期の儀式の一端を披露してくれた。



「もっと揺らして！」前日の交流ですっかり懐いてくれた子ども達。



施設長に前日の訪問・交流を経て持った疑問点について一つ一つ丁寧に答えて頂いた。



## ○ District Hospital in District 2 訪問

訪問日時：2013 年 9 月 5 日（木） 13:30～15:00

訪問先：District Hospital in District 2

130 Le Van Thinh Street, Binh Trung Tay Ward, District 2 HCMC

訪問者：スタディツアー参加者全員

面談者：院長先生、Son さん（病院の事務担当）、産婦人科医師 1 名、産科病棟入院患者

### 1.内容

前日までに、グループ A、B と分かれて終日院内の医師、スタッフならびに通院患者にインタビューを行い、調査を行った。今回はこの体験を踏まえ、病院事務担当 Son さんにインタビューを行った。

- ◆ ここの病院、そして都市部の病院は子供を外で遊ばせることはあまり多くない。農村のほうが一般的である。
- ◆ NGO や NPO からの援助は受けていないが、慈善活動が多く行われている。チャリティツアーなども開催しており、スポンサーが参加し、そこで集めたお金を病院に寄付する形をとっている。
- ◆ 外国人の医者や看護師はいない。  
時々外国人の患者が来ても、書き読みの形をとって、交流に問題を感じたことはない
- ◆ 病室で男女をカーテンなどで分けていないことに対し、ベトナムでは一般的で、特に困ったことはなかった。
- ◆ 貧困で治療を受けられない人に対して、病院側はたくさんのチャリティ支援を受けている。多くはビジネスマンが参加している。そして、最近多くの有名なテレビメディアが病院に来て、その人たちのために予算を立て、寄付を呼びかけている。
- ◆ すべて治療に来た患者には病歴を持ち、毎回治療に来る際に持参する。忘れたとしてもとても簡単に早く、安く新しく作れる。

### 2.考察

私たちは日本の病院のイメージがあるので、ベトナムの病院を観察したとき、入り口を入るとすぐにベッドがある点、病室で男女を分けていない点など、不自然に思ったが、実際ベトナムの人に聞いてみたら、このような光景に慣れているし、全然不便と感じていないことが国民性の現れの一つとも感じた。貧困層に対しての医療費補助と

してはチャリティ支援があると聞いたが、支援には限度があるため、このような患者が安心して治療を受けられるように、今後更なる改善が求められているだろうと思った。そして、病院に外国籍の患者さんが来ても困ったことがないと聞いたが、病院の医師、スタッフと話した際、彼らの英語力に感心した。このため、意思の疎通がスムーズに行えるのであろう。ベトナムの英語教育の水準の高さが感じられ、グローバル化社会に、ベトナムが適応してゆける要因の一つだと感じた。

(文責：王玥)



病院入口にて

## ○Hoa Mi 2 Kindergarten (Kindergarten in District 5, HCMC)

訪問日時：2013 年 9 月 6 日（金） 9:00～10:30

訪問先：Hoa Mi 2 Kindergarten in District 5

11Ly Thuong Kiet Street, Ward 12, District 5, HCMC

訪問者：スタディツアー参加者全員

面談者：園長、職員

### 1. 内容

ホーチミン市内 5 区にある、1993 年に建設された、公立の幼稚園を訪問した。広さは 4371 m<sup>2</sup>程。部屋数は 24 部屋あり、3 歳～5 歳までの子ども 1279 人が通っている。クラスは、年齢ごとに約 8 クラスあり、各クラスに 3 人の先生がついている。登園時間は 7:00 からで、降園時間は 4:00 までと日本の幼稚園に比べて長い。幼稚園での食事は朝、昼、午後 2:00 の 3 回、一日に 400～500 人が目安である。8:00 から朝礼が始まり、先生と 3 人のリーダー、48 人程のスタッフ、生徒たちが一同に集まる。この幼稚園は、身体と精神の発展に焦点を当て、行動基準、社会の規則、言語を学び、睡眠の時間もある。

### 質疑応答

#### 先生への聞き取り調査から

##### ①幼稚園について

日本に比べ、見た目がカラフルで遊具も多く、豪華なように見えるが、ベトナムでは一般的な幼稚園であるらしい。年齢を満たせば誰でも入ることが可能であり、自分の住む地区の中でなら幼稚園を選ぶことができる。この幼稚園のある 5 区は公立、私立含めて約 30 個の幼稚園がある。

##### ②障害者について

この幼稚園では特別なケアが必要な障害者の受け入れはしていないということだったが、自閉症の児童の受け入れは行っていた。ベトナムでは、まだまだ障害者の受け入れは一般的ではない。

##### ③行事について

幼稚園では年に 2、3 度ほどイベントがある。市場や博物館に行く。

##### ④図書館について

小さな図書館には、絵本や漫画があり、日本昔話の「カチカチ山」まであった。また、

プールやジムの施設も充実しており、ナチュラルガーデンもあった。

#### ⑤月謝について

月謝は一般的なものであるようだ。月 150 万ドン程（7100 円）である。

#### ⑥読み書きについて

幼稚園の段階では、読み書きは行わない。小学校に上がってからとのこと。

### 2. 考察

カラフルな建物と遊具の充実さが、園内へ入ると飛び込んできた。先生の制服も明るいピンクで、とても目立つものであった。給食室を見学し、栄養管理や衛生状態がきっちり管理されていた。しかし、給食の時間に子どもが食べ物をこぼしてしまってもすぐに掃除はせず、足マットで脚を拭けばいいという場面もあった。音楽の授業を見学することができたのだが、伝統的な服について音楽にのせて歌ったり、楽器をあてるゲームをしたり、民謡を歌って踊るというクラスであった。前に訪問した孤児院の子どもたちと比べると、ふくよかで、ドレス風のワンピースを着ていて子もおり、とてもおしゃれな印象であった。カメラを向けると、少し警戒心を持っているようであった。また、社会の規範を学ぶために、交差点を作り、交通整備士の格好に扮した子どもが交通整備をし、車やバスの渡り方を学んでいた。話をただ聞くだけではなく、実際に経験することで、楽しく交通安全を学んでいた。

2010 年 JETRO 報告 (<http://www.jetro.go.jp/jfile/report/07000187/700.pdf>) によると、ベトナムの製造業・作業員の基本月給は、101 米ドル、エンジニアは 287 米ドル、マネージャーは 736 米ドルということから、一般的といっても、家計に余裕のある家庭が通っているように推察される。

### 3. コメント

今回、ベトナムの幼稚園を訪問して、空間の利用が印象的であった。子どもが好みそうな壁の装飾や上から垂れている手作りの花、一般的な遊具だけでなく、ナチュラルガーデンもあり、空間を有効に活用していた。日本に比べて子どもたちの人数が多く、先生も生徒たちも明るく、日本でもベトナムでも、子どもたちは変わらないものであると感じた。

（文責：君島英恵）



色鮮やかな園庭。

一般的な公立幼稚園であるとの説明を受けたが、通訳者の医学生から、地方の幼稚園より充実しているとの話を聞いた。



衛生的な給食室。本日は鳥の肉団子スープ。メニューは同じだが、年齢によって量を調節するとの事。給食のサンプルは保健室に運ばれ、衛生検査を受けるそうだ。



小さな図書室。カラフルで子どもたちの興味を引き付ける工夫がされていた。ベトナムの識字率は 92% 以上と高い理由がうなづける。

## ○Green Bamboo Warm Shelter

訪問日時: 2013 年 9 月 6 日 (金) 12:00～16:30

訪問先: Green Bamboo Warm Shelter

40/34 Calmette St, Nguyen Thai Binh Ward, District1, Ho Chi Minh City

訪問者: スタディツアー参加者全員

面談者: Mrs.Phat (Manager of Green Bamboo Warm Shelter)

### 1. 内容

1998 年に設立された。虐待、貧困、HIV など様々な理由でストリートチルドレンとなった少年のためのシェルター。8 歳～16 歳の少年を受け入れている。僧侶などが街でストリートチルドレンになった子供をこちらのシェルターに連れて来ることが多く、年間 100 人もの少年を保護している。まずは家族の元に戻すことが出来るかを検討し、その支援をする。少年が家族のもとへ戻ることを望まない場合はシェルターで生活をさせる。シェルターから学校への通学、15 歳以上になると職業訓練等も行うなど自立支援をおこなっている。運営資金は、Ho Chi Minh Child Welfare Foundation による基金他、シェルターの 1 階でもレストランを経営することによって金銭的なやりくりをしている。

質疑応答:

現在シェルターにいる少年の数は?

約 15 人

少女のストリートチルドレンは受け入れないのか?

こちらでは受け入れないが市内に少女用の施設がある。(The Little Rose Warm Shelter)

### 2. 考察

少年それぞれが特技や技術を身につけているのが印象的だった。コックやスポーツのコーチ、ダンスや語学の特技など、彼らがシェルターを出て自立していけるよう教育されていた。私たちはミサンガを編むのが得意な少年にミサンガの編み方を習ったが、教えることがとてもうれしそうだった。外国人ボランティアに教えてもらい英語や韓国語を話す少年も多く、観光業に強いホーチミンではホテルなどへの就職に強いという話も伺った。

### 3. 備考

マネージャーである Phat さんが入院した際、3 日間ほどの入院であったにも関わらず次々にシェルターの子供たちが心配して病院にやってきたという。シェルターの中の最年長の少年も、年下の子供達はまるで弟のようにかわいいと話していた。Phat さんの愛情や子供同士の協力でまるで家族のような温かみのあるシェルターだった。

(文責:野崎可織)

Green Bamboo Warm Shelter 参考

- <http://volunteersaigon.blogspot.jp/2013/10/green-bamboo-warm-shelter.html>
- <http://www.humantrafficking.org/organizations/276>



事務所にて、Phat さんよりシェルターの説明を受ける。



シェルター入居者の少年。ミサンガ作りが趣味。

## ○University of Medicine and Pharmacy at Ho Chi Minh City, Vietnam

訪問日時：2013 年 9 月 6 日(金) 17:00～18:00

訪問先：University of Medicine and Pharmacy at Ho Chi Minh City, Vietnam  
217-Hong Bang St., Dist.5, Ho Chi Minh City, Vietnam

訪問者：スタディツアー参加者全員

面談者：Vice President of UMP, Ms. Hoang (UMP Office of International Affairs)

### 1. 内容

大学についてから、部屋でご挨拶。日本からのお土産、大学からのプレゼントをそれぞれ交換した。それから 20 分ほど話した後、大学見学をさせていただいた。卒論を発表する部屋、図書館を外から覗くことができた。途中で大学祭に向けて催し物を作っている学生達と触れ合うこともできた。

#### 質疑応答

- \* 大学側として、留学するシステムはある。
- \* シンガポールの大学に留学することが人気になっている。(英語も同時に学べるため)
- \* ラオスの学生が留学によくやってくる。日本人学生は一人もない。
- \* ベトナムでは看護を学ぶ学生の男女比が 1:1 であるが、日本は女性が圧倒的に多い。  
日本で看護系の勉強をする男子学生数が少ない理由は、男子学生には工学、建築学など、より幅の広い選択肢があるからだと考えられる。
- \* ENT(ear, nose and throat)の分野が最も人気である。給料が良いため。
- \* 大学が医療系なので、哲学などの本は、図書館にあまり貯蔵されていない。
- \* 志願者倍率は約 17 倍の学部がある。

### 2. 考察

ベトナムの中でもトップレベルのホーチミン医科薬科大学。最近はグローバル化を目指し、留学に力を入れているようだ。生徒の受け入れはもちろん、外国への留学も推進しているように感じた。生徒みんなが英語を話せる訳ではないが、出会った生徒の中には流暢に話す人もいた。校舎は、歴史を感じさせる作りで、気候に適した風通しの良い作りになっていた。学生達は、将来の生活を見通し日々学業に励んでいる(ENT を選択する理由より)。

### 3. 備考/コメント

短い滞在時間であったが、大学見学を通して現地の学生の生活の様子を垣間みることができた。ベトナム語と英語を通訳してくれた生徒のみなさん、当日話しをしてくれた先



生など、みんなが暖かく私たちを受け入れてくれた。世界に向けてより多くの生徒を送り出せる、素晴らしい人材が集まった大学だと思う。

(文責：金子はるひ)

## 2-5 写真



Tuan 先生による講義。



Orphanage へはローカルバスを利用して移動。1 回乗継で、片道所要時間約 1 時間。



中央が施設長。



Orphanage の子どもたちとの交流。





スタディツアー通訳者の UMP 学生との交流。  
同世代ならではの話に盛り上がった。



District Hospital in District2 にて。病院事務 Son さん、産婦人科医と。



Hoa Mi 2 幼稚園にてカラフルな園庭と、  
開放感のあるエントランス。



ホーチミン医科薬科大学にて。



Green Bamboo Warm Shelter にて。



### Ⅲ.事後学習成果（徽音祭パネル）





## 1-1 バングラディッシュスタディツアー 微音祭発表パネル

# BRAC~世界最大のNGO~

## 企業的側面とNGO的側面

松本江利奈(地理4年) 有田美玖(グロ文4年)

### BRACとは

- ・1972年バングラデシュにて設立したNGO
- ・女性のエンパワメントを通じた貧困の撲滅を目指し幅広い分野で活動を展開（マイクロファイナンス、教育、保健衛生、人権保護など）
- ・総従業員数 106,507人（女性68,681人）
- ・NGOでありながら営利を目的にした社会企業を行い、これら企業からの利益を株主として受け取り、BRACの活動資金に当てている（商業銀行、小売店、乳製品、種苗会社など）

### NGO的側面

- ・主なプログラムは、マイクロファイナンス、保健衛生、コミュニティエンパワメント、人権保護、ノンフォーマルスクール、農業開発、公衆衛生など

※実際に見学したプログラム

- ・Human Rights and Legal Education Class
- ・BRAC Primary School
- ・Microfinance
- ・Community Empowerment

### Human Rights and Legal Education Class 概要

- ・法律や基本的人権に関する教育プログラム
- ・BRACから教育を受けた法律補助員が村で講義を行う
- ・字の読めない人もいるため、絵を使ってわかりやすく説明
- ・1,2日間の講義で、お祈りの日以外毎日行う
- ・村の女性であれば何歳からでも参加できる



### 企業的側面

- ・代表的な事業は、Aarong(手工芸品店)、BRAC銀行(商業銀行)であり、バングラデシュ国内で一、二を争う規模と内容になっている。これらの企業は、単に利益を生むための目的だけでなく、それ自体が雇用を創出するため、農村の女性たちを支援する仕組みになっている。

※実際に見学した事業

- ・Handicraft Production and Training Center
- ・Sanitary Napkin Production Center
- ・BRAC Horticulture Nursery
- ・BRAC Dairy and Food Project

### Sanitary Napkin Production Center 概要



- ・従業員：45人で全て女性
- ・生産目標：月に3万個(1袋に10個のナプキンが入っている)
- ・労働時間：8時から17時(食事なし、残業もなし)
- ・賃金：毎月一人当たり5000タカ(ダッカ市内と比較すると賃金は低い、郊外の中では相対的に高い)

### Sanitary Napkin Production Center ナプキンを取り巻く女性たち

- ・ここで製造するナプキンは市場には出回らない。BRACのHealth Program activitiesで活躍するHealth Worker(担当の農村の患者に対して薬を提供することを主な仕事とする女性)向けに販売される。Health Workerは、少額の利益をつけて農村の女性に販売することで収入を得ることができる。このようにターゲットを限定して製造されているため、農村の女性は市場の半額程度の値段でナプキンを購入することができる。

Sanitary Napkin  
Production Center

Health Worker

農村女性

### 考察

- ・NGO的側面と企業的側面の両方において、BRACは女性の活躍を重視しているという印象を受けた。
- ・女性が生き生きと働く姿は大変印象的であり、彼女たちこそ今後バングラデシュが発展していく原動力になるだろうと強く感じた。
- ・NGO的側面と企業的側面は独立したプロジェクトでありながら、BRACという一つの組織の中で相互補完的關係にあるのではない。
- ・企業的側面の疑問点として、BRACの企業活動が成功せず打ち切りになった際に被雇用者への対応はどうしているのかが不透明といった点がある。雇用者、被雇用者の壁をできるだけなくし、より主体的に社会に関わっていける環境を整える必要が課題としてあるのではない。





# 国際共生論実習 Bangladesh Micro Finance (BRAC)

グロ文2年 高木優希・生津千里・柳下明莉



Micro Financeは貧困者向けの小口金融の総称である。従来の金融機関からは融資を受けることのできなかった貧困者に対して融資を行うことで、貧困者の生活が改善されることを目的に世界各地で行われている。

## BRAC's Microfinance

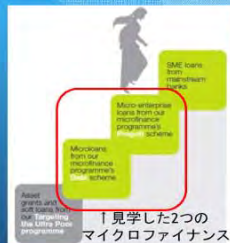
1974～ バングラデシュから

主な借り手は女性

初期：事業のエンパワー

現在：小規模なエンタープライズ

開発のサポート



活動国：アフガニスタン、パキスタン、スリランカ、シエラレオネ、南スーダン、ウガンダ、リベリア、タンザニア

## Progatiについて

- 男性も女性も借りることができる。／ 中流階級向け。
- 商業目的のローンのため、店舗を持っている ことなど、様々な条件がある。

Progatiを利用して店舗を拡大しているアシュラフさん（右）。  
薬屋を経営している。  
12年間このProgatiを利用して  
おり、これからは店舗拡大や  
商品数を増やすために、ローンを借りたいという。



## Dabiについて

- ローンを借りられるのは**女性**のみで、特に農村女性をターゲットとしている
- 女性がローンを組み始める場合は、まずそのコミュニティのマイクロファイナンスの**グループに参加**
- 借りた次の月から返済を開始し、**1年間で完済**する
- 借りる目的は**生活の質の向上**が多い。

(ex.家の修理、土地の購入、家畜の購入など)

ローンを借りるすべての女性に与えられる通帳のようなもの。  
貸し借りの記録や個人情報などが記載されている。



月に1度のミーティングでお金を返済している様子。

## BRACマイクロファイナンス 組織マネジメントと運営

オフィス、職員数共に大規模であるが組織体制とプログラム制度を整えることで地域に合わせたプログラムを展開しているのが特徴

最初にコミュニティや対象者を調査し経済状況を把握



- ・プログラムオーガナイザー（BRAC職員）
- ・プレジデント（村の女性）

を中心にBRACと農村が連携しながら運営が展開される  
月1回は必ずミーティングを開催

## BRAC マイクロファイナンスの可能性

- 顧客の経済状況にあわせた段階的なプログラムが展開されている
- **幅広い層への支援が可能**
- 巨大なNGOだが、組織体制が整えられている
- **マイクロファイナンスと教育・医療サービス**  
**職業訓練などを組み合わせ包括的なサポートが可能**
- 農村のマイクロファイナンス普及率は現在60%程度
- **今後も拡大の余地あり**



# バングラデシュ教育チーム バングラデシュ初等教育の現状

泉(グロ文3年)、片山(英文2年)、須崎(人文1年)



## バングラデシュの初等教育

- ・小学校数: 92,000校 小学生数: 1,700~1,900万人
- ・教員数: 37,000人
- ・就学率: 96.8%(男子:95.0% 女子: 98.8%)
- ・ドロップアウト率: 26.2%
- ・5-5-2年制⇒就学前の1年が導入
- ・5つの主要科目+宗教の科目
- ・イスラム圏国家で唯一、女子の方が就学率が高い
- ・5年間で8300億円の予算  
(そのうちの87%はバングラデシュ政府から)

## BDP Primary School

- ・NGO BDP(Basic Development Partners)の運営する小学校
- ・JOCVが派遣されている
- ・5/6県に87校、小学校児童数2万2000人
- ・ドロップアウト、通学困難世帯子供などスラムの最下層の子供を対象
- ・全校生徒256人:教師市人+JOCV2人

## Non-Formal Primary School



- ・対象8? 10歳 学校に通っていない子供
- ・アクセシビリティの良さ
- ・教師 男性30%:女性70%
- ・毎月BRACによる教員研修
- ・中等教育への進学率 100%



## バングラデシュの教育の現状と問題点

- ・教育・教師の質
- ・午前・午後の二部制
- ・小学校の数、学生数は日本と比べて多いが教師の数が少ない
- ・よい学校が都市部やチャータンに偏っている
- ・校舎が壊れかかっている
- ・女子生徒はトイレが男女別でよいと学校に来ない
- ・150~300万人の子どもの学校に通えていない
- ・高いドロップアウト率  
⇒1.貧困 2.学校と家の距離 3.教育の質



ベンガル語の教科書で出てきたゲームを実験中

校長先生が他のNGOの小学校を参考に取入れたい設備

## Class

- ・1クラスのみ (30? 33人)
- ・5年間のコース
- ・公立小学校のカリキュラム
- ・教科書、ノート、鉛筆の配布
- ・5教科+宗教、音楽、ダンス



## JICAによる教育協力

すべての子どもに質の高い初等教育機会を!

- ・先生の質の向上: 教員研修、授業研究、授業のモニタリングの導入や教員用ガイドの作成
- ・理数教科書、読者のガイド
- ・JOCV 15名の教育隊員の派遣
- ・日本での理数教育、授業研究などの研修
- ・日本からの毎年5億円の無償援助 (半分の2.5億円は9つの指標の達成度による)
- ・コミュニケーションの促進  
ラジオ放送、School Diary



子供たちに読書の楽しみ方を教える JOCV

ベンガル語の授業

## まとめ

- ・事前学習でバングラデシュの教育について調べたときは、ドロップアウト率が高いなどネガティブなイメージがあったが、実際に学校を訪問してみると、子供たちが楽しんで積極的に学校に通っていることがわかった。
- ・バングラデシュで見た他のプログラムにおいても、教育の必要性を非常に強く感じた。いろいろなアクターが幅広く教育を提供することで、すべてのプログラムが円滑に回るのではないかと思った。





# 国際共生論実習 バングラデシュ班 「母性保護サービス強化プロジェクト」

長屋裕子・乙村瞳



## 【調査目的】

バングラデシュは新生児・妊産婦死亡率が高いが、それを改善すべく現地では、

今 何が行われてるかを調査すること

## 【訪問先】

バングラデシュ ノルシンディ(県)の村でのJICA活動・その関連施設

**母性保護サービス強化プロジェクトとは**  
(Safe Motherhood Promotion Project)

- ・バングラデシュ国(保健家族福祉省)とともにJICAが実施しているプロジェクト

背景：世界では開発の全体的な問題に対して「ミレニアム開発目標(MDGs)」を定めて取り組んでいる

1. 極度の貧困と飢餓の撲滅
2. 初等教育の完全普及の達成
3. ジェンダー平等推進と女性地位向上
4. 乳幼児死亡率の削減
5. 妊産婦健康の改善
6. HIV/エイズ・マラリア・その他疫病蔓延の防止
7. 環境持続可能性確保
8. 開発のためのグローバルなパートナーシップの推進

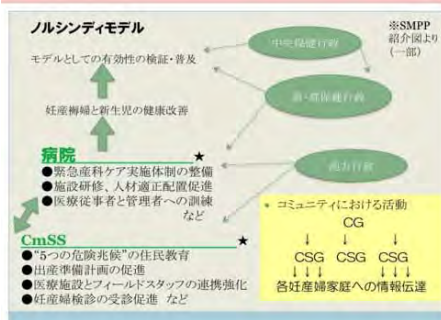
→SMPPの取り組みへ→

① リミエスタディでの妊産婦健康増進活動  
② 保健施設建設の改善活動



これまでのSMPP活動の流れ

- ・SMPP1 (フェーズ1: 2006.7~2011.6)
  - ・モデル地域での実施体制を整える・・・
  - ★ 中央レベルに「プロジェクト合同調整委員会(JCC)」
  - 県レベルに「プロジェクト運営委員会(DPIC)」
  - 郡レベルに「郡プロジェクト運営委員会(UPIC)」設置
  - ★ 有効なアプローチの国策への反映
  - ・コミュニティサポートシステム(CmSS)の確立
- ・SMPP2 (フェーズ2: 2011~2016予定)
  - フェーズ1の効果をもったノルシンディモデルの普及



**各妊産婦家庭にて**

コミュニティサポートメンバーは自分が担当する妊産婦の家を定期的に訪問し、出産前後の指導を行う。ここには、妊婦だけでなく、夫、姑、夫の兄弟等、親族が集まる。もしものときに、誰がいても対応できるように、知識をより多くの人で共有している。

主な指導内容

- “5つの危険兆候”の確認(出血した時/めまい・頭痛がする時/発熱した時/赤ちゃんが出てきてしまった時/意識がなくなった時)
- 家庭内意思決定者への妊産婦支援の理解
- 緊急時の搬送用交通手段の確保
- 妊産婦が必要なケアの確認(予防接種・食事・出産準備など)
- 出産費用の貯金のすすめ(募金箱を用意しておく)
- 定例会議での報告



**各妊産婦家庭にて**

コミュニティサポートメンバーは自分が担当する妊産婦の家を定期的に訪問し、出産前後の指導を行う。ここには、妊婦だけでなく、夫、姑、夫の兄弟等、親族が集まる。もしものときに、誰がいても対応できるように、知識をより多くの人で共有している。

主な指導内容

- “5つの危険兆候”の確認(出血した時/めまい・頭痛がする時/発熱した時/赤ちゃんが出てきてしまった時/意識がなくなった時)
- 家庭内意思決定者への妊産婦支援の理解
- 緊急時の搬送用交通手段の確保
- 妊産婦が必要なケアの確認(予防接種・食事・出産準備など)
- 出産費用の貯金のすすめ(募金箱を用意しておく)
- 定例会議での報告

**現地の人の声**

妊婦さんのお話

このように、出産前後の指導が受けられるため、安心して出産をすることが出来る。また、今まで知らなかったことを学ぶことができたため、より安全な出産が行えると思う。

お姑さんのお話

私も自分の出産時は伝統的な方法を当たり前にやっていたが、今はこれによって母子ともに安全な出産を行える形になっている。私も嬉しい。今は、妊婦がなくなるとお金のうちの子もなくなると脅かされてくる人がいる。それは間違っている。それは妊婦さんのために家族のある暮らしを幸福にしようとしている。

実際の様子

**訪問・見学を通して&まとめ**

- ・Birth planning sessionでは、妊婦だけでなく家族も一緒にいき、夫と姑にも意識をもつよう訴えかけ、各自の責任を強調しているのが印象的だった。
- 文化的背景を考慮しての活動だが、家族全体で妊婦・出産迎えるという体制は日本でも争ふところが大きいと思った。
- ・母親へのインタビューからは、地域の中で担当してくれる人にサポートされている感覚ももたれていることが感じられた。
- 支援では知識・情報の教育的側面も大きい。現地の様子からはサポートされている感覚があったりと、一方通行の情報伝達ではなく、双方の相互コミュニケーションもなされていることがうかがえた。
- ・県レベルの病院は分娩室や妊婦専用の診療室があるなど設備体制が進んでいるようだが、地方病院(コミュニティクリニック)は住診のみ、設備・資源の差が大きかった。
- 資金不足や医療者不足問題がまだまだ大きく、この部分は住民の力だけの改善は難しいため、今後も政府やNGOのサポートが必須と考えられる。

## まとめ

ここ数年で、新生児・妊産婦死亡率がかなり減少している根底にあるのは、コミュニティの住民の底力であると感じた。トップダウンの指導だけでなく、住民自らによるボトムアップエンパワーメントが機能しており、双方のバランスがよいと感じられた。この政策がこのように機能しているのは、バングラデシュの積極的な国民性あってこそのものであるのではなかろうか。しかしまだまだ問題もあることは確かである。現地の底力を目の当たりにし、あと10年後には保健分野だけでなく、その他の分野でも大きな進展を見込めると感じた。





## 1-2 ベトナムスタディツアー 徽音発表パネル

# ベトナム医療の現状 ～HTMC District hospital2への訪問から～

野崎香織、王ゆえ、齋藤美咲

### ○調査内容

ベトナムの病院は、国立病院、省病院、郡病院、地域病院の段階に分けられており、国民はレファレルシステムという疾患状況に応じて適切な医療サービスを受ける病院同士の患者の紹介体制によって病院に行く。

私たちはベトナムのホーチミン市にある公立病院を訪れ、インタビューも含め施設見学をした。先のようなシステムにおいて、ベトナムの医療の現場はどんな様子なのか、実際の利用者であるベトナム国民やサービス提供側の医療スタッフが病院に対してどう感じているのか、また現在ベトナムが直面している問題と課題について調査した。

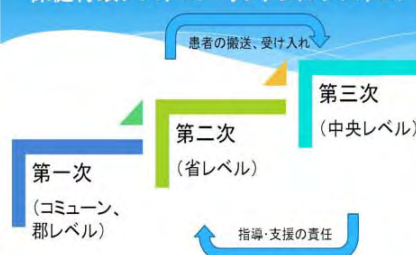
### District Hospital2 in Ho Chi Minh City



病院の門

2005年 着工  
2008年 開院  
診療科数 18  
労働者数 220人  
医師:看護師 1:2.7  
患者:医師 50:1  
(内診、外来計/日)  
満床率 約90%

### 保健行政システム＝リファレルシステム



### コミュニティとの関わり



### リファレルシステムの改善点

Health & Medical center → 軽い疾病、怪我  
＝機械や医療の質は不十分？

その結果…

疾病の重さに関わらず、患者はより大きい病院に集まる。  
→ ベッド不足、長い待ち時間

### 手術見学



### 小児科で行なったインタビューから

- ＊相手… 2歳の娘を連れてきたお母さん。
- ＊語り… 地元で誤診を受けたのでこの病院へ。  
この病院は信頼できる。遠いけれど、この病院にまた来たい。
- 子どもをみるため、お母さんはほぼ泊まりこみ。  
家族は働いており、病院も家から遠いため頻りに来れず、必要なものを調達するのも、お母さん自身でやらなければいけないから大変。
- 病院には満足している。

### 医師のインタビューから

- ＊相手… 公立病院の産婦人科医師
- ＊語り… 自分の意思で私立病院から公立病院に転勤  
私立病院はより高いサービス水準と技術を持っているが、社会貢献がしたくて公立病院に来た。  
今感じている最大の課題一医師と看護師の不足(産婦人科の医師は全部で5人、夜勤はほとんど1人しかいない)

### 施設、設備の質



<設備>  
CTやレントゲン、高額な医療機器も取り揃えていた。

<施設>  
明るく開放感のある設計。  
風通しが良い。



### Hospital in district2

- ＊全体として、質は良い。  
(設備や施設がいいが、衛生面やサービスでは？)
- ＊人々は病院に対して、満足していることの方が多いように思えた。  
→ この病院が特別なのか？  
→ もっとローカルなクリニックなどはどうなのか？



# ベトナムの暮らしから見たこと

君島英恵 鈴木裕香 金子はるひ

内容：ホーチミンの施設へ訪問した経験を通して、ベトナムの人々と直接会って知った人々の暮らしを、異なる視点からわかったことや考えた事を示す。

訪問場所：・(HIVに感染した子供のための) 孤児院  
・病院  
・保育園  
・ストリートチルドレン シェルター  
(ストリートチルドレン保護ボランティア施設)



## ベトナムの環境比較

～都市と養育環境から～

君島英恵



### ベトナムの都市比較 at ホーチミン市

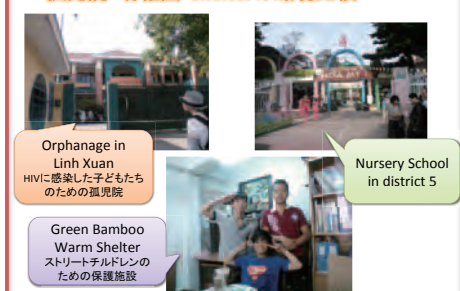
中心部

郊外

ホーチミン市の中心部  
・近代的、西歐的・清潔感がある  
・旅行やホテルなどの公的機関があつまっている

郊外  
・建物が低い・生活感がある  
・衛生状態は中心部に比べ悪い

## 孤児院・幼稚園・shelterの環境比較



Orphanage in  
Linh Xuan  
HIVに感染した子どもたちのための孤児院

Green Bamboo  
Warm Shelter  
ストリートチルドレンの  
ための保護施設

Nursery School  
in district 5

## 子どもたちの養育環境比較



Orphanage

Nursery School

Shelter

この孤児院は、国からの援助を受けているため比較的設備が良い。スタッフの質は良いが、食料の質は良くない。英語やパソコン、楽器、またパソコン、楽器管理や家も専門によって管理されている。

日本の幼稚園と比べても、遊具が充実しており、綺麗な環境であった。おもちゃも多く、手作りのものもある。図書室もある。このような幼稚園は、一般的であるようだ。

国からの援助は受けておらず、レストランを経営して生活費を稼ぐほか、寄付に頼っている。学校にいくことが出来る。また、ボランティアに就ける人が多く、英語や韓国語など、言語をならうこともできる。男の子専用のため、数人しかいない。皮も多量にいらす。また、子どもたちは家事を自ら行う。

## ベトナム 孤児院とストリートチルドレン

「孤児とストリートチルドレン」

家族と離れているという点では同じだが異なった印象を受けた。両者を比較して違いを考えてみる。

理学部生物学科3年 鈴木裕香

### 孤児院(HIV感染者のための)

- ・ HIV 感染者が治療を受けながら一般の人々と離れて暮らす施設。生まれてすぐ親から離される子や、少し大きくなってから感染して来る子供など。医療・教育は院内で受けられる。外出機会は少ない。100人以上の集団生活。
- ・ 国からの支援あり
- ・ 自分自身の所有物が少ない。  
(私たちが持っていた紙とペンに過剰に反応していた)



### ストリートチルドレン シェルター

- ・ 学校へ通う子供もいる。
- ・ 十数人で生活。家族に似た関係を築いている。
- ・ ボランティア資金は少ないが、レストラン経営で工夫。シェルの1人は元ストリートチルドレン。ボランティアの人の出入りがある。



## 比較・まとめ

孤児院

- ・設備は、医療を含めてある程度整っている。一方で閉鎖的。
- ・集団生活で個性を主張できる場が少ないのではないか

シェルター

- ・資金は少ないが、ボランティア団体として工夫して活動。
- ・家族のような生活を築いている可能性。
- ・開放的。

「まとめ」

- ・家族ではなくてもそれに近い強いつながりを築く事ができるのではないか
- ・コミュニティや自由な活動からの刺激によって得意なことや個性を発見できる

## ベトナムにおける水の使い方 金子はるひ(生活科学部人間環境科学科2年)

- ・ テーマ:  
ベトナムでは水をどのように確保・利用しているか。
- ・ 設問:  
水資源の価値が高まっている現在。  
先進国日本と新興国ベトナムでの水の使い方は異なるだろう。  
その良い点悪い点を考え、その良い点を日本社会、そしてこれから世界の未来にどう応用できるか考える。  
ベトナムのこれからの課題を考える。

## 調査結果・考察

- ・ 目的によって水の使い方を分ける(→多元給水方法)  
飲料水として:ペットボトルの水(毎日配達される)  
×水道水(加熱すれば良い)  
トイレ水として:水道水、雨水  
トイレは自分水を汲んで流す方式。  
トイレペーパーは基本的に持参。
- ・ 十分な水の供給がなされていない?  
コップの洗い飲み(洗わない)右側の写真参照。  
プールの授業がない(小学校・中学校・高校は基本的になし)  
→維持費用が高いためか?雨は豊富、川もたくさんある。

## 調査結果・考察

- ・ 節水・衛生の概念。  
・ 食前に食べる人自身が最終的に食器をきれいにする。  
・ 水の代わりに紙を使って食器をきれいにする。  
写真左:緑のケースにティッシュがあり、それでシルバーを拭く。  
・ 尚、食器の洗い方は日本と同じで洗剤を使って汚れを落とすした後、水で良く流す。  
写真右:幼稚園の給食室。衛生管理の問題はない。

## 考察・課題

- ・ 良い点:目的に応じて使用する水の種類を変える。  
・ 水だけでなく、紙を使って食器をきれいにする。  
→節水につながる
- ・ 悪い点:水配達の労働力が必要。(若い世代)  
・ いずれでもどこでも安全な水を自由に飲むことができない。  
・ コップの回しのみなど、衛生的によろしくない。  
→雨は豊富なものの、それを効率よく浄化することができない。
- ・ ベトナムのこれからの課題:  
効率よく水を浄化するシステムを導入し、  
すべての人がどこでも安全な水を手に入れられるようにすること。尚、節水はこのまま続けて行くことが望ましい。



# 様々な背景をもつベトナムの子供たち

新井佑理(グロ文2) 酒井佑果(グロ文2) 岡南愛梨(生活1)

今回の訪問において、**孤児院**、**幼稚園**、**ストリートチルドレンのためのシェルター**のそれぞれで子供たちと触れ合い、施設の様子を観察したりお話を聞くことができた。日本ではほとんどの子供たちは同じような環境で生まれ、育つため、様々な背景を持つベトナムの子供たちとの出会いは貴重なものだった。

本展示では、各施設の概要と取り組み内容について示し、子供たちの教育や支援にどのような工夫がなされているか、また、今求められていることは何かを明らかにし、考察としたい。

## 孤児院(Linh Xuan Center)

- ・HIVに感染した0〜17歳までの140人
- ・10歳までは施設内の学校、それ以降は地域の公立学校

スタッフ  
83人(うち50人がナース)

- 目標
- ・生活を支え、健康状態を維持
  - ・社会復帰、適応へのサポート



## 一日の流れ

5:30 起床、体操、朝食  
7:00 ヨーグルトなど  
7:30 薬、シャワー  
8:00 幼稚園  
10:30 昼食、昼寝  
14:00 牛乳、ケーキなど  
14:30 幼稚園  
16:00 夕食  
17:00 フルーツなど  
17:30 シャワー  
18:00 自由(テレビ)  
19:00 牛乳  
19:30 薬、歯磨き  
20:00 就寝

## 健康管理

- ・付属の薬局が中心
- ・毎日二回の服薬の徹底
- ・定期的な血液検査の実施
- ・感染の原因となりうる傷口の手当



◎栄養管理  
◎衛生管理

## 心のケア・自立支援

- ・キャリア教育
- ・ヒップホップやエアロビクスなどの課外活動
- ・同級生の保護者への理解促進
- ・遠足や、ボランティアとの触れ合い(思春期の子供たちへの配慮が必要)
- ・6歳ころから、年齢に応じた形での段階的な性教育や、病気についての教育



スタッフは、一人一人の言葉にしっかりと耳を傾け、子供との秘密は必ず守ることで、心を預けながら相談できる信頼関係を築いています。

## 幼稚園



- ・24クラス、子どもは1000人以上
- ・園長先生1人、教頭先生2人、先生57人、スタッフ48人
- ・1500,000VND(7500円)/月
- ・給食費は28,000VND(140円)/日
- ・活動時間:7時~16時
- ・District5の、ごく普通の幼稚園



玩具やおもちゃがとても豊富である。

物も含め園内全体がとてもカラフルで、子どもたちの遊びたいという気持ちを引き出す。

手作りのおもちゃや絵本が多い。



- ・先生はショッピングビルの制服着用。
- ・年に2-3回、動物園や美術館、プール等に行き遊びに行く。
- ・洗髪や歯磨き等も幼稚園で学ぶ。
- ・毎年政府が新しい教育方針を提案してくる。
- ・カリキュラムがしっかりと考えられた給食。
- ・伝統的な衣装や音楽で授業をすることがある。

## ベトナムのストリートチルドレンの現状

- ・ベトナム全土で19000人、ホーチミン市には8500人いると言われている(2003年調査)
- ・ストリートチルドレンの発生する理由として(1)家庭崩壊(2)食糧不足(3)経済移民が挙げられるが、原因は複雑

## Green bamboo shelter

- ・様々な事情でストリートチルドレンになってしまった子どもたち(男の子)を保護
- ・24人程度まで受け入れている
- ・最終的なゴールは、3ヶ月から6ヶ月以内に子どもたちを家族のもとへ引き合わせる事
- ・様々な国からのボランティア・インターンシップを受け入れている



レストランはこの施設でやっていて、利益は団体の運営のために使われます。

私たちのために、「グリーンセオ(ベトナム風お好み焼き)」を作ってくれました!

最後に、私たち全員のためにミサンガを手作ってくれました!

## 考察

- ・孤児院やシェルターでは、子供たちの現在を支えることだけではなく、社会復帰を見据えた取り組みがなされている。また、各国からのボランティアを受け入れて子供たちと共に支えたり交流の機会を与えようという姿勢が見える。
- ・幼稚園は、規模が大きく派手というイメージが印象的だった。豊富でカラフルな遊具、手作りのおもちゃや絵本、伝統的を重視した授業などの例から、子供たちの情緒を育てつつ伝統を継いでいこうという意識を感じられた。

## <今後の課題>

- ・孤児院やシェルターでは、“調査される対象”になりうる子供たちへの精神的配慮が必要である。特に思春期の子供たちは、施設外の子供たちとの差異による不安感や辛さを感じやすいということを考慮したうえで触れ合うべきだ。
- ・孤児やストリートチルドレンにならずに家庭内で幸せに暮らしていけるようにするにはどうすればよいか、考えていきたい。



## IV. 資 料



# ①募集概要

(お茶の水女子大学シラバスより抜粋)

科目名	国際共生社会論実習 国際共生社会論フィールド実習 グローバル文化学実習
科目区分・科目種	全学共通科目
クラス	全学科
担当教員・所属	北林 春美 [グローバル協力センター] 榊原 洋一 [子ども発達教育研究センター]
主担当学科	グローバル協力センター
履修年次	1～4年 博士前期課程
受講条件	海外調査を実施するため、受講者の数を制限します。 履修希望者向けの説明会（5月）の後、書類審査で受講者を決定します。 受講希望者は説明会に出席してください。 受講者は事前学習、事後学習、報告会への参加が必須。海外調査のみの参加、聴講は認められません。
授業の形態	講義、討論、実習、発表
教科書・参考文献	参考文献、資料は事前学習の際に指示します。
評価方法・評価割合	小論文（レポート）＝調査報告書 60%、 出席＝事前事後学習 20%、 発表＝グループワークへの貢献 20%
主題と目標	グローバル協力センターは「グローバル社会における平和構築のための大学間ネットワークの創成—女性の役割を見据えた知の国際連携—」事業（平成22年度～25年度）において学生による開発途上国調査を実施している。この調査は、専攻・学年を問わず開発途上国の社会・経済・政治にかかわる問題や国際協力に関心を有する学生（学部・大学院博士前期課程）が、途上国における研究・実践の実績を有する教員の指導の下で事前学習と現地調査（約1週間）を実施し、その成果をレポートにまとめて学内で発表することにより、文献を通じた学習とは異なる密度の濃い学習を行うものです。 現地調査は、大学、国連機関、政府援助機関やNGOの他、保健施設、学校、住民組織等への訪問、視察、講義と農村地域での



	<p>聞き取り調査や住民や若者との意見交換（英語による）からなります。また、聞き取り調査や報告のとりまとめにおいては、参加学生が協力して調査計画や結果プレゼンテーションを取りまとめ、学部・学年横断的に共同作業を行います。現地調査での体験や学びは、各自の専攻のさらなる学習や国際協力の実践活動（インターンシップ、ボランティア）、さらには国際協力に関わるキャリア形成のきっかけになることが期待されます。</p>
授業計画	<p>科目説明会（5月7日 12：20 から 13：10 および 5月9日 12：20 から 13：10 の2回開催。場所学生センター棟 4F 第5会議室）どちらか1回参加してください。</p> <p>事前学習 1～6 （6月～8月。日時は後日掲載）</p> <p>フィールド調査（8月末～9月中旬の7日間程度）</p> <p>レポート提出（9月下旬）</p> <p>事後学習 1～2 および 報告会（10月）</p>

## ②全体スケジュール

<b>出発前</b>	
履修説明会	5月7日（火）12：20～13：10 学生センター棟 4F 第五会議室 5月9日（木）12：20～13：10 学生センター棟 4F 第五会議室
履修者募集	5月7日（火）13：10 ～ 5月23日（木） 23：59
選考結果の通知	5月31日（金）12：00
第1回説明会 （合同）	6月7日（木）16：40～18：10 学生センター棟 4F 第五会議室
事前学習	<p>6月7日の説明会実施後、2回の公開講座の受講、訪問国別に4回の事前勉強会を通じ訪問国の社会経済や関心分野について学習した。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・公開講座 6月22日 6月29日</li> <li>・バングラディッシュスタディツアー 7月5日 母子保健講義 講師：JICA 平岡久和氏 7月12日 勉強会 7月19日 勉強会 8月29日 安全講習会</li> <li>・ベトナムスタディツアー 6月19日 勉強会 7月17日 榊原先生講義 8月5日 ハノイ教育大学学生との勉強会 8月25日 安全講習会</li> </ul>
<b>現地調査</b>	
バングラディッシュスタディツアー	8月31日（土）～9月7日（土）
ベトナムスタディツアー	9月1日（日）～9月7日（土）
<b>帰国後</b>	
調査報告会 （合同）	10月4日（金）16：40～18：10 大学本館カンファレンスルーム
パネル展示	11月9日～10日 微音祭（本学学園祭） 場所：大学生協マルシェ

### ③-1 事前学習（公開講座）概要

6月22日 演題：「難民と人道支援 -東日本大震災の現場で考えたこと-」

講師：大阪大学大学院人間科学研究科 中村安秀教授

報告者：鈴木裕香（理学部生物学科3年）

2013年6月22日（土）に難民や被災者への支援について、大阪大学大学院人間科学研究科教授でNPO法人HANDS代表理事の中村安秀氏を講師としてお招きし、公開講座が開かれました。中村氏はアフガニスタン難民キャンプやインドネシアで活動なさり、東日本大震災後には被災者の支援にも尽力なさっています。

およそ2時間の講義は「難民」の説明と海外の難民キャンプでの支援活動の説明から始まり、その後は東日本大震災の被災者に対する支援の現状を話していただきました。さまざまな現場での支援活動のご経験から、各々の支援体制における評価される点や問題点が具体的に説明され、かなり現実感のある講義になりました。また、異なる場での活動経験が別の現場でより一層活きたという、経験豊富な先生ならではの体験談を聞かせていただくことができました。

さらに国・専門家や支援者全体が考えるべきこと、支援のありかたについてのご意見は、被災地や難民キャンプのような現地の外部にいる私たちがどのようなことを目標として活動するべきかに直結するものであったため、とても有意義な内容だったと思います。

最後に、日本の強み・被災者の方々の未来に向かう姿勢・被災地の子供の可能性について、多数の難しい問題が存在する中で被災者が強く生きていることが伝わるものでした。

講義の後には複数の参加者から多くの質問が活発に時間一杯になされ、参加者が興味をもって積極的に講義を受けていたことが見受けられました。どの質問も支援での問題点や重要な点を的確についたものであり、具体的な議論になっていました。

実際に活動に関わる方からその経験を聞くことによって実際の状況を想像しやすく、参加者が自ら考えることの助けになり、貴重な講義になったと思います。

6月29日 演題：「国際協力ボランティアへの道」

講師：国連ボランティア計画 東京事務所 長瀬慎治駐在調整官

JICA 青年海外協力隊事務局 池上恵美主任調査役（本学卒業生）

報告者：長屋裕子（人間発達科学専攻M2）

2013年6月29日（土）に、国際協力ボランティアについて、国連ボランティア計画（UNV）駐在調整官の長瀬慎治さんと、JICA 青年海外協力隊事務局 募集課主任調査役の池上恵美さんを講師としてお招きし、公開講座が開かれました。

長瀬さんからは、国連ボランティアについてご紹介いただきました。イメージビデオも見

せていただき、ボランティアが現地の人とどのようにかわり、貢献活動をしているのか、現地で過ごしている雰囲気を知ることができました。

国連ボランティアは、日本人は比較的少なく、応募資格は25歳以上、職務経験が重視されるそうです。このように聞くと、今の私たちには敷居が高いように思えましたが、同時に、それだけ国連ボランティアの即戦力としての活躍が期待されていることが感じられました。一方で、若者のボランティア活動参加は推進されており、国連ユース・ボランティア・プログラム設立の準備が始められていたり、翻訳や通信教育に関するオンライン・ボランティアなどの形もある、とのことでした。Facebookでの広報も積極的にされており、国連ボランティアへの憧れが増すとともに、その存在が身近に感じられるようになりました。

池上さんからは、青年海外協力隊についてご紹介いただきました。青年海外協力隊は、日本国籍があれば20歳から応募可能であり、参加者の多くにとっては今まさに可能な国際協力ボランティアと言えるでしょう。過去の参加者のデータから、ボランティア帰国後の進路・就職先、参加するまでの経緯とその後についてもお話いただき、ボランティア活動がその後の人生にも活かされることが感じられました。

ボランティアに関心があっても、“自分の専攻って何だろう…”“自分の専門分野・専攻が、直接国際協力に生かせそうにないのだけど、活動できるだろうか”と尋ねる人もいました。そのような質問に対して、長瀬さん・池上さんは、今は専門が見えていなくても、意欲を持ち続けていれば大丈夫とお話してくださいました。国連ボランティアと青年海外協力隊、両者とも国際協力に関するボランティアですが、両者の特徴・違いなどを知ることができ、国際協力に関心のある受講者は、ぜひ自分たちもやりたい！という想いが高まる講義でした。

お二人とも、これまでの経験者の例やご自身のご経験を踏まえてご講演くださり、自分の人生、キャリアにどのように、国際協力ボランティアを位置づけていくか、ということを考えられるとても有意義な講義でした。時間一杯まで質疑応答は続き、会場の皆さんが、国際協力ボランティアに刺激を受け、意欲・関心をもっている様子がうかがえました。ここで得られた積極的な気持ちを、ぜひ実行に移していきたいと思いました。

### ③-2 事前勉強会（8月5日ベトナムスタディツアー）概要

報告者：新井佑理（文教育学部2年）

8月5日、本学のサマープログラムに参加中のハノイ教育大学の3名のベトナム人学生を招いて9月に実施する「国際共生社会論実習」スタディツアー事前勉強会を行う機会を得ました。3つのグループに分かれ、それぞれにベトナム人学生に加わってもらい、現地の医療・教育施設の現状や滞在中の注意点まで詳しく話を聞くことができました。英語を専門に学んでいるということで流暢な英語で会話をリードしてくれました。時にはベトナム風の英語が混じることもあったため、現地の英語に慣れる機会にもなりました。ディスカッショ

ンの内容は多岐にわたりましたが、どのグループも現地で調査を行うことになっている施設についてたくさん話を聞くことができたようです。私のグループも孤児院や学校について詳しく知ることができました。私のグループで話をしてくれたボーさんは孤児院でボランティアをしたことがあるということで、子供たちの日常の行動パターン、施設が抱える問題点、子供たちと接する中で彼女自身が学んだことなどを率直に話してくれました。文献調査だけでは決してわからない現実感の伴った話を多く聞くことができ、現地調査の際の心構えや姿勢を見直す契機となりました。また、ベトナムと日本それぞれにおける教育の特徴を紹介し合う中で、差異に気づいたり新たな問題意識が生まれたりし、今後につながる大きな収穫が得られました。特に、ベトナムの50人を超える大規模クラスの話から、教員不足や教員養成への関心が高まりました。他にも、滞在の時期の天候や気温、市街地の様子、持ち物の携帯の仕方や交通の注意点、美味しいベトナム料理や有名な観光地などを教えてくれ、ベトナムの概要がつかめたような気がします。

私たちと同じ女子大学生ということで、終始和やかな雰囲気の中でディスカッションを行うことができました。

---

グローバル社会における平和構築のための大学間ネットワークの創成  
ー女性の役割を見据えた知の国際連携ー

「国際共生社会論実習」「国際共生社会論フィールド実習」  
スタディツアー（バングラデシュ、ベトナム）  
実施報告書

2014 年 1 月

お茶の水女子大学 グローバル協力センター発行

〒112-8610 東京都文京区大塚 2-1-1

Tel/Fax: 03-5978-5546

Email: [info-cwed@cc.ocha.ac.jp](mailto:info-cwed@cc.ocha.ac.jp)

